忠順

武藏野に見し月影を唐の山のふもとにけふみつるかも

をのれも同しく

見よや人今唐にすむ影は我秋津洲の月の光を

もろこしの此港江の月今宵古郷人とともに見る影

○九月十五日晴八十二度けふの新聞紙とて見せけるか英佛天津より攻入終に北京に至り支那咸豐帝は韃靼に落行しといふ

七月四日に始り八月廿九日に落城なるよし（後に聞は和議成りしといふ）支那は弱兵にして韃兵大にさゝえしといふ國中にも明末再興を名として賊起り且長毛の賊と唱へて大につのるよし海岸諸港の炮臺とりで樣のものは皆英佛燒拂しよし四百余州の中華といふ國威衰たればかく成ぬ歎へし恐るへしこれ等の事は別記す此港に病院（軍艦を用ゆ）を有て戰爭にてきつ受しもの皆爰に送り治療して本邦に歸すといふ

○九月十六日晴八十二度

○九月十七日晴八十二度我漂流人米利堅の商船に乘組居て歸國の事を願ふよし人をもて告けれは船に呼て糺せは藝州の二島といふ所の百姓の子にて水夫渡世せし龜五郎とて三十五に成りしか十年前攝州灘より江戸へ航し歸りの時十月頃紀州浦にて難風に逢ひ六百里程沖に吹流され五十日漂流せしうち米利堅の商船にたすけられサンフランシスコへ上陸せし時は十七人成りしか一人は死失一人は彦藏とて米人と成りて神奈川に至り一人は治作とて去年函館に歸り其余は行衞をしらすといふ此度商船に雇はれサンフランシスコより五十日にして此港に至りしか日本使節と聞て歸朝を願ふよしを言たりされは船將に告て此地のコンシュルに引合同船して歸國の事に決し江戸に至りハルリスより改て渡す事となすよし也多くは彼地に止りあるは外國の風俗に成て御國へ來り我儘言もあるにかく歸國を願ふは殊勝の事也

○九月十八日晴八十二度今朝十一時香港出帆午後洋中に出て暮るまて支那の地方を見る東をさして艤ける

○九月十九日晴東北風八十三度（北緯二十二度二十八分東經百十七度十二分）港より百七十五里

○九月廿日晴東風八十三度（北緯二十二度十一分東經百二十度十五分）百六十八里朝十時頃より台灣の高山連りて見ゆ此島に添ひて呂宗との海峽を東へ出小島二つ越して針路は東北の北をさして航す台灣はやゝ蝦夷しまほともあるへし季候よろしけれは物産多し支那領にして縣令を置しか近頃騷亂の爲に廢して今は土人のみ住て無人島にひとし能港もあるよし佛人專ら覬覦せしといふ此島を開て支那の亂を避るものを移して我版圖に入なほ國力盛大に成るへしと思ふ

○九月廿一日晴東風八十三度（北緯二十三度東經二百十二度五十五分）百七十里

○九月廿二日晴東風八十四度（北緯二十四度十三分東經百二十五度五十七分）百八十里

○九月廿三日晴東風八十一度（北緯二十六度十三分東經百二十八度十三分）百七十三里數月の航海もはや御國近く成けれは名殘の饗膳とて船將の室に招けるまゝ行けるか日頃のうさをかたりまた謝辭を述て酒をすゝめけるもうれし江戸に行て滯船中はおのれ等をはしめ妻子を誘引して船に來れよといふもまた我國の風をしらねは彼の俗にならひて云もむへなり程能答置もくるしいつも港に近けは船をきよらにして塗直し抔せしか此頃は江戸に行とて水夫等まて心を用ひて清よめけるはいつれの港にても男女群集せしまゝ江都はさうならんとおもふゆへなるへしさるに只一人もとふ事なしとおもへは渠も本意なかるへし朝とくより北より西に琉球島間近く正午測量の所より三十里（我十里五里）も離て見ゆ山々も平穩にして午後西に遠く成行

朝日さすうるまの島もきり晴てさやかにむかふ秋の海原

○九月廿四日晴北大風七十四度（北緯二十八度廿分東經百三十度三十七分）百八十一里今朝西に薩州の德島を五六里隔てゝ見る昨日まて單衣にてあつきゆへ今年は暑

の殘りし事とおもひしかけさ北に成りて俄に小袖を着して寒し

○九月廿五日晴北風六十七度（北緯三十度三十三分　東經百三十八度十三分）二百五里

○九月廿六日晴北風六十四度（北緯三十二度三十八分　東經百三十六度二十八分）百九十里晝頃西にあたりていとかすかに地山のみゆるは伊勢山なるへしされは人々悅びて涙こぼるゝばかりなり

うれしやなまつふしおかむ我國の神路の山の高き惠を

一年に四度夏冬凌きつゝ御國にかへる秋のくれかた

○九月廿七日晴北風六十五度（北緯三十四度十四分　東經百三十八度十三分）百四十五里今朝伊豆の山々近く下田沖にて正午に成り七島は晴て間近く不二を見てうれしさかきりなしむ月の末に富士を見送りて東に航せしときはふた度むかふ事を神にいのりしか地球を一周して

和田の原朝日をさしてかきりなく飄り盡せは向ふふしの根

大島のほとりにて日も暮けれは蒸氣もいと靜にして夜九時（五時半）松輪崎に間近く碇泊正午より八十里

かねてよりけふをいつかと松輪崎うき泊寢の終なりけり

○九月廿八日則廿七日也東をさして地球一周すれは一日を增し西をさして一周すれは一日を減すと聞しが今日御國に歸りて聞は廿七日也されは一歳のうちに一日を得しは一生のとくなり委しき事は航海者に尋ぬへしけふは晴わたり不二は朝日にかゝやき米人は珍らしき山とて望遠鏡もて詠めけりかくて五半時頃（是は我時を用ゆ）出帆して浦港の前を過き猿島の邊より風景いはんかたなし此春出帆の心地とは大にかはり心もうき立てかゝるうれしき事はふた度あらじと人々云あへり四半時頃横濱の沖にはし舟をおろし下司を運上所へ遣し（定役一人御小人目附一人）所用を辨し家司も一人つゝ家にかへすやがて御軍艦の當番の人々着の悅に來りてはじめて江都の御靜謐の事をはしめさま〳〵の事とも承りぬ九半時横濱を出帆して八半時品川の沖に碇泊四十里香港より千七百十七里惣里程二萬

九千八百三十六里（我里法にして一萬四千九百十八里なり）田町の波戸場に詰合ける下司來りて悅を述べまたさま〳〵承り安着せし事を同僚に達しける神奈川へ遣せし下司來り我國の食物携來り人々集りて食すればいつれも美味也病後の渴の如し今晩は皆うち寄さま〳〵の咄しにて心もうき立眠りにつくものなしあくる間遲しとまちかねけり

○九月廿八日晴今朝品川より小舟來り荷物など揚て後御軍艦繰練所より押送り形の御舟迎ひに來りければ船將始士官等まて暇乞せしに水夫等抔には涙こほして名殘おしむもありさすが數月辛苦をともに航海せし人情はおなし事也けふは殊更に禮を整胡樂にて送り四半時御舟に乘移れは水夫等は不殘帆桁に登り船將始船上に出て冠物をとり三度聲を發して別を告祝砲十七發打たりかくて九半時繰練所に上陸して出帆以來疊の上に平座して再生の心地也爰より供を揃へて八時家に歸れはとり〳〵悅あへり人々數多とひ來りてかゝる目出見事は世に稀なりとて悅しけり

○九月廿九日今朝執政參政の方々をめくりてとく西城に登り櫻の間に閣老方列座正與をのれ忠順一同にすゝみ出て御黑印御下知狀を返上御條約書差上　御掟の趣大統領へ申達し御條約取爲替相濟ける旨正與言上して一同退座かくて磐城侍從ひたしく航海の事とも聞れけるがやがて御用部屋に出よとありて三人一同出ければ閣老參政の方々つらなりて航海の辛苦をはじめ彼の國の風土人情憲法の事ともたつねられけるか中々一朝に盡しがたけれはその要を摘て述けれはなほ他日ゆる〳〵聞れんとてしりぞきぬ營中の人々とり〳〵珍ら敷事を聞かんととはれ家に歸りても人々とひ來りおなし事のみ數日かたりける

○十月朔日九半時亞國ミニストルハルリスの宿寺麻布善福寺へ正與おのれ忠順森田行一同に行てこ度使節の任さはりなく濟て歸國し彼の國滯留中をはじめ送迎船の厚き事まて謝辭を述けれはいと悅たりナイヤガ

ラの船將も來りて面會數月の好意を謝しける

○十月四日九半時ハルリスはたナイヤガラの船將コロヲル士官十四人磐城侍從の邸に被招饗膳給はりこたひ送迎船の厚意を謝せられ此春ポーハタンのコモトール始へ賜りし如く大和の錦なとそのほと〳〵にかつけ給ふ

○十月五日米利堅の政府より献貢の品々大森の町打場に陸上けして正興忠順受取たりをのれは西城に登りてこ度彼の國にて旅宿を始め惣して賄送迎船の事は更なりサンフランシスコにて咸臨丸修復せし入費も渠より出しければ都ての御謝儀として大統領へ遣はされける品々を取揃へ大廣間にて上覽ありかくて荷造して船に送る事ともをあつかひたり其品々は甲冑一領天鵞絨七卷紋紗三十卷紋絽三十卷綾精好十五卷漆器十種陶器十種大置物（唐銅鑄物 水晶陶器）三種花莚五十枚これは送迎船其他の謝儀として大統領へ遣はさる刀（拵付）一腰大和錦五卷つゝこれは「ニーヨーク」フユルトルヒヤ「サンフランシスコ」三部落の統領へ刀（拵付）一腰ボルチモールの統領へ賜ふはた蒔繪印籠十種唐銅花活五對色繻子十五卷紋縮緬二十疋紅白縮緬二十疋これは咸臨丸修理の御謝儀として大統領へ大小白鞘一腰絞（しはり）縮緬五反サンフランシスコのメールアイランド（地名造船場の）コモトール（官名）へ短刀白鞘一振縮緬三反同しカピテイン（官名）へ紅絞縮緬三反つゝ同し士官五人へ絞縮緬五反サンフランシスコ部落の統領へ紅絞縮緬三反同し士官へ絞縮緬二反つゝ病院醫師二人へ下し賜ふ

○十月七日閣老方より彼の國外國事務ミニストル（官名）レウキスカスへ御謝辭の御書翰并大統領へ遣され品の目錄成瀨正典（組頭）曉よりナイヤガラ船に持行て船將に渡しはた海氣二疋船將へ同一疋つゝ士官十三人へ正與おのれ忠順より贈りをのれ等も船に行て謝するはつなれと公務しげくして暇なければ心ならねと正典もて謝辭を述させけるかくて九半時ナイヤガラ船は品川沖を出帆したり

○十月十五日殊更に西城にのぼり正興おのれ忠順順々に御白書院の庇に
はひ出れは越中守貞明朝臣（奏者番牧野）名披露あれは關宿侍從亞米利加國よ
り罷歸りしより言上ありて
御懇の上意を蒙りありかたき旨御取合あつて退り出ぬ
○十月廿日正興をのれ忠順一同に御座間へ召出され彼の國の事をはしめ
海外の事情を聞し召され　御懇の上意を蒙りて　御前をまかりけれは
御次にて丹波守弘道朝臣（平岡御側御用御取次）こたびは格別骨折けるゆへ　思召を
もつて御小刀柄賜りけるよし傳へられて御品をさつけらるれは　御前
を拜して退きやかて折紙をも賜りける正興へは金三疋馬御小刀柄（金裏哺壽）
（乘作四郎兵衛折紙代金二枚三兩）をのれへは金這龍御小刀柄（金裏哺延乘作折紙同上代金二枚）忠順へは色繪三
疋馬御小刀柄（金裏哺作折紙同上代金一枚五兩）丹波守道弘朝臣に御禮を申上關宿岩城の兩
侍從へも申上たりかゝる恩賜は表方の有司には例しなき事なればいと
かしこき事になんありけるされば函なと造りてそのよしを記し永く子
孫に傳へて家の重寶とはなしけり
○十月廿四日岩城侍從の邸へハルリス參上大統領より献貢の品小銃一挺
を出し（外品々は席へ出さず）目錄を捧けり目錄の譯左の如し

ホウキツスル四挺内一挺螺線を刻せり		
野砲車	四輛	
ボート車	四輛	
サラブ子ル（詳未）	百六十二	
ポンペン	五十四	
チンメボス（詳未）	八十一	
エコイペメント（詳未）		
エキスタラスチユツケン（詳未）	等	
ホウキツスル一組		
火器製造機器		
モーデル、ケエール	一挺	

火器製造機器用具　一百個
螺線を刻せるホウキツスルの彈丸
軍艦小挺大炮二挺を載すへきもの　一艘
山ホウキツスル其車車具及附具等を添ゆる者　一挺
搬運すへき鍛冶裝置其用具コムブレール詳未を添ゆる者　一揃
ヒユクセンガル砲名未詳百挺ナチオナール、アルモリ詳未光毫の者　五十八
同　一挺　同茶褐色の者　五十八
同ヒユクス詳未一挺同鈔バヨヲツトを附せる者　五十八
同一挺　同　五十八
平滑に鑽刻せるゲエール一挺爆發機を具する者　六十八
同一挺　千八百四十年式　同
同一挺　千八百二十二年式茶褐色　同
同一挺　火石明亮なるもの　同

ハル人名のカラヒイン　一挺
コルト人名のビユク　一挺
同カラビイン　二挺
ハフル人名同　同
ビユルンニテ人名同　同
マグナルド人名同　同
ヨスレイン人名同　同
メニル人名同　同
モルセ人名同　同
スミゾ人名同　同
ペレユツレー人名ピストル　一挺
コルト人名ペルトピストル　同
同ホルステルピストル　同

同改製式棚杖一個を附する者　二挺
騎兵刀革紐を附する者　一口
騎炮兵刀同　同
オンドルオヒシール劒　同
樂人劒　同
上に記載せる小銃各個に附屬せる藥包子　百個
ホウキツスルに附屬せる彈藥包　三十六個
馬に準備せる物品　一具
ビユクのアウオウトレメント未詳百具カル未詳　五十八
同　一具劒ハヨ子ツトを具する者コーゲルベルス　一
爆發機　一具
番兵局兵器の書　一箱
シブレイ未詳帳テント　一張

ランスル　一個
大平南海轍道の報告　十三冊
ギリス名地より知里の方への艤送　一冊
日本の方に彼理の艤送　四冊
エモリ名地の境界測量　三冊
スコールクラフト名地の印度人種　六冊
日本の方に彼理の艤送　三冊

○十二月朔日おもひきや大城にのぼるへきの奉書賜りけるまゝ朝とくもうのほりければ正與おのれ一同に御座間の庇にはい出れは亞米利加國へ御使として遣はされけるが格別骨折相勤むるに依て三百石つゝ御加增賜るよし

上意を蒙る次に忠順出れは同く御使の立會として遣はされけるか格別骨折相勤けるによつて二百石御加增賜りける　上意を蒙りしとそ月次

の御禮も濟て芙蓉間にて同じ御用骨折相勤るによつて黄金時服賜はりける由執政の方々並居て關宿侍從傳へらる（正興おのれ金五十枚時服四づゝ喜毅忠順金十枚時服三つゝを賜はる）また新番所前なる溜にてをのれ取來る歳俸二百苞を地方に直し賜はるよし同し侍從傳へらるはた喜毅には殊更に月俸二十口を賜はり森田行下司の人々そのほと〳〵に月俸を一生之内賜り黄金時服なと賜はりけるけふかゝる御惠を蒙りしは夢にやあらぬかとつら〳〵かへり見れば我祖父君歳俸百苞の家督をつぎ給ひ大司農にまて進みて稀なる君寵を得給ひ千二百石までの恩波に浴し給ひ其時をのれまて新に召出されて月俸二十口を賜はりしが僅三十年の間四方に奔走すれど何の寸効もなく終に例しなき使命を蒙り神と君との御惠にて恙なく歸朝せしは僥倖といふへししかるに新に三百石の采地を賜りけるは積善の餘慶なるへしとかしこさは筆にも詞にも盡しかたし素よりをのれは不肖短才なればかゝる御高恩を報すべき事もならねは子孫のうちに心あるものは忠勤して報せよかしとおもふのみ

異國の灘のりこへて五百重波かゝる惠を代々にあふかん

此一卷はくた〳〵しくかき集てもとより人に見すへきものにはあらずたゝ海外に航して　神國のたふとき事をしりまた風土人情の異なる樣海路の辛苦まて忘はてんも本意なけれは其折の日記をつゝりて御惠のかしこさを子孫にしらせほしくおもひけるか公務にまきれて筆とる暇もなきか文の久しきといふ元年の卯月より函館の役に當りて官府にありては朝夕の暇に夏のの鹿のつか短かき筆もてかきあつめけるか文月望の夜筆を止むる事とは成りぬ　淡路守源範正

村垣淡路守範正奴師航海日記乎美世良列計禮婆
烏津都等播於毛波奴遊女乃南見麻久良奈可伎不那知耶宇美和多利家牟
與仁太加幾伊射遠能美可波於保布年爾起見賀免具美母都彌加獘流可奈

八十齡　藤原安清

柳川當清海航日記

航海日記

于時萬延元年申正月十八日亞墨利加米利賢、國ハ御使節御用其以前被仰付今日發足九段坂ヨリ鎌倉川岸日本橋通リ築地操陣、所ハ着各々揃ゐ午時飯ヲ食シ畢其後大魚船ニ乘移リ米國ヨリノ迎船ボウバタンハ乘移リ直ニ碇ヲ解キ横濱湊ハ着シ碇ヲ下シ滯留ス

同十九日外國御奉行酒井隱岐守殿赤松左衞門尉殿竹本圖書頭殿御目附神保伯耆守殿船中ハ爲御送別ト御入來同廿二日横濱港出帆夫ヨリ日々記之

飯田町九段坂

新見豐前守正與家臣

柳川兼三郎當清 廿五才記之

申正月十八日　晴夕西風未ノ日

一今巳ノ上刻發足九段坂より鎌倉河岸日本橋通り築地操練處に同下刻着各相揃て午飯を食し其後大魚船に乘し御臺場を過品川沖二里ばかりにして米國よりの迎船ボウハタンに至る此時未の下刻なり扨我朝人乘し畢て後米利堅の國法を以て祝炮二十一を發し直にあるを卷て楫を西南に取り八里計にして申ノ中刻横濱港へ着し陸地より壹里餘を隔て碇をおろし滯泊も其後酒肴等を出し御使節をもし免末々迄に興應も船中廣大なりといへとも日本人の住所ハ至て手狹く我等の房室に至てハ下三疊敷にして四方二段に棚床を作り有是寢所なり其數七ツ此所に拾壹人同居も右棚ハ幅貳尺竪壹間余にして五寸計の椽を作る是動搖の時不落爲なり扨此船を亞名フレカット（船ノ造形）、マナヲー（軍艦）、ラットステーマント（外車）云是米國におゐて名譽の軍艦と云去丑年もしめて亞人渡來せし時ペロリ此船に乘して來りしと云長五十間横九間にして常に大炮廿四挺を備へ尤戰爭の時ハ八百人乘にして大炮も數多備ると云船中に階子十壹ケ處に有て四段に造り上段トモの方ハロコモトール（官名）、カピテーン（船將）の房室なり其より御目附御組頭をはし免輕輩にいたるまて船れ兩側左右にあらひて房室をつくり煮燒處ハ中程にあるて彼の方料理處の隣なり中段トモの方ハ兩御奉行の御寢所にて御房室前ハ廣く四十疊敷はかりにして下ハ花毛氈をしき中央に姿見の鏡をかけ側にハ種々の額等を懸けあらへ實に美を盡せり其より順を追ふてロイテナント（士官）ノ房室を造此處も中に廣き所有下ハおゐしく花毛氈を敷き美なる飯臺を置大サ竪四間横壹間半高さ三尺餘なりミヨシの方ハマタロス（水夫）の住處にして至て廣く大勢混しわる國の大部屋の如くなり其外段ハ中程に蒸氣の仕懸なるを前後ハ總て物置なり其次段ハ合藥石炭酒米薪水諸食料等を入る置處なり數多なれハ只大略を記るす而已

同十九日　晴西風申ノ日

一同港滯船午ノ中刻外國御奉行酒井隱岐守樣赤松左衞門尉樣竹本圖書頭樣御目附神保伯耆守樣舟中ゟ御送別のため之ゟ御入來有て申の刻御歸陸

同廿日　薄曇北風酉

一同湊滯留日々ソルジョル兵卒、ゲベル筒を持て調練も午ノ刻過船中の規則書出る左之通

一船將部屋の外船の中段ゟて烟草を免るさす

一船中ゟて帋張提灯を用ゆべからす

一船將部屋の外夜四ツ時限り燈明を消もすし

一部屋の内ゟ火をゆるさも

一煮燒處ハ夜五ツ時過ゟ仕舞ふへし且日本煮燒處の火は五ツ時ゟ消もへし

一酒類ハ舟中之者共彼の方水夫等を云ゟ與ふへからも且持去らるさる樣いさもへし

一烹焚用の水ハ水置處より樽ゟて船中壹人前凡二升之割ゟて與ふへし

一合藥又ハ火器類ハ日本人ゟ渡せし部屋内ゟ置へからも

一舟中火の要心のため燈明を第一ゟこゝろ付へし

一役人の外船中の士官部屋ゟ入るを免るさも

一右之方便所ハ第一等役人左之方便所ハ第二等役人ゟて從者ハ船表之方を用ゆへし

一船中の者共彼の方水夫ヲ云日本人ゟ對し過ちあるしときハ通辯人より其段第一等リウテナント上官ゟ云ふらもへし

右之通船將申聞候間銘々堅可相守事

同廿一日　薄陰北風戌

一同港滯船晝後より降雪船中ゟおゐてマタロス水夫壹人病死も滯泊中ハ朝夕大炮一發も朝ハ寅の下刻夜ハ戌の刻あり尤コモトール官名乘船ゟあらされハ各國ともゟ禁之と云

同廿二日　晴北風夜半雨亥

一辰の上刻碇を解横濱港出帆南方に走同刻過浦賀を越し巳の半刻に至り伊豆の大島を右之方に見て卯之方に走此時御軍艦長崎よりの歸帆米國商船横濱に入湊右之貳艘に逢ひ旗を合せ其より追々波高く船の動搖つよく各房室に入て床に臥も去れとも本國の名殘おしく苦しみを忍ひて再船の甲板に登り遙ふ山を詠(眺カ)ぬ暫時にして又房室に入我朝人も夕飯を食もる者少なり夜中下總國銚子沖其より南部の沖を過と云横濱港より房州洲ノ崎迄亞の四十里と云尤亞國里數ハ我十七丁十四間ニ當ル

同廿三日　西北風猛烈晝後暴雨子

一今朝山島更に不見四方只渺々たる海面なり

同廿四日　朝西風晝後東風丑

一大洋といへとも朝夕音樂を奏も是今日は無事を祝もる樂なりと云日々ソルジョル(兵卒)スゲベル筒を持て調練も巳の刻頃マタロス(水夫)共ヒールト(酒名)云酒

を呑此時ハ士官壹人劔を帶し各名前を糺して順に與ふ其の酒の色黄にして味ひかし尤壹人に付ブリッキにて作りし五勺入程の ☕ 圖のことを器に一碗ッヽなり舟中ハ亂ニ酒を用ゆることを禁も尤リウテナントハ赦之と云

同廿七日　南風猛烈夜暴雨大嵐辰

一朝より波高船の動搖甚しく夜に入てハ風雨猶烈しく逆浪船上を打越し舟中の甲板ハ大河のごとく震動また雷のごとくにして其波大山或ハ深谷に異ならも船ハ天へ登り地に落つることく骨柳(コリ)手道具の類ハ翼をなして飛行もるに異ならも燈火ハ消えて暗夜となり只リウテナント(士官)のマタロス(水夫)共に指揮の聲耳元に響きて實に其おそろしき有形ハ愚なる筆紙に述かたし我朝人ハ少しの歩行もおしのさく無據用事にハ亞人に助けられて歩行も去れとも此動搖にも亞人ハ常にかもらす皆船上に出てリウテナントの指揮に去たかひ諸方にわかれて波を防其うち又大波う

ち來りて鐵の鎖をもつてつなき置處の橋舟壹艘を奪ひとらゑ此時船の側ら貳尺餘を損して我等の隣り部屋に其打破りし處より逆浪漲り入て各夜具をむし免大小着類ゑ至るまて潮ニひたし大ひに難澁も去れとも我等ハ只大病人のことくゑして是を助くる氣力もなく實ゑ哀れなる有さまなり我等の部屋とも潮打入て骨柳手道具の類うしほの中ゑ浮りといへともゑゑをぬせく氣力もなく只棚床ゑ苦しみ居たり

同廿八日　雨西風烈巳

一船丑寅之間に走今朝ゑ至り少しハ風雨靜まりけゑゝ衆人大ひゑ安心せり舟中破損多くして日本の煮燒所等も相損し夕刻ゑいたり袤焚所出來し各々食事をもゝむ此度の大風雨ハ四十年以來ゑ未た是を不聞由船將申聞常の商船の類ひゑてハ破船ゑも及へきの處亞國ゑおゐても名譽の軍艦故ゑ防きしと云各國ともゑ軍艦ゑて橋舟を流も事ハ大ひふもゑる處ありと云夕刻ゑいたり彌風雨靜まりけゑゝ何ゑも天運の盡きさる處と蘇生の思ひをなせり

同晦日　薄曇東北風未

一今日船中ゑおゐて人別を改む惣人數をあつむるゑハ笛を吹太鼓をうちて相圖をいたも暫時ゑして皆船上に出る其後コモドール官名をもし免リウ士官テナントも何ゑも劔を帶しソルジョルハゲベルを持て出て大工ハ鋸を持其外マタロスゑいたるまて皆食業の品を持て船の左右ゑ列カ烈をたゝしておらひ其よりリウテナント出て姓名を改め畢て再ひ太鼓を打て何ゑも退りそく

二月朔日　雨西風烈申

一船卯之方に走今日亞國開祖ワシントン誕生日ニ付祝炮を發し酒宴を催して可祝の處大風雨故ゑ見合も由右の大風雨ゑて船動搖甚し晝後コモドール、カピテーン兩人よりマタロス共に去る廿七日大風雨の節骨折料として千トル遣もと云但し壹トルハ我三分に當る

同六日　晴東北風丑

一今日大ひに波静かり午の刻過笛を吹き太鼓をうちて船中の惣人數を集め甲板所におゐてカピテーン中央にありて諸人に條目を申渡す此時何をも冠ぶをとりて是を聽聞す畢て太鼓をうち皆引取マタロス共ビールと云酒を用ゆるハ十日に六七度又床洗ふ壹月に三四度人別を改ハ十日に三四度位何をも右に順ずよつて是より下ハ除之

同十四日　晴雨東風酉

一昨夜半より晴今曉寅の刻にいたり左りの方遙にサントキス嶋を見る何をも出帆以來廿余日にして山を見大ひニよろこひ夜中といへとも各船の看番所に登て是を見る船のもゝむに隨ひ追々近つき一二の島を過き辰の刻頃にいたり船中に招旗をかけるに水先案内として速に小舟壹艘來りて湊口を案内す扨我朝人ハ出帆以來二十餘日ふ間髪月代等もいたさゝるに因ふ各未明より髪月代をかしまた塩水を汲て手足等を洗ひ

午の刻過ふいさり第六のヲハホ島ホノルゝ港に着船す此湊ハ南方に向ひ左右にもおしの洲有て大洋の波を除る此港に着船する前ハ兩岸に壹軒の人家をも不見又海上より山を見るに山上ハ雲霧を起して更に見えす是熱國ゆへに常に雲をおこして右の如しと云よつて晴雨さたまらす

して一日ふ内に度々變す此サントキス島ハ北太平海ふ中にありて北緯十九度五十分西經百五十五度三十分より北緯二十二度西經百五十八度まてふ間に散布して豪斯多辣利州の内の獨立國かり合して十三島あり則ち此ヲハホ島ハ王城ふ地也扨港内に碇をおろしけるに當地在住の亞國ミンストルより兩御奉行に水菓子を呈送す是バナゝアと云我芭蕉の實かり其味眞桑瓜に似て至て美味かり水氣の藥と云未の刻上陸す此とき舟中におゐて祝炮を發す扨海岸にいたりけるに我朝人のむゐひとして數十輛の馬車來るもかるち其馬車に乘るもゝむに至て疾し此馬車と云ハ四輪にして馬二疋にて是をひく馬の眼にハ紙にてつくる三寸四方

計の四角なる物を左右ゑ付る是横を見さる爲と云其より進むゐいたつて疾し拾丁餘ゐして旅館ゐ至る此途中海岸より旅亭前まて見物人大ひゐ群集もゐの旅館ハ五ヶ所ゐ家作あり其三ヶ所を日本人の住所とも表ハ酒店あり奥二階ハ兩御奉行それより順を追ふて住所さたまりけゑゝ亭主より水菓子をいたも西瓜眞桑瓜芭蕉の實等なり亭主の名をチエンシレルト云年齡四十才計ゑ見ゆ家作ハ總て木材の類を不用瓦石ゑて我國のチリベイのことくゑ積上あつさ壹尺六七寸位ゑして土藏のことし右の樣ゐ所々ゐ見ゆ家作をかもゝ熱國故ゐ暑氣をさくる爲なりと云庭前ゐゝ花段ありて美なる草花あまた滿開し我國の草花の類ハ鷄頭千日草夏菊の類有當地ハ暖國故ゐ二月中旬なれともあたゝかゐして何ゑも袷單物を着用も我國の野菜の類ハゑむゃんちさ午旁唐なも唐もろゐし芋の類あり其外草木とも數多ありといへとも櫻梅松杉竹等を見も當國の人物ハ色黑黃ゐして眼もるとく口大きく下賤の者ハ何ゑも素足ゐて歩行も實ゑ畫ゐける鬼人のことし尤高官のものハ沓を用衣類男ハ筒袖股引ゐて女ハ腰下ゐ四角の切ゑを卷き丈ヶ足首の所ゐいたる尤何ゑも西洋布唐更紗の類ゐり乳の處ハ白き布ゑて包むゐり肩の處より腰の下まて又四角の四布風呂敷位の切ゑを以て身ゐ卷ゐり髮は長さ六寸計の半月のことき櫛を頭の後ゐさし髮の毛を卷て右の櫛ゐて留るゐり草花を珠數のことくゐつゐき頭ゐまき赤き木の實を珠もつなぎゐゐして首ゐ卷誠ゐ奇ゐり生來愚ゐして至て正直ゐりと云男女とも馬上ゐて往來をもるもの多し商人ハ諸品をぬくゐゐ入ゑてかたゐ懸ヶ往來もぬくゐの大きさ差し渡し貳尺餘ゐおよふ諸品ともゐ價高直ゑて入湯壹人前ニ付貳拾五匁一夜止宿計一ドル我國の三分ゐ當たる米ハ一ドルゐ一升八合炭ハ壹ドルニ貳俵酒ハ壹ドルゐ一合五勺玉子一ドルゑ廿四ゐり と云餘ゐあまた故ゐ略之此地ハ至て石まれゐして多くハ沙地ゐり因て兩度々降るといへとも往來ゐ水の溜る事ゐし山ゐゝ更ゑ大木を不見海

岸ゐゝ椰子の大木多シ夕飯ゑ鰡（カ）を食も夜ゐ入てハ蚊多くして難澁せり

同十五日　晴雨不定戊

一同湊滯留今朝國王より二尺餘の鰡（カ）を御奉行に送るぬくゑゐ入ゑて持來る當國ハ百年前まて人の肉を喰ひし所と云三十年以來英亞の兩國より許多渡來して學校等を建て諸人ゑ學文（マナ）手跡等を教ゆと云また百年前ニ英人此國にもしめて來其時れカヒテーン此地ゐて生かゐら喰ゑしと云よつて殘るマタロス共本國に歸り女王に右の由を述る女王再ひ軍艦を差むけ此地ゑおゐて婦人八人を生捕り英國ゐおいて篤と男女の道を教え三年ゐして再ひ連ゑ來り此地に送りけゑゝ右八人の女上陸して後國產等を以て舟中に禮ゐ來是よりして人肉を喰も事を止むと云當時は各國より渡り來つて住居し日を追て大ひゐ繁花の港となる去ゑとも過半ハ英亞の家かり夕刻より見物の爲市中に出て歩行も七八丁計行ける。に大かる家ゐり内ゐ三味線ゐきう四ッ竹等の音を合せ變聲を發し數人ゐつまりて樂れしむ樣子實ゐおもしろき事ゐ思ひ立入りて是を見るに美人來て二階に案内も因て登り見るに數百人の男女集りあり此所ハ至て廣くして竪十五六間横八間計ゐして中程ゐ竪三間幅壹間半計の臺二ッあゑて其上ゑ丸き手鞠ほとの象牙ゐてつくゑる玉を四ッ置丈ケ六尺計の棒を以て右の玉を突き臺ゐゝ四もミ中程都合穴六ッあり其の穴に玉の入りしを勝とも右の玉の穴へ入ときハ中ゐウルコール（コト三味線ニ似タル音ヲ發ス）の仕懸あつて種々奇かる音を發し右の勝負ゐよつて酒を呑み樂むかり扨階子より左りの方にゆきて見るに此處また廣くして燈火もまゑゑして只薄暗ら き處ゐ數多の寢處ゐり其數凡四十計因て是を尋ぬるにゐの家ハ妓樓ゑて酒宴の後皆此處に來りて休足（マヽ）もる所と云賣婦ハ何ゑも黑人なり一夜の價一ドル半ゑ由是我壹兩貳朱ゐ當る諸方見物いたし酉の刻過歸館も旅亭ゐおゐて今日もしめて入湯も桶ハ玉子形ゐして高さ一尺五六寸かり湯場ハ四ケ所ゑゐりて其側ゑ一ッの大釜あり其中より湯を持ち來て

右の桶に入るゝあり水を先よして湯を後に入加減をする也異人ハもへてあつき湯をきらふ故ふ日あたのことし暖國よりあらされハ我朝人は入湯いたす事不能湯殿ふゝ白き石を以棚をつくり其處よ櫛シヤボン等を置くあり夕刻商人大海老を持來大さ壹尺餘あり我國のいせ海老の類よて至て美味あり

同十六日　晴雨同斷亥

一同處滯留今日も國王より鷄五羽鰡を呈も當國のリウテナント（官名）壹人來其者のもおしふ廿年以前日本船難風ふ逢ひ此島漂着も船は相損し十二人乘の處皆船中よて死し其中壹人命を保ち來りよつて國人集りて是を養育し其後亞國に渡りし故生死を不知由其者のしたゝめし書を持來由よて是を出も開きて見るふ大日本國外山橋政吉と認めあり是もよて大切ふ仕舞しと云當地ハ晴雨さたまらも終日度々變化する故よや日々山々の谷合又ハ市街の屋上等より朝夕ふ限らす數多の虹いつる其多き時は五六本に及ひ午飯後五人連ふて遊歩ふ出て旅亭より右之方に行くこと十丁餘よして市街をもおる此處左之方ふ大ひおる蘇てつあり高さ貳丈餘横ハ十間に過く此處よて長さ壹尺餘の大百足を見る尤暖國故よ毒虫の類多し扨其より二方よ往來の道あり左の方にもゝミ六七丁計よして山の麓ふ作り三階よして美おる家あり庭前よ種々草花滿開して至て美おり因ふ各路次をひらきて庭上にいさり右の草花を詠（眺カ）ぬ居たりしに家内より硝子障子をあけて年齢二十二三才ばかりの婦人立出て各よむかひて一禮をおし其後美おる草花を手折りて我等ふ壹本ッゝあさひ其後種種の物語り等をなもと云共言舌通せさるゝ更に辨せす餘り家作の美おるによつて各内に入りて是を見んともも其時右婦人是を止めて不入して言葉を以言へとも辨せす又色々の手まねをおし甚た迷惑の體おりよつて能是を考へ見るに亭主他行中よて其身一人故に迷惑の樣子おり因て草花を手折呉れし禮を述へて其家を立出て又行事五六丁よして四ッ辻

ゐ出此處を左之方にもゝみ行よ道の側よ流ゑ河有水中ゐ黒婦五六人躱の身ゐして水を泳きて居るを見る又水中よ我國の八ッ頭芋の類を多く作り有其外田畑ともに更に見も扨其より八丁計も行に米人の家ゐり其門前を過くる時十七才計の婦人二階の窓より我朝人を指招くよつて各門をひらきて家よ入らんとせし時この家の主と見えて年齢四十才餘の男門口まて出むゐひ奥座敷ゐ案内もいたり見るに下にハ花毛氈を鋪正面に姿見の鏡有側ゐハ額等を懸けゐらへ實よ美を盡せり各曲彔よ腰を懸けるに砂糖水菓子等をいだも暫時此處に休足し再ひ其家を出てまた行事三四町計ゐして至て大ゐる家ゐり内に入りて見るに是酒店ゐり亭主來りて酒をわゑ等にもゝむ是を呑ゐ其色赤くして味苦りし其後種々のウルコール仕懸等を出し見せ又巾五寸竪貳尺計の箱を持出し此中より木よて造る長さ三寸計りの丸棒ゐ紐のつきしを貳本出し是を壹本我に持たせ又壹人ゐ其手を持たせ又壹人ゐ其手を持たせ片手ゐ壹本の丸木を持たせ扨亭主箱に釘のことときものを廻しけゑい我ゑ等三人の惣身ゑひゑ言舌ハまゐらも進退自由ならす互ゐ目を見合せ是をもゐさんとなせとも更ゐはゐゑさゑは如何ともする事ゐらす其後亭主是を止ゑ筆ニ述ヘカタシ

種々ノ音ヲ發スしけるに身躰自由ゐして元の如し是イレキテルの仕懸ケゐるをもし知て角長くして丈ヶ貳尺余よおよひ馬ハ耳長くして一尺ゐ過く是ゑ世俗ゐ云處の兎耳の馬ゐるへし何ゑも野飼の樣子なり今日鯨獵船を御頼ミゐつて御用狀出る但し此船ハ箱館港に行と云

同十七日　半晴風子

一同宿滯留午の刻馬車よてミンストル官名宅に御出有之今日市中遊歩ゐ出るに日本人を見んと異人共大ひに群集もも中壹人來りてゐか手を取りて是非來ゑといふ其意ゐまゐせ行事五丁計よして當人の家よいたる座舗に通り見るにもりた見の鏡額等を懸けゐらべ其外置時計腰掛等ゐいたる

まて至て美を盡せり其内ゑ菓子白酒等を出して興應を妻ハ奥座敷を掃除をかし再ひ其處に通し色々珍しき品數多持出し見せけれども所まり延引ゑもおよひけれハとゝ先けるを無理ふ別を て歸りけり此者は英國の人といふ其より大ひなる呉服見せ所り調物の爲ゑ立ち入て見るゑ家の主と見えて年五十計の男出來りて噺かをしをかしけれども更ふわからす其内我手を取りて奥に案内を此家の美麗かる事先家ふ倍せり諸座敷を見物し畢て火の見櫓のことき所に案内を登り見をハ誠ふ高くして諸方を見おろし山々の風景海面の白浪漲りて磯うつ有さま美景ゑして其眺望愚かる筆紙ふ述へかたし其かゑゝひ座敷に至るに年齢三十才計の男筆を持來りて我か形ち刀の圖まて委敷書き取ゑ誠ふ見事ふ出來せし故こををほめけれハ大ひニ悦ひける家の主ゑ噺しふ此ものハ英亞の兩國ゑおひて壹人の畫工と云ふ右の筆といふは金を以て作りしペン（筆ノ事）と云もの也其家を出て三四丁計ふして學校あり郭内至て廣大ふして其中ゑ家作を何をも瓦石かり七八才より十五六才をての男女數百人集りて書を讀ミ或ハ手習等をかを夕刻ゑいたり歸宿す

同十八日　半晴丑

一同所滯留午の刻王城に御出有亞國ホウハタンより ｚか朝人の警固として數十人のソルジョル（兵卒）ゲベル筒を持ち樂を奏し太鼓をうち調練ゑて上陸を御途中當國のリウテンナント（官名）八人馬ふ乘り裝束をかし左右ふしたかひてお供いたを右裝束は黑羅紗の筒袖ふ金を以て色々の餝り有已冠の上ふ赤き鳥の羽を三まいつゝさし劔ハ巾貳寸計の赤き革ゑて肩の所より下ケ腰の處ふて又赤き革ゑて帶のことくに是をしめ何をもかかものゑてし先る也右ハ當國の甲冑かり扨其より王城ふ至るに海岸ゑて山の麓ふ城廓ふて後ろの山上ふ許多の大炮をそかえ所り大門の處ふて御下車之其より内にをゝむふソルジョル四十人計りゲベルを持ち兩側ゑからひ其より士官二十人計り劔を以て右同樣列をたゝして並居たり

其より座敷に御通り有けるハ國王罷出御對顔有此時國王の妻も婦人二十人計りを隨ひて側ゐ列す國王の名をアレキサンドル、リホリホカメハメハと云妻の名をエンマと云城郭せましと云とも家作等ハ至て美を盡せり婦人の右の席に來る時ハ士官劔を帶して壹人毎ゐ手を取て同道し右の席に出るあり未の刻御歸館途中王城より旅亭前より見物雲霞のごとし夜ゐ入つてハ市中にダンス(躍)を催し衆人集り大ひに祝ゝ是ゝハ日本人もしめての航海ゐ無事あるを賀する由扨ダンスをするゐハ笛大鼓音樂の道具ゐ三味線等の音を合をおどるゝ此もやしをミョウシッキと云男女手を取て躍るあり或は男二人ニゐ女壹人の手を取もあり足柏子はかり多し此時國王幷妻も共ゐ來りておどるゝ見る人是より其手輕きを去るゝ

同十九日　半陰寅

一上陸中日々國王より魚を送る皆鰡あり外の魚類更ゐ見ゝ惣て當島も鳥獸ともまゝゐして鳥ハ鷄鳩を見たる斗より小鳥の類ハ更ニあし獸ハ牛馬犬の外ハ不見未の刻過當旅亭を出立し同中刻ホウハタンに乘船ゝ去れともホウハタンは廿七日の大風より舟中破損多く右の造作中ゐて未た當港を出帆せゝ當湊内ハ大ひなる箱船より蒸氣の仕懸ケ有て海底の砂を取よつて大船といへとも岸より至るまた土人ハ丸太を以作りし小舟ゐ乘り長さ貳間半計巾壹尺餘りあり上陸中兩度氷を食ゝ暖國といへとも當島より南に五十餘里を隔てウバハイと云島有此處より高山ありて四季ともに氷雪消えゝ又側より火噴山有山上より年中煙りを起し是十一島の内の高山ありと云海岸に丸木を以て柱とあし四方皆草よてつくりし家ありよつて是を尋ぬるゐ當國五十年前よてハ何ゝも右ゝ家作のよし

同廿六日　半晴酉

一同所滯船　寒暖斗　七十七度

一今日國王妻と共ゐ船中に來る船の看番に登り何ゝも乘し畢つて祝砲を

發し其後座舗に案内し酒菓等を出して興應も國王の土産として舟中の水夫惣中に七十ドル遣もと云但し一ドル我國の三分ゑ當る惣て當地婦人ハ獨歩せゞ男女手をとりて歩行もるゑ

同廿七日　半晴東風戌

一同湊未の刻碇をときて辰巳之間に出帆も

同廿八日　晴東北風亥

一針路を丑寅之間に取て走今朝にいたりサントキス島も見えも只渺々たる海面ゑてゐたゝひ船の動揺ゑ大ひに窮しけゐともゐか國出帆のときよりハ苦しミも薄く因ゑ各氣を散もるの爲將棋等のゐぐさみをもしむ

三月三日　晴晝頃雨北西風卯

一今日船中ゑおゐて戰爭の調練ゐゑ常の調練とハ異ゐり大炮ゲベル鑓劔等を持て舟中防戰の調練ゐり士官ハ劔を帶し所々ゑあつて是を指揮も尤進退は笛太鼓半鐘等也

同八日　晴夜雨申

一今曉丑の下刻北方ゑゐたりて遙かゑ火焔のごとき光りゐり空中にうつる事凡十丁餘の間にして我國の遠き出火のごとし各大ひに驚きて船上に登り是を見るに是北海ゑてハ儘有事ニゑ雪の發氣ゐりと云亞名ノウルトリフトと云右の火災を天眼鏡ゑて能く見る時ハ火炎の中ゑ稻妻のごときもの有と云申の下刻ゑいたりて左の方にゐたりて遙ゑ山を見る是米州の内之小島ゑして其名詳かゐらす夜亥の刻ゑいたりて遠く常燈を見る

同九日　雨晴酉

一今曉丑の中刻船中ゑおゐて大炮を一發も是を他の船と行逢ひ軍艦故ゑしらせの爲として發せし由卯の刻過カルホルニヤ港地名、サンフランシスコ港港名の海門を遙ゑ見て船上に招旗をゐくる中刻ゑいたりて小船壹艘來りてもゐはち水先案内をいたもこの案内料六十ドルと云辰之刻頃湊口に至

るに河幅至てせまく兩岸ハ何も小さき山ありて山上には所々に遠見櫓を造り左右の河幅壹里ゟ過も其より十丁餘りゐして右の方ゟ高き常燈あり其後ゟ臺場を構ひ形ちハ四角に作りて高さ十五六間計あり四方壹丁半計ゐして三段ゐ炮門あり其中に數多の大炮をそなふ又臺場の内よりうしろの山上に長き橋を懸け此處を通行も其分壹里計もゝむゐサンフランシスコ港にいたる此處海内廣しと云とも中ゟ數十餘の小島あり又港近き小島の山上ゟ臺場を構港内ゟは數百餘艘の大船碇舶も扱て湊へいたりけるハ例の通り祝炮を發も右滯船の中ゐ魯西亞國の軍艦ありて此の亞船ゐ日の丸の旗ありしを見ておかしく日の丸の旗をあけ祝炮を發も此地古はメキシコ（亞國の中の獨立の地名）領なりしを今は米利賢の領分とあり領中の金銀皆此所より出ると云赤道の北上カルホニヤの中あり金山ハ西洋一千八百四十年ゐいたり初めて金穴を發見しあつまり住するもの五千餘人ゐ及へり千八百五十年ゐいたり人口貳萬家屋ハ清國ゐならい作りしか其後回祿數度ゟおよひ土人是をうるいて木材を用えも土石を壁とし屋上を雨水の貯ひ處として火災ゟ具ふ當時千八百六十年ゐ至り戸數壹萬余人口十萬ゐ及ふ古へ千八百五年の頃ハ金山税納四ヶ月ゟ二百五十ギユルデンゟしか今時ハ壹ヶ月二萬五千ギユルデンを納むと云但し一ギユルデンハ我か銀貳拾五匁ゟあたる市中高低して東西四十六條南北貳拾五條あり此所を暫時ゐして碇を解きてメールスアキラン（島の名）の子造船所ビヤールトに行き此間亞國の里數ゐして三十里あり河もゞ十五六丁或ハ七八丁ゐして兩岸の小山ハ草木ともに刈こみをせしゐ異ならも船路の眺望甚た好く遠山の雲ハ未た消えすして左右のやまハ大樹あく只青草茵をふくかことく（しカ）人家ハ稀ゐ有て其閑靜ある事云計おし扱て子ビヤールトに著船し祝炮を發し此處ゐ亞國の船臺場ありて日の丸の旗を上けおかしく祝炮を發も御軍艦咸臨丸ゐおゐても祝炮を發もへきの處先達て大難風ゟ逢ひて相損し右造作中ゐよつて不發此邊河幅せまゝしと云

とも至て深くして大船といへとも岸まて至る河岸ハ石垣あり此河の名をセブメントと云河上にいたれハ文廣大ふして大海のことし此地人家少ふしてコモトール其外士官の宅七八軒有チビヤールト云ハ船其外諸造作所を云河向ふハ人家凡三百軒もあり有て家作ハサントキスの類よて瓦石を以作り何れも三階あり扨て我國出帆以來御軍艦咸臨丸の音つをを不聞因て衆人何れもやもきこゝろハあるりしに二月廿四日當港に無滯著船のよしを聞て何をも大ひに安堵せり其後ち此チビヤールトに來りて我朝人ふ再會し各大ひよろこぬ夕刻ふいたりカピテーンより鮭鮫を送る是れ此河よおゐて獵したりと云

同十日　雨晴戊

一今日午の刻チビヤールトに上陸も其よりコモトールの宅にいたりて見るに門の左右ふハギヤマンの高燈籠を建て家作ハ三階よて實よ美麗を盡せり庭上ふハ廣き花壇あつて種々の草花滿開し是又いたつて美なり惣て亞人ハ草花を貴ひ愛もる事甚しさて其より木村樣御旅亭に行き申の刻ボウハタンに歸船も夕刻よりぬたゝひ入湯ふ上陸も御軍艦咸臨丸ハ大洋中よおゐて兩度大難風ふ逢ひしと云又舟中の病人いたつて多くして當港に著船の後ち御水夫貳人病死も因てサンフランシスコ港より壹里計奥の方山の麓に葬もる由今日ゐを鯨よ似たる魚を食も亞名をタイと云至て美味あり

同十一日　雨　亥

一今午の上刻河蒸氣アキチブ（船號）と云舟よ乘してサンフランシスコ港にいたる船路の眺望の美景ある事ハ前よあり畧之未之刻著船上陸も當所ハ海面十餘ケ所に長さ三十間計の板橋を出して物揚場とあし至て海底深くして大船といへとも右橋きゐまていたる事自由也扨て此邊へ我朝人の迎として海岸まてあまたの馬車來る何をも右の車ふ乘も此の車ハ又美麗ふして四方ハギヤマンヲ以作り金銀のかあ物を用ゆ車の左右ふいま

たギャマンの高燈籠あり四人乗りよして馬貳疋よて是を引くゐ至てはやく見物人ハ海岸より御旅館前よて雲霞のことく群集も車ゐ乗らさをい少しもあゆむ事あり難し右の旅亭に至り見るに此家ハ五階作りよて誠よ大ひなるショキスン（町名）、インテルヲショヲル（家名）、メイルペルレイ（亭主ノ名）と云其より樓上に登り見るゐ座舗ゐい間毎とゐ置時計姿見の鏡カップリ（火燒所）或ハ種々の額を懸けあらへ其美なる事實ゐ目を驚かも計之間數ハ惣して貳百餘間ありよた間毎ゐい細き紐を座敷の角ミの處につけ客用事の有時ハ此紐をひくありもなるち下に通して下ゐい主じの部屋の上之處ゐ右之紐に鈴をつけ又鈴ゐ番付をいたも故ゐ呼し處をしりて來るなり右之糸ハ針かねよして名をコーペルダラートと云家内廣大ゐして手をたゝきても聞えさる故ゐ右之仕懸ヶ有誠ゐ都合よき事之樓上の所々ゐ若き婦人許多居たり是を尋るに何も賣婦の由此の家ゐい其數貳百人ゐ過と云扱て夕飯を食もる時ハ半鐘をうちからし諸人を集め下の座敷に行この處も食事所よて至て廣く堅て三十五六間横十八間計ゐして左右中程三ヶ所に長き飯臺を置き男女とも此處に乗りて腰を懸ヶ食事をする之我等も此夕飯ハ異國料理を食も最初ゐ吸物のこときものを出も器ハ白き大皿あり鳥の油ゐて中ゐいシラス干の樣ある魚あり鹽け更にし其より又大皿にパン杉ありよ盛りて出し又鷄の丸煮を出し其後ち大皿へ飯を出も是南亞墨利加の米と云至て白しといへ共其味いをか國の岳穂よ似たり其より牛肉の鹽漬ケぼたん菜のひたし物白き豆の煮たるを出し又カステーラゐ砂糖味噌のよふなるものをつけ右之樣なる品兩度出る生鮭を湯よて煮たるを出し又をか國のかをいに似たる魚も有茶のかをりよカウヒンと云ものを出も其味ちハ至て苦かくして砂糖を入をされい呑事能はに其後ハ又パンを出して仕舞とす尤右の臺にハ壹人毎よコップよ水を入をて出し置又酢からし糊椒砂糖鹽の類を所々に出し置之誠よ料理ゐ美を盡し此地ゐていい大馳走と云共我朝人の爲ゐい鹽

氣もなく油の香ひ有て食する事ゐたゐも去れとも空腹よ堪へかねし故何ゑも是ゑを少し食もるゝ夜ふ入休息もるふゝ間毎ふ寢臺を置此寢臺と云ハ竪壹間半横巾ハ壹人寢或ハ貳人寢右ふよつて色々有又上より白きゐか紗ふ似たるうもき布を下ケて寢臺の四方を包む我蚊帖ふ異から江是其寢顏もかたを他人ふ見せさる爲と云右床ハ常ニ座敷ゑ置なり尤も朝夕ふゝ下女來りて是を敷直もゝ枕ハ長さ壹尺餘のくゝり枕あり我か友の中ふ休息する時枕の數不足ある故ふ諸々を尋ねしふ床の下ふ程よき白くうつくしきどんぶりよ似たるもの有大ひふよろこひて是を枕として休足もゝ其後下女來りて是を見て大ひに驚きし體なりよつて是を聞よ右のどんぶりよ似たるものハしびんよて家内廣き故ふ小便ふ行ふも程遠けれハ間毎よ右のゑひんを置て小ようを便もるゝと云是を聞て各々大よ一笑せり夜ハ旅亭ゑ諸商人來り旅人ゑ品物を進男女ともふ口を吸手をよぎるか禮なり

一今午の刻河蒸氣船ふ乘り移りの節御使節の爲米國の船臺場ふて祝炮を發すボウハタン船よ於ても祝炮を發もへきの處一發ふして止む我等不思議ふ思ひ舟上ゑ出て是を見るふ士官テレニチャール（人名）の指揮よよつて大炮を發せし處折惡しく此地のコモトール陸上を歩行よて此筒先ゑ來る故よ空炮といへ共間近かよて煙氣ふうたゑ且土沙を飛しけゑゝ面上よりハ皮肉破ゑ血の流るゝ事おひたたしく衣類ハやぬゑて空中ゑ飛ひ氣絶して地よ倒れけれハ諸人驚き欠來りて是を介抱して其家ゑ連ゑ行けりよつて炮を見合せけり

同十二日　雨子

一今日ボウハタンへ御歸船の處米國の役人宅ゑも未た御立寄是なき處も有よつて御歸舟御見合ふ相成り家來分計過半歸船もゝ我等兩三輩よて歸船前よ市中ゑ遊歩よ出見物せしふ色々商人の大店有また三丁計の間支那人計の見世有此處ゑいたり見るに何ゑも文字を以名前諸品藥種等の

名をしるせし故ゐか國よて又藥種の看板等を懸けおらへしゐ異おらす
本町邊の樣子よ似て古鄕を大よ思ひ出せり史那の婦人ハ紅粉を用ゆ其
より山上に登り諸々の風景を詠(眺カ)ゑ居たりしゐ側おる家より主と見えて
年齡三十歲もかりおる男來りて其家に案内も意ゐゑかせ行きけれハ大
ひよよろこひ又十才計の悴(倅カ)ありて出來り色々珍らしき品を持來りて見
せけれとも歸船の刻限あり故よ別れて歸りけり此ものハ昨秋ホルラン(和蘭)
トより來り住居もといふ此地の犬ハ至て大よして背の高さ三尺餘有肉
又肥大なり見物人ハ前同斷群集も巳の刻例ゑ馬車よ乘して海岸よいた
りセンボウケ(船號)と云河蒸氣船よて未の中刻頃ボウハタンに歸船も其より
咸臨丸に入湯よ行途中におゐて土人より梨りんごをもらいしか其味ち
甚さよろしからす此ヲビヤールトよハ清水無くして何れも天水を貯ひ
て呑水とおもゑ夜中我等か部屋に大ひなる鼠壹疋外より入來よつて是
をうち殺せしよマタロス(水夫)來りて此鼠を小犬ゐ與ふ小犬よろこひて是も
を喰ふ誠よ奇おる事ゑ

同十三日　曇丑

一同處滯留船中無別條酉の中刻御歸船今日亞國役所に御出有之けれハ其
家ハ誠ゐ廣大ゐしてゐか國の芝居小屋よ似たり左右よハ棧舗有中央よ
ハ高き臺あり下段ゐゐ英佛亞魯蘭をもし(ゑ)各國の役人且商人ゐいたる
ゑて順を追ひ列を正して並居たり始ての御逢ひ故よ御口上の御名代と
して米國のテーロル(人名)高臺に登り大音聲ゐて一等(ア)に禮をおし其餘は言葉
更よわからゑ巾開畢て祝炮を發も音樂もしまり其より大酒宴とおり諸
人大ひゐ祝しけり是ゑての途中ハ左右の家毎よ三階四階の上よいたる
迄何も花毛氈等を懸ケて其處より見物も我國の祭禮の見物よ異なら
ゑと行しをのゝ噺しを聞けり

同十四日　陰晴寅

一午の刻過より子ビヤールトに上陸し此地ゐゐか國と地球の度數同樣の

處故彌生おかぞのことおれゝ野邊よハ種々の草花滿開し其風景は實ハ美かりさとゐ空も長閑けく一入ほ興よ乘し摘草の面白さゐ思もも時を移し日も西山よ入りし頃ボウハタンゐ歸船せり當地諸品ともゐ高直よて米は一ドルゐ壹舛鮭一疋三ドル半玉子一ドル二十二また日本人渡來よ付史那人豆腐をせいも壹丁の價一ドル油揚一ドルよ二拾枚其餘もりやくも今日御組頭過日此地のコモドール空炮よゐたりし爲見舞御出有之至て大病おりといへとも日本人より見舞よ預りしを大ひニよろおひ床より出て一禮をおし面上より流るゝ血をぬぐおゐら種々の物語をおし一眼ハ先年米國とメキシコ（亞國中の獨立國）の戰爭の節不眼ゐおりし事等を委細よもおし此度又不時の災難よてよろしき方の眼ゐ多く煙氣よ當ゑ半身いたゝゑて不通とおりし何卒此一眼ハ介ケさきよし去おゐら六十よも滿し事故最早死してもよき年おりと物語のうちも更ニ衰えし氣色も見えも實よ勇氣盛んおる男なりと御噺し有

同十五日　曇卯　夜よ入大風

一同所滯泊昨日舟中より日本人五六輩河向ヘルヨ（地名）ゐ調物よ行けるゐ歸りゐいたりて橋舟おくよつて何ゑも十方よくゑかたゑらおる酒店よ入て暫時休息なしけれとも迎船來らゝ故ニ甚當惑せしかやゐて亭主ゐむかい手まねを以ボウハタンゐ歸り度由をしゑしけゑゝ主承知し早速河岸よ至ル日の丸の旗を以招くよ速よ迎船來何ゑも安堵の思ひをおも今日も又河向ゐ渡りしかおおしく歸りゐ橋舟おく無是非雇船よて歸りしかその價一ドル半おり

一今未の刻ボウハタン、コモトール華盛頓（ワシントン）府ゐ御先ゐ發足も其時音樂を奏し祝炮を發も又士官ニ劔を帶して看板ゐ登り水夫ハ繩階子に登りてグルバイ〳〵と三度大聲を發もるなり是別るゝときの例なり

一このヲビヤールトよおゐて毎日ボウハタンゐ石炭を積入るゝよハ小さき車よてもこふ一輪よて壹人押しの車なり

同十六日　陰雨晝後晴辰

一今曉サンフランシスコ港ゟおゐて出火ゐり早半鐘をうち鳴らし人數を集むるなり又消防の道具ハ階子龍吐水の類計ゟて外ゟ道具類ハおし常ゟ右道具ハゑの國の自身番のよふなる處ゟ飾有て出火の時も是を車ゟ乘せて引出もなり見物人ハ更ゟなく只消防人計なり隣家の出火と云とも少しも驚く事も無く道具類も其儘ゟさし置之是まつたく家作ゟ木材を不用瓦石以造る故ゟ類燒といふ事ハ少もゟして多くハ壹軒ゟて鎭火するゆへなり

一いせやの手代異人兩人を相手ゟ口論をいたし大ひゟ爭ふ

同十七日　曇巳

一同所止宿今日伊勢やの下男半次郎と云もの病氣ゟ付サンフランシスコハ相殘る御軍艦ゟて歸國する由同手代昨日の口論船中ゟおゐて御糺しの上手錠押込ゑか朝人兩三輩御調物としてサンフランシスコハ行芝居

を見物も女かたハ實の婦人なり其外の所爲ハ凡本國の芝居ゟ異ならもぬ事より鑢劔のあらそい迄有といへ共言舌通せされハ更ゟ情もうつらも只もかた形ちを見る計なり又史那人の芝居もゐり是ハ女かたも男ゟておなしく言葉ハ通せされとも其所爲大ひゟ本國ゟ類する故ゟ誠ゟおもしろく見物いたせし由傍ゟ大男の見世もの有身の丈八尺餘なり今日も兩三人河向ハ行き歸を雇船ゟて三丁計の間ゟしてホウハタンハ來る是ゟての船賃を三ドルと云少し船大なれハ其價十ドルと云實ゟ高直の事言語絶したり

同十八日　半晴午

一滯泊中ハ商人小舟ゟ乘し諸品を持來當港内ゟ船陸ともゟ海中ハ塵を捨る事を禁もゟ若し捨つるもの有ハ過料を取るゟた板橋常燈等の入用ハ各國より入津の商船且處の小舟ゟ至るゟて運上を取立ていたゟ之此湊口ゟ大ひゟ高き常燈有海上二十五里之間ハ此燈火見ゆると云申の中刻碇

をゝき出帆も此地の臺場よおゐて祝炮を發し畢てホウハタンゐおゐて
もおなしく祝炮を發も此臺場と云は港前ゐ小島ありて山の中程ゐ瓦石
を以塀とゐし此塀高さ壹間半計ゐり其上ゐ大炮をそゐへ其數四十六挺
ゐり又山上ゐ遠見櫓有

同廿五日　晴東南風丑

一今曉寅の上刻右の方ゐ小島三ツ見ゆる船ハ辰の方に向ひて走る波も靜
ゐして大河のことし未の刻頃海面壹里計の間に大魚のゐつまるを見る
亞名をボウブスと云水上に飛上り高き時ハ壹間餘も飛ふ之背の處黑し
丈ケ四五尺計よてゐか國の鰹の類ゐるへし夕刻船中に毛色黑き水鳥飛
來る水夫是を取亞名ブベと云惣て大洋ゐ多し日本のトウクロウと云鳥
の類ゐるへし腹中より六寸計の魚いつる今日より何も單物を着用も

同廿七日　晴東風卯

一船ハ卯辰に向ひて走今日帆柱の上に鐵ゐて作りし劔のこときものをゐ
け其より鐵を以テ作りし鎖をひきて其先きを海中に入るゝゐり是も雷
除ケよして若し船中に雷の落る時ハ右の鎖よもいよせて雷を海中に落
もと云此邊海中海串おゝし

同廿九日　晴東風巳

一晝後大ひなる龜海上に頭を出も其大さ馬の首程も有今日もまた〳〵魚
の集るを見る是も大魚ゐおゐれ集りし由夕刻より東北よ當りて稻光り
甚しく數ケ所よゐり夜中も猶强し暑氣甚しくして夜中眠ゐつかも

閏三月朔日　晴東風未

一海面ゐ燕ゐ似たる小鳥おゝく群も居たり午の刻過蒸氣の仕懸ケ少し損
しけれハ修復中半時計の間大洋中に船を止

同三日　半晴東風酉

一船ハ卯辰に向て走未時より左り方に當り亞國地方の山を見る是メキシ
コ領なり其よりつゝきて色々の山を見る未の中刻ゐ英國の軍艦と行逢

ふ旗を合せてのち双方より船將ゐ士官壹人附添船上に登りて挨拶し米利堅軍艦ホウハタン並自分の姓名を大音聲ゐて名乗る先方も右同斷其後ち互ゐ冠を取りて三度招きて行違ふ

同四日　晴東風戌

一船丑のかたに走昨日より始終次第よ山を見る尤ちゐき處ハ其間壹里ゐ過も太陽ハもゐ也ち北方よゐり未の刻過遙の沖合ゐ外國船壹艘見ゆる

同五日　半晴東風亥

一卯の刻バナマ湊名より壹里餘沖に着船此處遠淺ゐして大船ハ岸ゑていたらす此處ゑ湊前ゐ數百餘の小島有りて其風景美よして筆紙ゐ盡しかたく又小島にハ兩三軒家作し住する族もゐり扨て着船の後ち例之通り日之丸の旗をゐけ祝炮を發も此處ゐ米國の軍艦貳艘有同しく祝炮を發是當地ハ人氣惡しき處故ゐ常ゐ番船を備ひ置由午の刻米國より當地在住のコモドール船中に來る乗し畢て祝炮を發も同下刻ゐいたり天大いよ

曇り大雷暴雨本國の夕立のことし惣てこの邊ハ熱國故ゐ四季とも雷多き處ゐり此地の商人船中に水菓子を持來其實ベナヽアー芭蕉の實ゐりヲレンシ松の實よ似たりバイナアーペルて大ゐりポンムガレン柘榴ゐり其外色青く桃ゐ似たるも有眞桑瓜の類も有何也も美味ゐり未の下刻より日本人の荷物を河蒸氣船に移し置く夜中船上に許多の螢飛來る是をとりて見るゆゑの國ゐ變ゆる事なし

同六日　晴東風子

一卯の中刻河蒸氣船に乗り移り其後ちホウハタンニゐ音樂を奏し祝炮を發も並米國貳艘の軍艦ゐおゐても祝炮も其より壹里餘ゐしてバナマ湊に着岸も港口海上に三丁餘の板橋を出す尤其上ゐハ家根を作り兼て此中よ日本人迎の火輪車ゐり辰の中刻ゐいたり右の火輪車に乗り移り此車を見るゐ一と間長さ八間幅二間餘ゐして左右ゐ腰懸ケゐりて中央を通行所とす一と間ゐ廿八人を入るゝなり是を八ッつなき合せ其さきに

又蒸氣仕懸ケの車有右ゐて後の八ッを引車ハ一ッ毎ゐ四輪ニゐ鐵を以作る尤も下もおなしく鐵道なり此火輪車の鐵道ハ今より八年前米人來りて是を開く其入用四百萬ドルと云又此車の名をステンカワーイスと云バナマ（地名）よりアスペワル迄五十七里の間壹人前ゑ二十四ドルの價を取るなり扨板橋の中ゐゐンルジョル四十人計ゲベルを以我朝人を警衛も見物人ハ大ひゐ群集し此地の人物ハ色黑黃ゐして髮の毛チヾレ何も素足ゐてもき物を用ひも至て人氣よろしからも荷物等の中ゐ金子の荷を見る時ハ是をぬもみ取りて逃ケ去る右の人氣故ゐ米人も是を大ひゐ恐るゝゐり是まつたく華盛頓領ゐ領ゐ（歐羅巴ニ有國）らもしてイスパニヤ領ゐて他領故ゐ是をせいも事能ゐもと云扨て火輪車を解きて走らもゐ其疾きこと矢のことくゐして左右ゐ生せし草木の形も見えす又其音ゑ數千の雷の頭上ゐ鳴渡るか如く人の傍らゐゐりて如何ゐ大聲を發もといへ共言語さらゐ通せも去ゐゐら動搖ハ更ゐゐく至て速りゑまた途中の山ハ切開らきて平地とゐし河ハ橋を懸ケて平とす巳の中刻過暫時の間車を止此處ゐ美なる家有家作ハ三階ゐて瓦石を以も是を我國の立場茶屋の類ゐて何も此處ゐおゐて午飯を食も其品パン干ぶどう桃の實ゐ似たるもの牛肉等ゑ畢て又走る半時計ゐしてアスペンワルに着もバナマより此アスペンワルまて五十七里の間を壹時間半計ゐして至る見る人是ゐて其疾き事をしるへし且此處の人物もバナマ同斷ゐり中ゐハ色の白きも有是をハ皆英亞其外の人なり土人の家作ハいたつて麁造ゐて細き丸太を蔦葛の類ゐて結ひ下ゐハ敷物なく土間に寢起し家根ハ椰子の葉ゐて作り戸障子壁の類ハ更ゐなく日本ゐてハ牛馬の小屋たりとも右よふの見苦しきハ未た見も尤他國より來りて住もる族の家作ハ何も瓦石ゐ作り戸障子の類もゐりて隨分美を盡せり見物の群集ハ前同斷ゐり其より橋舟ゐ乘り兼て米國より我朝人の迎船（船號）ローノークに至る其間壹里餘ゐり此船日本人を待事一年ゐ過と云扨て至り見るゐ此船ハボウハタンよ

り大ふして長さ三百十五フウトと（一フウトハ日本の一尺ニ）幅八間半よして二段ふ大炮を備い上段ハ八インチー是六十ポンド餘中段ハ九インチー是八十ポンド餘内十インチー二挺船の前後ふ有但し一インチーハ我國の八分三厘六毛ふ當る上段ハ炮數左右合して三十二挺中段ハ左右合して三十六挺惣して六十八挺あり此ローノーク（地名）船ハ千八百五十五年コスボルトよおゐて是を製造せりと云人數ハ五百五拾人乘込有尤も此度ハ日本人迎の爲ふて戰爭ふならさるい人數を減したりと云舟中ハ五段ふしていたつて廣大ありといへ共家來ゑ分ハ房室もなく只船の二段目の兩側に帆木綿を以幕となし此中ふ住し下にハフランケット（毛織名）を敷風雨の愁はあしと云とも野陣ふひとしく哀れなる始末なり餘ハ大略ホウハタンふ類も故よしるさす此地ハ熱國よて誠ふ氣候惡しき處ゆへ何ゑも是を恐れしふ右の火輪車の疾きふよつて更ふ其暑さをしらす又バナマよりアスペンワルまてイレキテルを通し萬事是を以用を達もよつて五十七里の間と云とも煙草一ふくの間ふ何事も通もるあり右イレキテルハ針あねふて作ゑるものふして如何あるる法ヲ以通もる事よや是をしらも申の刻過より荷物を船中に積入るゝ夜よ入て終る

同七日　曇東風丑

一巳の刻アスペンワル（地名）港出帆其より二十里計を走せて午の刻過コロンビ（此邊ノ惣名）スの中ボルトベルと云處に着船もコロンビスと云ハ古ゑ佛のコロンビスもしめて西に航海せし時此地を始て發見せし故ふ此邊の惣名をコロンビスと云ボルトベルよハ山の麓ふよき泉有よつて清水を貯ひの爲ふ此處に船をよせしゑ水を船中に入るゝふいポンプと云ものを以水を取るなり故ニ人力を不用して船中に水を入るゝ事實ふ自由なり右のポンプと云ハ海獸の革ふて作りしものゑ山より出る泉なりといへ共一カルロント（我國の壹升八合よ當る）の價ひ一セント（ゼうの國の一分四リン）なり此處ハ諸方峨々たる高山ふして左右の河幅七八丁計只右の泉の傍らふ一軒の人家あり家作ハバ

ナマの類ゐて至て麁造あり尤も假のもまひゐて米國より在勤し泉の運上を取立る役ゐて此處に來り住も此家の主ハ年齢四十歳計妻ハ三十計ゐして僕一人有是バナマの土人ゐて黑人あり右の外ゐゐ人家もなし實ゐ閑靜の處ゑバナマの家數二千軒人口凡五萬程と云

同八日　晴東風寅

一巳の刻ボールトベル地名に上陸も此山ゐゐよき泉ゐありといふ因て何ゑも大ひゐよろこひて汚たる衣類等を持て行くしかるゐ泉ハ呑料の水ゐて衣類ハ洗ふ事能ゐも外ゐ少しの溜水ありといへとも皆惡しき香有て是又洗事不能各大いゐ力を失ひ其より海岸ゐいたり皆裸身ゐなりて海中に入る水泳等を心得しものハ何ゑも深き處ゐいたりけれハ舟中より異人是を見て大ひに驚き是をとゝむと云とも言語通せされハ各彌深き處ゑいたるゐまりゐ異人も絶え兼しゐややかて通詞を以是をとゝゑ深き處にハ毒水流れ出る故よろしからもと云後ゐ是を聞ゐ全く毒水の流るゝゐならも日本人ゐゐやまちあらん事を恐ゑてゑ扱て其より各河岸ゐいたり岩石の間ゐ小魚の有を手取ゐししま鯛或ハ鮪の類なり大ひゐ面白き事ゐおもひて猶も岩間を尋ねしゑ長さ二尺計の鰻を見出し是を取らへんと各爭ひけるを異人來り見て大ひゐ驚き是を取へからす是ハ海中の蛇ありと云因ゐ能く是を見るゐ鰻ゐゐらすして蛇なりけれハ各今更驚きてもせんなき事なゐら誰言となく海中よりゐかりけり其より前ゐいふ草家ゐいたり諸人を待合せ暫時休息せし處ゐ此家の僕長さ二尺計の我國のトカゲの形ちゐ似たるものを鐵炮ゐてうち殺せしを持歸る亞名をエゴアナと云此肉至て美味なりと云尤も大なるゐ至てハ長さ二間餘ゑ及人を害するよし此山ゐゐ鳥獸ともに多しと云商人小舟ゐ乘して大海老を持來る壹の價一ドルと云又船中ゐてハ水夫大勢集りて鑓劔の稽古をいたも鑓ハ長さ壹間餘劔ハ一尺六七寸計ゐして太刀ハ片手ゑ持ち突くを專一ゑも素面素小手ゐして躰ハ何ゑも半身ゐ構へ尤輕例官有

て是を指揮も未の刻碇を卷きボールトベルを出帆す其より去る事七八里計ふして海中ふ白き大岩二ッ有雪の如し船ハ北の方に向て走夕刻ふいたり右の方に虹を見る又船中ふ氷貯ありて暑氣の甚しきふ絶えかね何ぞも水を好むありしかるに右の氷を清水の中に入るゝ故ふ至て冷水よして其味實ふ美あり右の氷を貯ひ置ふい四斗樽位の桶ふ入ぞて船底に入置なり氷ハ皆亞米利加の中ボスト地名ンの高山より積出もゑ又舟中ふ貳疋の猿有日本の猿とハ事あゐり手足ともふ長く尾は至て長くして其丈ケ二尺餘ふして尾を以物ふ卷きつけ其身を中に提ケ體を左右に動こかして二三間の處を飛て又尾ヲ以さゐの木に卷きつけるゑ其進退自由ふして實ふ奇あり其尾ハ蛇よ似たりボールトベルの河向ゑ人口凡二百程と云

同九日　半晴東風卯

一昨夜船中よおゐて異人二人病死も内一人ハ黑人あり辰の中刻過僧官船上に出て讀經し右の死人を水葬も死人の身體ハ帆木綿ふて包ミ又七八貫目位の鐵玉を足の處に結付海中に投もよつて海底に沈みても魚ふ喰もるゝ事もなし又體ハ眞直ふ立ちて横ふならもと云今日ハ殊ゑ外動搖つよく右よしるせし野陣のよふなる處に炮門より潮うち入り何ぞも衣類等を潮ふ濡らし大ひふ難澁せり

同十一日　晴東風巳

一船中よおゐて異人共アイブリナットと云實を以て鳥獸の形其外種々の細工をあも其實の色白くして誠ふ美あり大さ手鞠程ふして至てかたくまた象牙ふ似たり是をアスペンワルの海中の藻ふ生もと云又バアムナと云實あり色赤くして形ハ柿ふ似たり味ハ甘く又種を指輪ふ作る其色ハ黑塗のことし

同十三日　晴北東風未

一船ハ戌亥の間に走今日水夫船中ふて釣り針をおろし魚を釣る其のかた

ちはアマ鯛ゐ似て色は青白く黄なる處もあり鶯の毛色ゐ似たり長さ四尺計ゐして亞名ドルペンと云身ハさゑらゐ似て味も又異之未の刻頃より右の方ゐあたりてキユバアキラン（島ノ名）見ゆる是ゑイスパニヤ領ゑして人口百二十萬零七千と云島の長さ亞の八百里あり銘產ハ煙草珊瑚樹あり

同下刻ケーフサン（島ノ中ノ地名）エントークと云處ゐ至る此處ゐハ高き常燈有海上を隔る事壹里ゐ不過

同十四日　晴東風申

一今日も右のキユバアキランを見て走火噴山有遙ゐ煙を見る是イスパニヤ領ゐるを米利堅ゐて買受たく思ひ種々ゐ手を盡しけれともイスパニヤゐて是を賣らゑ去なゐら未た相談中ゐりと云右をもつて考へ見る時ハ異國ゑても亂りゐ戰ハ好さると見ゆ

同十五日　晴東風酉

一船ハ丑寅の間ゐ走未の下刻ゐいたりて左のかたゐ山を見る是米州の内ブロルデー（地名）と云處ゐり同しゐゑゐ當り壹艘の船を見る右ブロルデーゑて海上を隔る事二里餘之申の刻過ゐいたり右の山ハ不見巳の刻過米國の蒸氣船ゐ行逢旗を合せ互ゐ挨拶ゑ此間二丁計を隔是米國の飛脚船ゐてキユバアキランゐ行船と云右の船よりローノークゐ新聞紙を投け込む是ゐ日本ゐての變事を書のせたり一萬里外の處を四十餘日ゐして日本の變事を出判して摺り立諸國ゐ出ゑ之其早き事感ゑるゐ猶ゐまり有同刻船中ゐ於て例之人別を改其後ち早半鐘をうち鳴らしけれハ異人種種の道具を持て大ひゐ周章し皆船上ゐいて過半ハ火消道具を持又右ゐ云ポンプを持て海中より船ゐ水を入るゝ形等をいたゑ是船中ゑ破裂玉入りて出火の時の調練ゐりと云夕刻右ゐ白帆壹艘を見る夜戌の刻頃左の方六七里を隔て常燈を見る同下刻ゐいたり右の方ゐ又常燈有是海上三里計を隔キユバアキランゐゐらすして此邊の小島ゐりといふ

同十七日　晴西南風亥

一昨夜半より風西南ゟ替り帆をあけて蒸氣の車を用えも海中より車を上るしかるゟ少し蒸氣仕懸ケの損しけるゟや常ゟ用ゆる繩計ゟてハ車水中よりあからも因て船將來て是を指揮して水夫八人海中ゟ入て車を持上ゟい大勢繩を以是を引上るゝ船ハ順風ゟて至て疾く且夜半ゟ右の大海ゟ入てもたらくハ實ゟ可感

同十八日　晴南東風子

一晝後より荷物を調ふ是要用の品を見分ケ不用の品を子ビヤールトゟ廻ゟも故ゝ又英國より亞國まて海底ゟテレガラクを通もと云よつて萬用暫時ゟして通もと云誠ゟ大ひなる事ゝ此近海ハ颶風の多き處ゟして英亞及諸國船ともゟ一ケ年ゟい百餘艘（オノマヽ）

同十九日　晴北風丑

一今朝船二艘を見る內一艘ハ蒸氣船ゝ未の刻頃より霧深くして海面更ゟ不見暗夜のことしよつて度々烈しき笛聲のよふなる音を發も是ハ蒸氣の湯を以發もるゝ此音至て遠くゟ響き渡る夜ゟ入てハ猶甚しく又時々ゟ空炮を發是等ハまつたく海上暗くして船の行來ゟあらさる故互ゟ是を發もるハ異國の例なりと云夜中殊の外潮の光り甚しくして船ゟうち寄る波の光りゟて近邊明るし

同廿日　半晴東風寅

一船ハ北方ゟ走今朝スクーチル四艘を見る午の刻ゟいたり左りのりたゟバチーゲット（島ノ名）アキランを見る是小島ゟり此處ゟ高き常燈有是をラキト（常燈ヲ云）ハウスと云海上壹里餘を隔るゟり晝後ゟいたりて數艘の船を見る未ノ刻頃水先案內として壹艘の小舟來る士官一人來てローノークゟ乘込其もの物語ゟ兼ゟ日本人の爲ゟチウヨルク港の入用として政府より三萬ドル遣し置と云同中刻地りたを見る此處をスーヂョイデー（地名）と云其よりして始終左のりたゟ地方を見て走此邊海面地方より二里計を隔申の刻頃壹艘の蒸氣艦ゟ行逢ひ旗を合酉の刻サンデホック（地名）ゟいたる海岸より

一里半計を隔て碇をおろし滯船も近邊ゐゝ四十餘艘の船碇泊もる有海岸の遠見人家凡三四十軒計ゐ見え又高き常燈四ッ有其中一ッゑ山上ゐ有因て至て高し山の後ゑハ數多の人家有と云同中刻ゐいたり政府よりの使として士官五人來ヲウヨルク（地名）行を止めて是より華盛頓（ワシントン）府ゐ引返もへきよしを通もよつて何ゑも大ひゐちからを落も異人ゑ又同斷あり是ゑまつたくヲウヨルクゐおゐて日本人待受の用意調ゑさるゐよつてゑと云此處よりヲウヨルクまてハ十五里と云是より東北ゐ當りて海上二里餘を隔てロングアキラン（島名）を見る

同廿一日　半晴東風卯

一今日もサンデホック沖ゐ碇泊も是より華盛頓ゐ引返もゐゝ異人共何ゑも不同心ゑ付是非あく已の刻頃よりコモドール別船ゑ乘してヲウヨルクゐいたる是テレガラフを以ワシントン府ゐ引返もゐゝ何ゑも不同心ゑて迷惑いたも由を申通もる爲ゑ行しゑ右ゑ付未た何ゑとも治定せす未の刻ヲウヨルク詰臺場奉行蒸氣ゑ乘してローノークゐ來る是此度日本國ゑおゐて新工夫の鐵炮持參せし由ゑて其風聞滿々たりよつて其鐵炮を拜見いたし度態々ヲウヨルクより是迄來りしと云右の鐵炮を一見し大ひゑよろこひて歸船も異國ゐてハ新聞紙と云もの有是ハ其日毎ゑ少しても變りし事の有時ハ是ゑかき載せ賣もるあり日本ゑて讀賣の類あり此度日本人渡來ゑ付種々の新聞紙出來せしと云其新聞紙ゑ日本人ハ身の丈ケ短小ありといへとも至て義有又能く鑓劔の術ゐ達して其心剛勇ゐしてもし免て異境ゐ航海して更ゑ恐るゝ氣色もあく市中等を歩行し且少しの盗心もあくいゑつて正直ゑ又此度渡來の人々は日本國ゑおゐて軍さ士（ゴ）の中を撰ミて航海いたしたるなりと云常ゑ二本の劔を帶もその刻又恐るへし右ハ只新聞紙の中の大略をしるも

同廿二日　半晴東南風辰

一昨夜半コモドール、ヲウヨルクより歸船して彌ワシントン府ゐ引返もゐ

相決も因て今日巳の中刻碇を解きてサンデホック沖を開航し東南の間を走始終右のかたゑ山を見て走又海上ゑ數艘の船を見る

同廿三日　雨晝後晴東南風巳

一船南に走今日雨炮門より入て日本人の住所大水ゑて何ゟも難澁も船中ゑおゐて水夫壹人病死晝後水葬ゐり式法は前同斷よつて略之申の刻過米利堅の蒸氣軍艦ゑ行逢ひ互ゑ挨拶ゐり畢て双方の水夫大勢繩階子ゑ登り大音ゑてクルバイ〳〵と三聲を發も是別ゟの禮義ゐり其船の名をセイムスタンと云夕刻より船ハ西に向て走左りゐ地方有ケーベルレーと云高き常燈臺有酉の上刻ハムトン（湊名）ローッ港に至り陸より貳里計を隔て碇をおろし滯船もサンデホックより是ゟて二百四十里と云

同廿四日　晴東風晝後より曇遠雷稲光り甚し午

一今朝ゐいたりて此港を見るゑ數艘の大船碇泊し又許多の小船ゑ帆をゐゐ通行せし其風景實ゑ美ゐり扨華盛頓府上陸も明日と治定せしゐ因ゐ衆人の祝（悦カ）ひ大かたならも此處ハ内海ゑて波至て靜かなり巳の刻頃華盛頓政府より日本人の迎ひとして河蒸氣來る此船をフエルドルフユヤ（船號）と云又船上ゑおゐて十六人赤き裝束をゐし音樂を奏しドラ太鼓を交じゆ午の刻右の河蒸氣に乘り移り見るゐ此船の中四段ゐして上段ハ看番處ゑて二段目ハ入口より花毛氈を敷き所々ゐもりた見の鏡を懸ケ又許多の額有曲彔腰ゐけの類ハ何ゟも天鵞絨なり船ハ此度日本人の爲ゐ皆新規ゐ作りし由又左右ゑ寢床ゐりて二段ゐ棚を作る其數合して四十有トモノ方ハ左右合して十六間之一と間の内寢棚二ッヽ有三段中程ゐい蒸氣仕懸ケ有ミヨシの方ハ物置之又トモの方に食事所ゑて此處ハ四ケ所ゐ飯臺を置き中程左右ゐ料理所有ゐた髮結床ゐり我ゟ等寢所ハ四段目のトモのかたゑ何ゟも下ゐい花毛氈を敷且雪隱ゐいたるまて金銀のかゐものを用ゆ其美麗ゐる事筆紙ヲ以盡し難し未の刻ゑいたり音樂を奏し祝炮を發も其後酒肴を出も其料理實ゐ美を盡せり其品ハ牛豕鷄飯パ

ンゼ類種々有酒も同斷色ハ赤白黄紫等有味も甘きもあり又からきも有薄荷入等も有カステーラ、ミカン、リンゴ太白ゑて製したる菓子の類ホウ牛ノ乳トル赤大根等あり又珍らしきもの有氷を色々ゑ染免物の形ちを作是を出も味ハ至てあまく口中ゑ入るゝゑたちまち解けて誠ゑ美味あり是をアイスクリンと云是を製もるゑい氷を湯ゑてやゆらかくあし其後物の形に入ゆ又氷の間に入て置時ハ氷のことくゑあると云尤も右の氷をとかしたる時あま玉子を入ゆされハ再ひ氷ふらもと云又我國のよせもの類種々有何ゆも食しけれとも其品何を以製したる事を詳ゑせも未の中出船東に走此時ゑローノークゑおゐて士官ハ何ゆも船上に出水夫ハ數百人縄階子ゑ登り大聲を發して別ゆを送る畢て冠を取て招く是禮之申の刻キール地名バイカンボウトの中ボンボール臺場ノ名トに至る是臺場の事あり此處に暫時船をとゝ免何ゆも臺場に上陸し見物も此臺場ハ下ハ石垣ゑて上を土手ゑ作り臺場の内五丁四方ゑして石垣の處ゑい大さ四尺四方計の角なる穴數多有是炮門あり大炮ハ四百六十八挺を備に玉ハ只大地に積ミ上ケ大山のことく又臺場の内外ゑゝ百軒餘の人家有是臺場詰の役宅の由妻も一處ゑ住居もるゝ臺場ゑ妻の住もる事如何なる事と是を尋ねしゑ戰爭の時ハ夫軍中ゑ出てハ妻ハ内ゑあつて食料を送る役之又其夫戰死もるときハ妻も同所ゑいたり死もると云又高き遠見櫓有夜ハ常燈ゑいたも此かたもらより海上に二丁計の間板橋を出も其さきゑ家作有此處物揚場あり橋上ゑハソルジョル四十人計ゲベルを持て詰居たり何ゆも此處より上陸も臺場の前ゑ貳丁餘を隔て小島有軍用の石置所あり此處ゑゝ人家五軒大炮三十挺を備に置く又石ゑて大山をあも申ノ中刻ヲールバイカンボウー出船東のかたに走此とき士官をもし免婦人ソルジョルゑいたるまて冠を取てさし招き大聲を發して別ゆを送る酉の刻より船西北の間に走

閏三月廿五日　晴東北風未

一今朝船ハ西ニ走此邊河幅三四丁計ヨシテ至テ濁水カリ河の名をポートメントと云朝飯ハ異國料理を食モ辰ノ上刻ウブヲウゼニヤ（地名）と云處ニ暫時碇をとゝゆ此處ハ河岸ヨ六七軒の人家有又川中ニ板橋を出モ其より碇を卷きて走る事十里計ヨシテ船の左りのかたヨマウヒト（地名）フヲイナントと云處有其詠（眺カ）ゆ美景ニ所ヨシテ古え華盛頓大統領隱居せし地と云右大統領死去の後ギヤマンを以作りし箱の中ヲ入ゆ置き今猶其處ヲ有といへとも未たヨ生る人のことしと是ギヤマンの箱の中ニ空氣不通ヨよつてゝと云此處よりワシントン（トン）府ゆて十九里カリ其より壹里計ヨシテ河向ヲ臺場有下ハ石垣上ハ瓦石を以我國のヲリベイのことし臺場内ヲ大炮の數ハ不詳午刻過華盛頓（ワシントン）ホトマカヲビヤールトボールトと云處ニ着船モ扨河岸より五六丁の間兵卒ゲベルを持て二行ヲ列し樂を奏モ凡員數千人計其より騎馬武者劔を持て同しく二行ヲ列モ是百人計何ゆも裝束ハ美なり此所ヲ本朝人迎ひの車馬數十輛三公ハ一輛ヨ御一人此車ハ馬四疋ヲて引其他ハ貳人三人或ハ四人乘り右ハ馬貳疋ニヲ引扨各乘車畢て次第ヨモゝむ先ヲ騎馬數十騎二隊（タイロン）龍（隊伍ノ事）幷樂を奏して先達モ又日本乘車の左右ヲ兵卒數十人警衛モ又後ヲ步兵二拔隊龍同しく樂を奏して進む見物男女數萬人車馬ヲ乘し馬ヲ騎し或ハ木ヲ登り石垣ヲ登りて見物モ車止ゆゝ左右より寄り集り冠ヲ取り手を握り禮をなモ又二三才の小兒を抱きて我ゆ等の手を採らしむ小兒歎笑して禮をなモ或ハ七八才計より十七八のもの同しく爭ひ來て禮モ實ヨ愛モへき事ゝ又黑人來て車の中ニ手を入て握らんとするヲ本朝人是ヲ手を出して禮をなモもの為し車の馳る時ハ老人憊て足よモの者ハ笠を說（ヌ）き禮をなモ女官ハ多家の二重三重或ハ五六重の高樓ヲ有て白き布或ハ我朝日の丸の旗を作り或ハ米利堅原（ヒ）旗を左右ヲ振て禮をなモ凡モゝむ事二里計ヨシて旅館ヲ着モ門前ヲゝ兵卒百人計ゲベルを持て固ゆたり旅館屋の上ヲ日ゆ丸の大旗を建扨て次第ヲ車を下り旅館ヲ入る警衛の士卒ハ二行ヲ列し樂

を奏して退引も扨て旅館ハ八階或ハ七階ゟして何も瓦石以造り少しの柱もなく家ハ壹丁四方計ゟして其中ゟ酒店貳ヶ所藥種店壹ヶ所髮結床小間物見世壹ヶ所多葉粉見世本類の見世ゟありて其大かる事實ゟ目を驚も計なり座敷ハ間毎ゟ姿見の鏡額置時計人物等の置物寢床腰懸ヶ簞笥カツブリの類ゟいたる迄誠ゟ美を盡せり見物人多ハ兼て日本人今日午の刻ゟ華盛頓ゟ上陸もる由を新聞紙ゟ載せたり因て何も百里貳百里或ハ千里の外より見物ゟ來る故ゟ其群集する事雲霞のことし尤も千里外より來るといへとも火輪車ゟ乘して來る時ハ一日一夜の中ゟ來るゟ我國ゟて二十里外より手輕し夕刻ゟいさるゟて旅館近邊見物群集し本朝人二階の窓より百文錢四文錢の類を投與ひしゟ大勢集り來て是を爭ひ拾ふゟ當國の人物ハ男女とも色白く男ハ常ゟ羅紗の筒袖股引を着用し冠ハ種々ゟあり略之士官禮服ゟ〻下ゟ白き西洋布を着し上ゟ〻黑羅紗ゟて肩の處ゟ金泊金糸を以作る處のイボレットを付手首の處ゟ又金糸ヲ以巾壹寸計の筋を縫是三本を最上とも冠ゟも金糸を以巾壹寸計ゟ縫ひ向額の處ゟ〻金を以鷲碇等付る劔壹本を帶も此禮式の服〻もなゟち甲冑ゟて戰場ゟも是を用ふるゟ外ゟ具足の類無之由婦人は少しも羅紗其外の毛織の用えも何も絹布の類ゟ禮式ゟ婦人ハ冠物をとり肩を出もなり髮ハ額の處より左右ゟゟけ香水油等を用ひ至て其艶よしといへとも毛色の黑きハ少れゟして多ハ薄赤なり去れとも美ゟして我朝の雛人形のごとし手首ゟハブレースレスットと云輪を懸ヶ何も金或ハジャマン石珊瑚等ゟて作りしものゟ其外種々の品を以作るも有其價凡百ドル位より千五六百ドルゟて至る此中ゟ親子兄弟の毛髮を少し切て入置なり又指輪ハ男女ともゟ有是ゟか國ゟて印鑑の類ゟ用ゆるゟ常服ハ同しく筒袖ゟして其上ゟ四角の切もを覆ふ尤も仕立かた男の衣類とハ異ゟ腰より下ハ鯨骨ゟて我提灯の骨のことくゟいさせしポープスカレンスと云ものを付大なるゟ至てハ裾の處ゟて差渡し三尺餘ゟ及足

の見えさる程ゐ長し途中を行ゐも少し引摺るなり尤も十二三才位迄ハ足首の處より短きも有又許多折目ゐり五段六段ゐ色をゑかち種々ゑ美を盡も尤も輕輩貧人ゐ至りてハ絹布ハ高直ゐて着用もる事不能唐さらさの類を用ゆといへ共穢又ハ破ゑたる衣類を着用するハ壹人も不見又乞食非人等更ゐ不見右のことくゐ婦人ハ何ゑも絹布を用ゆるといへとも米國人ゐゝ不產して皆史那國より運送する絹糸を以佛蘭西ゑおゐて織り出す處の絹布なり又歐羅巴亞米利加等ゐて髪のかたち衣服其外惣ての流行ものハ佛蘭西より出ると云婦人の腰下に提灯骨のことき用ゆるも四ヶ年以前ゐ佛國より流行もしむと云扨て今日よりハ惣て異國の料理を食すといへとも前ゐしるし有も同斷故ゐ是を去るさす夜ゐ入てハ市中夜毎ゐ硝子の高常燈あり一軒ゐ二ッ又ハ四ッ有もゐりて往來もるゐゝ提灯を不用して白晝のことし實ゐ美景ゐして目を驚せり夜九ッ時頃ゐいさりて入湯も湯桶ハ幅貳尺五寸竪壹間半計ゐして中ハブレッキゐて張詰ゑ此湯箱の上の處ゐ湯の出る口水の口ゐりて實ゐ自由ゐして感もる事計多し湯場ゐゝ兩開きの戸ゐりて是を〆内より錠を懸ケ一人ゑて入湯餘人ゑ股を見せさるなり下ゐゝ湯箱の際ゑまて花毛氈を敷姿見の鏡ゐり其處ゐ又白き石ゐて棚を造櫛シャボン布きん等を置之しかるゐ日本人ハ他人ゐ素肌を見せる事ハさて置き大勢混して入湯いたしけれハ異人とも是を見て大ひゐ驚き皆逃去りて再ひ日本人入湯のときハ近所に不來ゑた雪隱等ゐいさるゑて花毛氈の類を敷一度ことゐ仕懸ケ有て水を出し不精を流もゑ萬事珍らしきもの計ゐて其仕懸等ゐ至りてハ愚なる筆ゐゝ難述

同廿六日　晴申

一未明より市中馬車の往來繁し今朝も入湯も湯ハ終日ゑたハ夜中といへ共何時ゑりぎらも常ゐ有てヲヂを廻せハ自由ゐ出るゑ雲隱等ゐ行て手を洗ふゑて右同斷なり家内の所々に湯をまゑもゐゝ下ゐ大なる蒸氣の

仕懸有て皆此處より廻るあり衣類等をあらふにも人力を不用大なる湯船の中に汚れたる衣類を入れ中に仕懸有て是を動かし手を以洗ふよりは能く垢を落し又水をしほるにも仕懸ヶ有て大さ一間計の丸く深きものゝ中に入るゝに石臼のごとくに廻りて水をしほるあり又物干ハ蒸氣仕懸ヶの隣にありて四間四方計の箱のごときものなり其中に入れて干ハ蒸氣の火氣にて暫時の間にかわき其仕懸ヶ萬事に工みにして實に感心せり扨て今日も旅館内外ともに見物群集し日本人の廊下に出るを待て大勢群りり來りて手を握りて禮をなせ是非あく我朝人も手を出し壹人の手を握りかれ大勢爭ひ四方より手を出せよつて大勢に前後左右をあこまれ一歩もせゝむ事不能誠に往來不自由にして甚難澁せり尤も旅館の中ハ猥に入る事を不許何れも役人の家内或ハ近親其外手續ヲ以來るなり此旅館をフホーテンステリートイン（町名）、ウシントン（府名）、ウヒルツ（屋號）、ホテル、フエゾベトネツキブラン（主名）と云座敷の間數惣合して八百餘間何れも一間毎に鈴の紐有用事有時ハ此紐をひくに下に通し下に鈴に番付有因て呼し處へ來る又下より高樓までの階子其數十八を登らされ上まて至られ階子の惣數百七十五と云扨て婦人五六輩來りて手をとり先にゝみ案内せ其意にまかせ登り行に八階の上にいたる此處より四方を詠（眺カ）るに市中より遙の遠方まて一と目に見渡し誠に絶景あり凡下より此處までの高さ十七八間に及家根にハ白き小石を敷からへ其下ハ鐵の延りねにて其ほつき三寸計にして家根を作るなり當國におゐて大統領をいらむにゝ事務宰相以下三五人の高官のもの有皆其巧によつて進みたるもの大統領の位年盡れゝ國人事務宰相を位に立高貴人皆辭せれハ國人宰相其外三五人の高貴人と先大統領の隱居したるものとを入札にして其名の多き者を以立つ又一説に黑人を除の外萬民に德有ものを入札せと云官人等公用に有てハ官服を着し威光凛々たりといへとも内に有てハ諸人と異なる事なく或ハ商賣し或ハ農稼せ大統領をもし免平服のと

きハ獨歩よし一僕を從へも遊見も又市人も禮もる事おし冠を脱事おし人家ゐ入ゑゐ大統領と云共冠を脱きて入之又國人ハ國の爲ゐもる事を知て王の爲ゐ取る事を云はも國ゐ税有て田ゐ賦おし市中ゐゐ金藏有て國中の税を集め國王より以下の給金をゆかつ國王ハ壹ケ年六萬ドル取と云又四萬ドルとも云未詳當國の禮ハ冠りを脱きもるを相互の禮とも また互ゐ手を握り三度上ケ下ケもるを入魂とも又女ゐゐ口を吸を入魂第一とも或ハ人の手を握り其手の甲をおむるを第二の禮とす或ハ我手を我口よ當又人の口ゐさもを其次とも是人の口を我口ゐあつる略おるへし扨て夜ゐ入てハ旅館の中ゐゐ燈火ガスランプ有て白晝のことし右のガスランプと云ハ我國ゐて掛ケ行燈の類ゐ用ゆる之何ゑも金銀等よて鳥獸草木其外種々の花のりたちゐ作るも有燈火の上ゐゐ硝子をかけ置て美を盡せり壹本ゐ燈火三五或ハ七八位有又此燈火を付るゐゐメッスと云我國の早附木の類ゐして又異之物ゐこもるときハ火出るなり是を以右のガスランプにおざもゐ中より火生して燈火となる是石炭の氣を以もも因て油燈心草の類を用ゆるゐあらす只其石炭の氣を發もる處の口ゐゐ空よもゆる之尤も火氣の盛衰ハ捻止有是を以加減をもる之

同廿七日　晴酉

一今日も朝より家の内外見物群集も午の刻國事官の宅に御出有門前より馬車之御供ハ近習の中壹人ッヽおり是も同斷馬車ゐ乘も同中刻御歸館其家作ハ旅館の類故ゐりやくも國人途中往來をもるゐ男女手を組て歩行し女の獨歩ハ甚少き之小女といへとも家名附の夫おるものハ是と同道も去ゑとも婚姻をもるゐゐ男ハ廿一才女ハ十八歳ゐ至らさゑゐ婚姻を結ふ事不能酒も又同斷是國禁之廿一才より以下よ婚姻もゑゐ心氣衰ひ病を生し身體よ力不滿よよつて國禁の由申の刻頃本朝人の荷物來る因て我等も出て是を指揮もるよ迎船河蒸氣よて同船いたせしリエイと云十才計の童子我り傍らゐ來つてサンフランシスコよおひて調ひし目

方十貫餘の水銀有是を持事至て手輕し我等感心して兒童ゐゐ少なる力ありと是を褒めけるゐ傍ゐ其姉有て同しく是を持ゐ又手輕し此もの八年齢十六歳ゐして色白く顔八美ゐして姿やさしく玄かるゐこの水銀を持事誠ゐ奇ありと思ひしゐ又其友ある十六七歳計の婦人四人ともゐ是等を持ゐ何等も甲乙なし右の婦人八何等も未た若年ゐして十貫目餘の品を持事甚た可感事あり是まつたく兒童の本朝人ゐ褒められしをうらやましく思ひて持し樣子ゑよつて又是を褒めるゐ各大ひゐよろこひて歸る夜ゐ入てハ旅館ゐおゐて躍りを催し是ダンスと云音曲ハベヤナと云是ゐて拍子取躍るゑベヤナと云ハ我國の琴の音ゐ類も去なあら其ゐたちハ四角ゐして至て大仕懸ケの道具也躍りハ男貳人女貳人位ゐて互ゐ手を取又左右ゐ開らき足拍子を取て手を動ゐもゐ少あり我等是を見てハ只運動もる計ゐて更ゐ面白き事もなく只衣類其外美麗あるを見計なり

同廿八日　晴戌

一今日も朝より見物群集も午の刻王城ゐ御出御對顔有御途中ハ例ゑ馬車ゑ御裝束ハ狩衣ゐて御供近習三人徒二人鑓持一人ゑ扨て旅館前よりハ道の左右ゐ數多の兵卒ゲベルを持調練ゐて御供も御先ハ赤き裝束着したる樂人四十人計音樂を奏して進み又騎馬ゐて劔を持兵卒等を指揮も是十六人惣員數凡千人計ゑ此時所々ゐ寫眞鏡を仕懸ケ置て此圖を取る扨て王城ゐ至り見るゐ外ゐゐ鐵の丸棒ヲ以墻とし櫓塀又ハ堀の類ハ更ゐなく一ツの大門有此處ゐて下車ゑカピテーン御手を取て案内も三公ハ何等も同斷あり我等ハ玄關の側ゐ控處ゐありて其處ゐ居下ハ何等も花毛氈を敷正面ゐハ種々の草花飾り我等の控處より三十間計隔て廊下の向兩開らきの大戸有廊下の横もゞ五間計兩開らきの扉ハ右ゐ順して大也兼て大統領此中ゐ有御對顔の節ハ此扉を左右ゐ開らき中ゐ一段高き處有て其上ゐ曲彔ゐ腰を懸ケ妻も同所ゐ列も大統領をフレシテンドと

云名をブカナン年齢六十歳餘妻ハ四十才計なり其下段ニハ事務宰相をもし先大統領のりたニハ男計妻の方ニハ婦人計双方合して六十人計列をたゝして並居たり何れも裝束等ハ常ニ變ゼる事なく甚た手輕き事なり御對顏畢て大統領我等の扣處の前を通りて退引も尤も御對顏の處も扣處より能く見ゆるなり王城中ニハ更ニ警固もなく誠ニ案外の事なり王城といへとも要害もなく只美麗なる計之同中刻御歸館往返ともニ見物雲霞のことし未の刻過評定役の宅ニ御廻勤有尤も例の馬車なり事務宰相セケレタリー金藏方セケレター海軍方セケレター書翰差立方頭役自國事務セケレター貌利太尼亞ミンストル右ハ門口ニて御申置佛蘭西ミンストル阿蘭陀ミンストル宅ハ御通りあり右の八軒畢て御歸館我等用事有て廊下ニ出るニ一人來りて我名札を所望も因て無是非一枚したた先遣しけれハ大勢なつまり來り互ニ爭ひて紙を出し認先る事を望又餘義なく認めるニ其數百枚ニ過我甚た當惑し其余ハ明日と約して無理

ニ其場をもなちて部屋ニ入

同二十九日　曇亥

一見物ハ前同斷日々異國の料理を食するニ其品美を盡し種々の馳走なりと云共牛豕鷄等の油揚又ハ湯煮の類ニて塩氣なし惣てボウトルの香ひなりて食しらねしニ又是をよろこひて食する族も有尤も醬油塩酢砂糖の類ハ飯臺の所々ニ出し置之未の刻魯西亞ミンストル英吉利ミンストル宅ニ御出有魯西亞ミンストル宅ニおゐて酒菓等を出して大ひニ興應も英吉利ミンストルハ留守宅之今日大統領ニの被下物御開有て御飾付なりしかもカピテーンよりの願ニて太刀馬具屏風掛物書棚硯箱の類等ニいさるまて寫眞鏡を以是を寫しとる夜戌ノ刻過より事務宰相宅ニ御出有酒菓を出し又數百人の美女をなつ先て躍りをなも其興應萬事ニ美を盡せり

同晦日　曇午ノ刻過より雨子

一見物同斷日本人の取扱ひ甚さ重くして懸りの役人許多あり又兵卒ハ七八人晝夜とも廊下の角或ハ門口等ニ番をなし尤も不寢番之醫師貳人何ゟも日夜來りて守るなり部屋の中掃除ハ毎朝下女兩人ツヽ來ていたも午の中刻旅館より一丁計隔て出火有早半鐘をうち鳴らして火消人足を集一と組ニ一ツヽ車ニ龍吐水階子の類を積て來り是を消防も又水を取ニハポンプを用ゆる故ニ至て自由あり出火近邊ニ有ても更ニ驚くけしきもなく常のことし是まつたく家作ハ瓦石ニて類燒無之壹軒ニて鎭火もる事多し因て不驚といふ又自火を出したるときの家財道具ハ其儘ニ置て門外に逃る事を專一ニも去ゟとも大家ニてハ死人多しと云同刻頃異人鐵炮劔の類を持來て日本人ニ見せしむ申の刻王城に御出有只音樂を奏したる而已

四月朔日　晴丑

一見物同斷今日ハ日曜日ニ付市中何ゟも戸を〆商賣を休寺に行て法談の類を聽聞もるなり國中惣て天主教を信し寺ハ所々ニ有て男女とも群集し說法聽聞ニ休ふ間ハ樂を奏し經文を唱ふ本尊の佛體ハ四十才位の男素肌ニて磔柱ニ縛あ兩手兩足ともニ五寸釘をうち又左りの胸ニ突き疵有此國平生ハ猥りニ酒を呑事を禁も日曜日翌日の兩日ハ是を赦もあり午の刻過より市中遊步ニ出る去ゟとも至て嚴重ニして定役御普請役御小人目付附添ニて異人も七八人附添ふなり旅館を出七八丁計ニして王城の横丁に出る其處ニ廣き平庭あつて中ニ二代目大統領の眞像有馬上ニて劍を持馬ハ前の兩足を縛けたる處なり大さ人の丈ケ壹丈計馬も右ニ順して大あり何ゟも銅ニて作る臺ハ白き石ニて貳間計も積上け其上ニ有廻り鐵の丸棒ニしたるものニて墻を結ひ其外ハ諸人の遊與處のよふもゝ其より四丁餘ニして又右同樣の處有是ニハ開祖華盛頓の眞像有其形前の類あり其より五六丁ニして小高き岳あります所ハ同しく鐵ニて墻をいたし此中至て廣大あり又壹軒の休足所あり此處に暫時休足し

四方の眺望山河の風景實に美なり氷水を呑て其處を立つて未の下刻に
いたりて歸館も夜に入て旅館中に音樂あり此處ハ至て廣く竪貳拾間餘
横十間計にして下ハ板敷あり入口の上の處に常に音樂の仕懸有て壹人
手を動りせハ十餘人の音樂の音を發もるなり其道具仕懸又至て大なり
又下の廣き處にハ許多の曲録を置て日本人の大勢順に腰懸し處を寫眞
鏡を以寫し取種々の事をいたし日本人の眞像をうつし取何も心より
らもと云とも我も等の心付りさるよふに寫眞鏡を仕懸置あり因て如何
とももる事不能

同二日　晴寅

一巳の刻頃より他行し十餘丁にして大なる家にいさる此處ハ我國の醫學
館の類にて政府より各國の衣類鳥獸草木器械道具其外寄工の品踏草り
農業の道具類にいさるまて皆此處にあつめ又家作のひあらたの類も有
又婦人懐姙してより十月の間壹と月毎に腹をさきて膚ゐけをしたる有

硝子の箱に入置之其餘ハ數多かれハ略之實に目を驚かも計にて數多け
れハ逐一に見る事をよくせも此家作ハ四方壹丁餘にして大なる柱ハ所
所に有といへとも何も白石ヲ以作りし柱あり午の刻歸館も夜六ッ半
時頃より俄に大風吹起て天墨を流りもことし稲光り甚さしく遠雷降雨
暫時にして晴

同三日卯

一巳ノ中刻御條約書御渡しに王城に御出有午の中刻御歸館未ノ中刻より
阿蘭陀ミンストル宅に御出有兼て美婦を許多集ゑ置躍ゐを催し又酒菓
牛豕鷄の類美を盡して料理も其後再ひ菓子を出も是又美をきゐ ゑ種々
の草花を絹或ハ紙の類にて作り色取又美あり是を以右菓子の上を包み
是を大なる臺に山の如くに積上ケ其上に我國幷和蘭の旗を建是も菓子
にて作る也申ノ中刻御歸館當大統領の姪貳人有妹の年齢廿三歳にして
殊に容顔美麗にして米利堅國におゐて壹人の美婦と云其才智ハ萬人ゑ

もぐさ國中の事務右の婦人の命によつて行ふと云姉妹ともに夫を不持
實に英國の女王にも勝りし勇婦あり名をレエンと云此國にてハ惣して
婦人を尊敬しまつ一座に婦人有時ハ婦人に禮をおして後男に禮をおも
又婦人に對して禮をおすゝい冠を取る男に禮をもるゝい冠をとらも是
常あり途中往來もるに向より婦人の來る時ハ男道を除けて是を通も惣
て婦人の取扱りた我國にて親を尊ふかことし又口を吸手を握る禮ハ親
子兄弟より從弟まてハ口を吸親類朋友ハ手をにきる其他ハ只双方より
手を出も計あり

同四日　晴辰

一見物ハ日々同斷黑人ハ人質ゐしく至て愚なる白人と隔をなし富貴のも
のあく只白人の奴婢となり我朝人の旅館ハ更に講堂の說法買茶見せ物
芝居等ゐいさるまて惣て白人の立入場所へ黑人ハ入事を禁も夜に入旅
館におゐて大踊りを催も是をダンスと云又我國の藝者躍り子の類をダ
ンチングルーと云此ダンチングルーを凡三百人計をあつ先男女ともに
七八才より廿二三才迄之其風俗ハ何も腰より上ハ素肌にして只薄き
白の紋紗の類を肩の下より懸け尤も乳の處ハ布を以包ミ置之腰下ハ同
しく白紗の類にて數十枚を重ね下にハ例の提灯骨のよふなるもの有躍
るにハ壹人にて花笠をゐむり四ッ竹の類を持も有又貳人にて男女手を
取り躍るも有多き時ハ四十人計にて何も手を取躍るも有皆足拍子計
多し見物の躍りを褒先るにハ手をたゝき足を踏ミ鳴らして是を褒先る
之此時も男ハ常の服あり婦人ハ至て乳を大切にいさし小兒に乳を呑も
まても衣類の中に小兒の頭を入も乳をのませ少しも人に見もる事なし

同五日　晴巳

一昨日巳ノ中刻政府評定所に御出有て巳の刻事務宰相宅に御出有未の刻
チビヤールトに御出有此チビヤールトと云ハ金銀銅鐵の細工船蒸氣の
仕懸大炮其外軍用の道具等を製造もる所之種々奇工の仕懸有て少しも

人力を不用其の奇工ハ筆ニ述ゝ盡りさし我朝人渡來ゑ付上下のよろこひ大方ならす皆來て入魂せんとも是とも館中嚴ゑして猥りゑ人を入ゑされハ本朝人の市中を散歩もるを待て爭ひて其家に伴ひ酒菓をもゝ先名札を望ミ或ハ近隣の人を集先入魂せしむ道を行時ハ數十人左右を取卷き男女爭ひ來て手を出し禮せんとす時ゑよつてハ我兩手ゑ三四人の手を握り過る事有大勢なれハ壹人幾度も來てたゞむるゝりと思ひハ一度手を取て禮しさるものハ再ひ來る事なし

同六日　晴午

一申の下刻より王城に御出有夕飯を出も其料理ハ美を盡せり此國婦人の衣類其外美を飾りて又高直の品多し婦人といへとも皆時計を所持も中より以上の婦人の他出するゑハ壹人の身のりさり何是も千ドルより萬ドル位まてゑいたる因て貧人ハ妻を持事不能又壹軒の家を持ゑも百萬ドル以上の金を持たされハ家作もる事不能是諸品ともゑ高直ゑて又小家を作ハ國禁の由惣て此國の人質寛裕ゑして正直信心ゑして他邦の人を見てハ嘲けりなかとる事なし又一見のものゑも信實を盡し其氣生甚さ長し其樣子我朝山野ゑ生し人の未さ都下を見さるものゝことしヲロシヤ人も又同斷なり英人ハ至て妬多く人質甚さ惡しくやゝもも是ゝ人をなとり或ハ僞り無禮等多し日本人の此國ゑ來るを妬む故ゑ當國ゑおゐても警衛甚嚴重なり又風說書有米人我朝人の手を携へ歩むゑ英人かたゝらゑ有てうらやミ泣處の畫を出せり

同七日　晴未

一午の刻過より遊歩ゑ出市中を一見し旅館より五六丁餘ゑして是の國の寺院ゑふなる所にいさり此處構内廣くして家作も又大なり正面の二階ハ本堂の類ゑて說法等を席ゑや至て廣して中央ゑ高座なり四方ゑハ人一生の苦樂を種々畫きたるなまさの額を懸ケ又下ゑハ數千の腰懸なり高座の傍ゑ婦人の素肌ゑて横ゑ伏したる姿を白き石を以作り大さ常躰

の人より大あり左り隣の座敷ハ世界の圖又硝子ゟて丸き鏡有此鏡の陰ゟ身を入るゝ時ハ其人の顔四尺四方位ゟ見ゆるゝ其奥座敷ゟいたるゟ此所ハ金銀銅鐵其外諸國より生もる石の類を集ゆし處ゝ其より一段下ゟいたり此處ハ前ゟしるしたる醫學館の類ゟて前ゟ見たる所より廣大ゟて又品數も甚さ多し日本の品ハ鑓長刀劔の類をもしめ御殿りさ模樣の衣類より男女ともゟ平人の服袴羽織其外呉服類より小道具類具類農業の道具ゟいさるまてあり各國山海の鳥獸何ゟも奇ある計ゝ取別猿の大ある有其丈ケ六尺餘ゟおよふ又蛇の種類計七百餘を集其餘數多ゟて筆ゟ載せりさし未の刻頃より大ひゟ曇り稲光甚しく大雷風雨猛烈又暗夜ゟ異ならすして家内所々ゝ燈火を用ゆ暫時ゟして雷雨止

同八日　薄曇申

一今日日曜日ゟ付前同斷市中商賣を休當國の通用金ハ金錢銀錢銅錢等ゟして又各國の錢も多し今日歸海ハ喜望峯のりさゟ治定も

同九日　晴酉

一辰の中刻頃より市中遊歩ゟ出寫眞師ゟ我り眞像をうつさしむ此時寫もの六人連なりと云共暫時ゟ是を寫し取なりまつ曲録ゟ腰を懸ケ頭ゟり足のさきまて少しも動らも事不能顔ハ又目眨ももる事不能もし少しゟても動らも時ハ其形ちあさやあならす鏡ハ四角ある箱の中ゝ三重ゟ仕懸高き臺ゟのせ又寫し取品ハ銀板硝子紙等なり扱て寫し取て後ゟ暗き處ゝいさりて五色計の水藥ゟて洗ふゝ此あゝく時ゟ至て其姿顯然たり其價半ドルより十ドル位まて有申の下刻天文臺ゝ御出有亥の刻過旅館の筋向ふ出火あり半鐘をうちて人數をあつむ又大聲ゟてワワヤ〳〵と云是火事のことなり壹軒ゟて鎮火も

同十日　晴戌

一申ノ中刻ミンストル宅ゝ御出あり（總テ藝者ヲ云）ダンチングルー二百人計あつまり躍り有且酒菓共ゟ美を盡して出も此國諸見物所其外數百人集ると云共喧

聲を出さも只静り居又常ゑ喧嘩口論をしらも

同十一日　晴亥

一旅館の中ゑ舞臺よふなる廣き處有此處ゑ男女混して三百人計ゐつまり大酒宴を催も飯臺其外ゑ美なる草花をゐさり此草花の價壹ドルより六七ドルゑいたる又棧敷ゑハ四人ゑて我國の鼓弓ゑ似たるを持て音を發し中央ゑハ日の丸の大もたを懸左右ゑハ米利堅の旗を懸其外ゑて衆人うち寄て酒を呑之昨日も有前後三日之間此酒宴を催もと云是日本人の無滞着を賀しさるゐりといふ

同十二日　晴子

一見物ハ日ニ前同斷午の中刻頃より夕立を催し雷雨當國ハいたつて地震ハ少ゑして開闢以來未た大地震ハ無之よし西地ゑいさりてハ少しハ地震ゐりと云共是以棚より物の落る事ハゐし是近邊ゑ火噴山ゐくよつて水氣盛んゑして火氣少ゐり故ゑ地震ゐしと云每夜旅館ゑおゐて婦女多ゐつまり風琴を彈し歌ひ又舞をゐも

同十三日　曇丑

一朝より夕ゑいたるまて日々ゑ子供大勢旅館の窓下ゑ來り日本人の金錢或ハ紙の類ゑいたるまて好んて各爭ひもらゐんと其うるさゐ事言語ゑ絶しさり當國の小さき家を建る事の國禁と云ハ外國より來りて小家或ハ家作の破損して其儘ゑ有を見る時ハもゐゐち國の耻辱之よつて禁之する由右ゑ付裏店の類ハ更ゑゐく何也も五六階作りより八九階まてゑして屋上まてハ下より十四五間或ハ十八九間ゑいたり往來の道もたも是ゑ順して廣く十間の餘ゑ及又我國のうら店住居の類ハ皆旅籠やの座敷を借りて住もるゐり食料等ハ何也も旅籠やより焚出し價を定多く出したるものハ其居間ゑ是を取寄せ少ゐきものハ半鐘を相圖ゑ下段の食事所ゑ行て是を食するゐり一日の價壹人壹ドルより貳ドル半まてゑいたる則此處永住のもの共之食事ハ終日ゑ貳度ゐり尤も夜ゑ入て壹度茶

を呑其間ニハ外品を食する事を見も貳度の食事の時ニハ酒菓等を用え夜ニ入茶を呑時ハパン計ヘ下女下男等の食料品常ニハパンニ牛肉の塩漬あり夜亥の刻頃出火有壹軒ニて鎮火も

同十四日　晴寅

一辰の中刻過より市中ハ遊歩ニ出る他行の時ハ鑑札ハつて右改処所ハ出して他行するヘ日本人他出もる時ハ案内者として兩人ッヽ附添ふヘ午の刻過より諸國の産物を集処し處ハ御出有此處ニて酒菓を出も夜ニ入てハ旅亭ニおゐて黑人ペヤナをしらへ變聲を發しうさふ見物群集も是ペヤナの達人ありと云去也とも本朝人ハ更ニ面白あらもペヤナと云ハ琴ニ似たる音を發もる器ヘ子の刻過出火ハあり

同十五日　曇晝後雨卯

一辰の刻過より御乘馬ニて御出有御供騎馬五騎此國の婦人ハ乘馬ニ甚さ達も婦人の乘りやうハ左りハぬミのりたに兩足を出し馬ニ腰を懸て馳る今日乘馬ニて御出の節途中ニおゐて若き婦人の乘馬ニて我朝人の先ハ行我朝人少しもヽ処ハ婦人も又少しもヽむ疾馳也ハ婦人もまさ馳事甚た疾し終ニ其婦人ニ及事不能と云惣て此國の馬太り強し何也も陰囊を去也り是ニ因て甚さ柔あり騎兵或ハ乘車ニ用ゆるに其毛色を別つ連聽錢馬甚さ多し

同十六日　曇辰

一巳の刻過旅館ハ寫眞師來り御三公の御眞像を寫しとる是國の重寶ニ大統領より願て是を寫もヘ未の中刻俄ニ雷雨烈しく氷降る其大さ三十目の鐵丸位ヘ夜ニ入て旅亭内ようつしる有山水各國の港の景人物舊跡出火船火事雷雨稲光等の景畫ニていたつて大仕懸ヘ

同十七日　晴巳

一午の刻王城ハ御暇乞の御出有畫後市中遊歩ニ出る夜ニ入昨夜のうつし畫有大統領見物ニ來る只婦人兩三輩を引連れ外ニ從者ハ壹人もおく見

る人其手輕き事をしるべし

同十八日　晴午

一滯留中旅館のもてなし酒菓肉魚米飯麥餅茶豆湯鷄卵砂糖牛絡氷水汁九年母木の實總て肉類魚類ハ鹽煮或ハ油酢にて甚さ鹽ばまく我朝人にハ不食又食臺の上に鹽醬油酢辛し胡椒等を出せ毎日料理同樣なり此地ハ蠅多し蚊蚤なし鳥類少にして燕雀更になし

同十九日　晴未

一夜に入明朝出立に付男女とも多暇乞に來我等もそれ〳〵に暇乞をなせに皆落涙をしてそのせをおしむ其情の深事實に感心せり今夜もうつしる有華盛頓家數壹萬人口六萬と云

同廿日　晴申

一今日華盛頓を辭しボルトモー地名に向ふ五ツ時出立門前より馬車に乘し廿丁計にして蒸氣車を入置小屋にいさる此内に蒸氣車有是に乘る此蒸氣

車もパナマと同斷なり只少し大にして一と間に四十人を入直に車を發せるに其疾き事又パナマに倍せり車聲りん〳〵双座語達せせ速に北郊に出つ四方高ひくなし平野多し林所々に茂るも民屋此彼にばつて野ハ草しけりて青々たり或ハ畑を作る有車疾くして分明ならさせとも麥黍を多く植たると見ゆ其外松柏櫻等もばり四ツ半時マレラントボルトモーに着せ是までの里法亞の三十六里なり是より蒸氣車を下ルに石の大門有二重となり此所に我朝人の迎として車馬多く來て有直ニ各車ニ乘し徐々として行に市中の入口より見物雲霞のことし車の左右兵卒四百人計ゲベルを持て警衛せ　騎馬百六十騎計樂隊三列消防の士卒八隊皆何せも蒸氣を仕懸ケたる奇物にして水を發する器なり或ハ梯子鳶口に似さるもの或ハ大炮數十挺等の固めにて甚さ嚴重なり又男ハ冠そを取てばな女ハ手拭をぬりて祝せ二重三重或ハ五六重の高樓にいたる迄冠そを取手拭を振り或ハ日之丸の旗大日本と書さる旗をぬつて祝せ之途

中の左右ハ大家五重より七八重魏々として山のことし行事凡壹里計ゟして武器製造所ゟ車を止二階ゟ登り休足も階上ハ廣大ゟして横廿間竪三十間餘の左右前後ゟハ棧數あり又中一と通りの左右前とも一段高くして此處ゟ百花百草を飾り見物の婦女數百人中央ゟ高臺有我朝人ハ此處に上ル此廣場ゟおゐて兵卒貳百人餘ゲベルを以て調練も其後又馬車ゟ乘して行き未の中刻ゟいさりて旅館に着も家作ハ華盛頓の類あり屋上ゟハ日之丸の大旗を建る今夕旅館の高樓下ゟおゐて我朝人に馳走として多火消人足を集出火消防の狀をあも一と組ゟ一ッゝ蒸氣仕懸ケの車有是を引來て地中よりポンプを以水を上ケ其高さ二十間餘ゟ及右合して八組之此水諸方に散亂して雲霞のことき見物の頭上に落る事さあら大雨ゟ異からも見物ハ周章して四方に逃散尤も我國とちあひ其衣服毛織故ゟ大ひようをい少おしといへとも大勢混して逃る事故互ゟ先を爭ひ其そう動大りたからす又階子長きゟ至てハ十二三間ゟ及其取扱りた甚さ手輕し此梯子常ゟハさゝミ置之續て兵卒五百餘人早打調練をあも畢て夜ゟ入ゟをゝ此處ゟおゐて花火を爲も星下り其外とも我國に類も星ハ赤青黃ルリ色等あり又仕懸物ゟいさりてハ種々の草花横文字或ハ米利堅の旗等を顯ゐも仕懸大ゟして甚さ面白し此横文字日本人の着を賀もとゑるし有旅館の前ハ至て廣場ゟして横五十間餘竪貳丁計あり中程ゟ白き石を以人物を作たるを同しく白石ゟて高く積上ケし上に置其左右ゟ又白石を以作りさる鷲を置是至て大あり此石ハワシントンもし免て英國と戰爭ゟ及ひし後此地を開らきて此石を建しと云又旅館の門口ゟハ市人取締役廿餘人ゟて警固も此市中取締役といふハ米利堅の國中ゟおゐて力量の有ものを選ひてもるゝ此地人口三十萬と云

同廿一日　半晴酉

一巳の刻ボルトモー旅館を出立し馬車を馳せて蒸氣車の處に至る此地市中ゟ大河有て大船家の軒下まて來る扨て同刻過火輪車に乘り北をさし

て走此火輪車ハ美ありといへとも小まして四十人入の座敷三ツ有此中まハ四方に紅白の幕を張中まハ又日の丸の幕を張あり鐵道車の疾き事ハ前まにあり略之扨て途中ハ郊原人家少なまして野草林木ハ緑をあし車馳る事凡十里計まして一ツの大河有ボンボウトウスリッキと云橋の長さ壹里河幅亞の二里餘まもいさるなし又行事數里まして午の刻へヒリテクリスと云處に至る此所まハ大河有名をハーフルデガラスと云此河ハ甚さ瀬早くして橋を渡ま事不能因て蒸氣車を乗る蒸氣船有日に丸弁米利堅の大旗を建て待受有此船上ハ平まして鐵道有火輪車を直まハ右の鐵道へ乗ま河を渡ま甚さ奇なり兩岸の渡し口まハ棧梯を以陸より船まハ渡し水の増減まハ拘らす陸と船とを平等まま船の長さ凡六十間横十間計作り四角あり船の向まハ着ま時又例の棧梯を引上ケ待て船の着ま時まなまちち棧梯を下し平まして船中より蒸氣車直まとつま又行事十里計まして大邑あり名をウエミングルンと云人家ハ凡三百軒計寺院等許多有ハ

フルデカラスより此ウエミングルンまでの間松林甚さ多し中まハ畑有麥黍豆等を作また牛豕野飼ましたるも多し車中まおゐて午飯を出ま牛鶏バン、ザンバンヤ等なり此地より地名フエルドルヒヤまて亞の廿八里之未の中刻フエルトルヒヤまハ至ルボルトモーより是迄九十九里なり市中の入口より十餘丁まして蒸氣車場まハいさる此處より車馬まハ乗警衛の兵卒ゲベルを持て三千人計騎馬まハて白及を持もの千人計列をさゝして固めたり何ま も裝束冠ハ美を盡ま又途中車の左右まハ市中取締役二千人計まて警固ま此前まハいふ力量の勝れしものともゝ見物人ハ寸地のあいもなく雲霞のことし警固人數の中まハ四十人計胸の所に我等日本朋友の來るを賀まと認め有是史那人の書あるをし市中の入口より旅館までの間家毎まハ日に丸或ハ大日本と書し旗米利堅の旗等を窓より出し又大あるに至てハ左右の高樓より麻繩をまて是を中まさけ小あるハ手まハ持て二三階より五六階の窓より日本人の車を招き又旗なきものハ白き手拭を以

まねゐ男ハ大聲を發し冠を取是を上ケ下ケして招くも有まさ四方より日本人の車中に美なる草花を投ケ入もあり實ま我國の祭禮見物ま異ならも棧敷も數多あり申の中刻旅館にいさる門前ま白及を持騎馬三百人兵卒三百人警固も米利堅まおゐて古より今まいさるまて右まふ警固を許多出したる事ハ此度もしめてありと云旅館の家作ハ華盛頓其外の類ありといへ共此家作ハ新宅まして其美なる事目を驚りをり

同廿二日　晴戊

一市中ハ往來に大石を敷中ま馬車の道を作る當所ハ米利堅の國中まおゐて美婦多き處といふ座敷向等ハ家作新規故ニ至て美なり又我等の部屋まいさるまて物置湯殿雪隱等有尤も一と間毎ま有之あり入湯ハ例の捻止を廻ゐも時ハ湯水とも自由なり甚さ都合よし湯殿雪隱まいさるまて下ハ花毛氈を敷其餘ちワシントンの所ましるし有略之旅宿をコンテチ（家名）ントホテル（町名）、ステウエンツ、チャース（主名）トノットと云家内惣座敷數六百餘間あり此地ハ小商人の類少まして富家問屋の類多し又金銀硝子細工のよき處と云

同廿三日　晴亥

一卯の刻過出火有火消數多出る道具類ま惣て日之丸の旗を附る又前ま言壹と組ま一ツ、蒸氣仕懸の車有是まハ日之丸の旗米利堅の旗を建て消防ま行あり又常の馬車まも旗を建馬の頭にいたるまて旗を結付るあり朝夕往來に水をまくにハ馬車に大なる水桶を乘せて又桶には數多の穴有よつて是を引跡ハ雨後のことし能工夫あり華盛頓より此邊ハ惣して小兒を脊に負ひ又抱ゆる事ハあさも小さゐ車に乘せて兒守の下女是を引きて小兒を遊ともあり未の刻御出有此所ハ平山にして又廣く前に大河の流れあり四方の見ともらし至て美景の地之少し我國の飛鳥山の景に異之此處におゐて酒菓子パンの類を出も又松の大木甚さ多し其より市中水道の源に御出有此所ハ水車の仕懸にて山水に水をあゐ其より市中

に水道をとる其より蒸氣の機關製造所にいさり申の中刻御歸館右美景の地まて此旅館より三里餘あり去れとも馬車疾くして暫時にいさる夜中出火有

同廿四日　晴子

一旅館前見物群集せ中に三人連の婦人有何れも若年にして又美也よつて本朝人爭ひ窓に立出て是を見やゐて手を出して禮をかせ婦人も又手を出して禮せ其後又禮をかして去ル暫時にして再ひ來り何れも美ある草花を持來て是を警固のものに賴ミて日本人に送る此花ゐまり美なり因て其價を尋しに是一ドルと云日本人是を落手しけれハ婦人大ひによろこひ其後日本人の名札を所望せ是非かく名札を右三人に壹枚ッヽ遣せ大ひに悅て去ル惣て我朝人市中遊歩或ハ旅亭等にて日本人に近寄手を握り禮をかしたるものハ歸宿の上大ひに是を祝せと云本國の人を尊敬せる事右にて知るゐし亞人の芝居有晝後より見物せ其狂言所爲にいさつてハ我國の類にて棧敷舞臺等ハ少し異ゑ至て大仕懸にして尤も廻り舞臺せり出し等有扱て其所爲ハせしめ密夫の幕にしてまつ密夫來りて婦人と物語りをかし此所に少しの狂言ゐり其後亭主他より歸り來此足音におとろきて密夫を戸棚にあくし又亭主と婦人の所爲ゐり又亭主の目を忍ひて密夫を戸棚より出し歸さんとせるに都合ゐしく婦人大ひに心配し種々に亭主をせゐして他行を進むと云とも亭主も是をせいせしにや更に出不行其よふ子實に面白して各一笑せり尤も言葉ハさらにゐからせ其後ハ去ル大家の娘に馴染の男ゐり夜に入忍ふ約束をかす是を燈籠の陰にて若き男の立ち聞をするもの有何り自身の胸にてうかつき其場を立ち去ル此忍ひ入時の約束ハ二階の窓に階子をりけてきのひ入の約束のよふ子ゑ其後立聞をせし男馴染の男より先に階子を持來四方を見るに暗夜にして其ゐる處をきらせ所々に行て階子を持心配をいさせしかる處に前の忍男又階子持て出來り是もおかしく暗夜にて其處

をゐたまへも互に階子と梯子を合せゐる大ひによろこひて壹人の男階子に登り上にいたりて尋るに更に手にさゐるものゐく因て是非なく下る又壹人の男登りて只空をさゐして下る右よふの事を三四度なし其後兩方より一時に登るに双方の手を女と心得大ひによろこひて口を吸又種々の狂言をゐも然るに双方ともに男ゐりけれハ互に爭ひて梯子より落る壹人の男少し力まさりて忍男を井の中投込て去ル右の婦人翌朝にいさり井の中の死骸を見て驚く處の所爲又後ろ面の躍り有前ハ亞人にして後を日本人に作其外鎗劍の爭ひ等種々有といへとも許多故にりやくも女りさハ全くの婦人ゐり其處爲の達したる事又身の輕き事ハ我國の市川小團次にも勝れしゐさゑ

同廿五日　晴丑

一旅館食料の器ハ硝子瀨戸物の外ハ皆銀を以作りしゑ此銀にて作ゐし器美にして德用ゐりと云當國にてハ富家の器ハ何れも銀を用ゆと云是破損しても目方にて調ゆる品ゐれハりえつて德用ゐるよし惣てのかゐものに多金銀を用ゆ金ハ其位日本より貴しといへとも市人に至る迄杖のりゐもの等に金を用ゆるもの多し其侈奢をきゐめし事甚さ過さり又衣類ハ高貴の人ハ一日の中に繻半を着替える事三度賤しき者も日々に着替えるゐり少しも垢のつきさるを着もる時ハ病を生もと云衣類を着替ゆるハ更也足袋を取替沓をもゐ替るまても賤しきものといへとも少しも他人に見もる事ゐし部屋に入て中より錠をおろし萬事をゐも一ッ家内にても決して肌を見せも又人の部屋に入るには外より戸をさゝゐ中にて答をゐして後戸を明ケ入るなり又間毎に姿見の鏡有其前にハ何れにも棚有て其上に櫛又櫛同よふに用ゆる我國の櫛もらいに似たる物油香水等を置ゐらゐ自分家内の廊下に出るまてにちよつと右の鏡にむゐひ髪の亂れをゐをし出るなり實に身の省き能きハ感心せり辰の中刻金銀の細工所に御出有夕刻旅館の窓下へ十六歳計の美婦來我朝人の中に

右の婦人に錦繪或ハ扇子紙の類を投あたに其婦の名札を所望しけれハ若年の異人大勢にて大ひに此婦人を嘲哢し本朝人より投與ひし品をうもい取て逃去れり其餘の異人とも猶此婦を突倒し種々に嘲哢も因て旅館前の警衛の士卒出て是を制し止其婦の宅に送り此後ハ窓より品を投る事至て嚴あり是右の婦人ハあまり壹人にて多日本人の品をもらいし故に若年の者とも是を嫉て右よふの事をあもこ又見物の中より日本人に品を送らんと下より二階の窓に投入るゝ事甚さし日本人ハまさ是を拾ひ取事を禁も

同廿六日　晴寅

一辰ノ中刻金座に御出あり此處にハ數多金銀を貯ひあり其細工の奇工ある事愚筆以述りさし何れも仕懸にて人力を不用又我土藏の類にしたる處には軍用金貯ひ有て眞金山をあし實に目を驚りせり午の刻御歸館此旅館に力婦有年齡三十三歳にして形ち肥大ありといへとも美こ此婦鐵の大ある鼎を兩手にて輕く竈に上ケ下ケも此器ハ凡水幷米貳斗を入るるこ男二三人の力に勝る惣て此國のものハ手に力多し又女も力有當國にても日々兒童習紙を持本を抱て稽古ニ行晝後ニいさり數多連れ立て歸る本國の手習子供に似さり年七八才より十八九までにいたる婦人も多し亞人兩三輩旅館に來り本朝人是に美濃紙をあさふ異人大ひによろこひ返禮に手ぬま八人藝等をなも其爲態我國に異あらす夜中旅亭におゐてうつしる有其畫景仕懸等華盛頓の類なり略之丑の刻頃出火有

同廿七日　晴卯

一午後より市中遊歩に出紙細工をあも家にいさる見世には數多の造り花を飾あたり美なり立入て是を見るに奥には十五六より廿二三才までの婦人集りて紙を以草花を作る其態至て見事あり日本人の入來を見て各立出禮をあし又名札を所望も意にまあせ壹枚ッゝを遣も何れも大ひに悦ふ後二階に案内も二階には冠り笠の類數多あり此處にて暫時休足し

菓子を出して馳走も其家を出て又もゝむに錦繪を摺出も家にいさりけれハ遠方より日本人の來るを見て此家の主門口に出て待ち本朝人の手を取禮をかし此家立寄事を乞ふ是非なく其意に任せ立入るに先立二階ゝ案内も此處ハ多の職人ありて銅判にて種々の繪を搗り立て尤も仕懸にてあまり手を動りさも各是を一見し其後座敷ゝいさるに曲彔其外美を盡せり此所にて酒をいさして馳走此酒ハサンバンヤかり各持合の紙扇子等を返禮として遣しけれハ又亭主より大かる繪紙を我等に送る其後市中ゝ出て所々遊歩一見しけるに異人來て風船を見ん事をもゝむ幸ひにして其意にまりせけれハ此もの本朝人を馬車に乗せ案内も馳る事凡壹里計にして廣き處にいさる四方に棧敷有此所にて風船を見せしむ又見物數百人風船を見もして日本人の傍に來り日本人を見る扨今日風船に乗して チウヨルク(地名)ゝいさると云又風船の作ゝ石炭の油を貯る袋有此袋ハ薄布を塗さるものにて其色青塗の桐油に似たり大さハ四間四方計の丸き袋にして亦長き口ありて袋の上に網の袋をりけ四方に數多の緒を下け又鐵の重り有亦凡壹間計のざるのことき船に壹人入る船の左右にハ米利堅の旗を立また下に日本日の丸之旗を建る扨前に云長き袋の口ゝ側の家の中にて石炭を燒き右の油を鐵管にて袋の口に入るゝ之油の入るに志さりへて袋の滿張もる時にいさつて緒に付さる鐵の重りをとゝ右の緒を船の四方に結ひ付もかも但し袋の口ハ結ももして油出る事かし扨て楫を取り次第に登り凡壹里計にして東北の間ゝ去ル其後ハ疾して見えす是より チウヨルク まて凡百里と云亞の半時にして達も と云又言風船に蒸氣を仕懸さるありて至て速りにして是より日本まて六晝夜に達もと云鐵炮の疾きを以日本までの測量ハ四晝夜半と云風船ハ人餘り高く登りて空氣の薄き處に至り死もるもの多し因て常には禁して用ひも止事かゝ時に用ゆと云此度ハ我朝人に見せんり爲に用ゆと云抑風船の疾かり人の知る所是強いて是を用ゆるにあらも人口の工夫斯

の如きに至るを見るる而已と云又此所にテレカラフを以テウヨルクに用便を達するを見る是よりテウヨルクまて凡百里計の處を直に音信るなり電光のことく至て疾し是前に云エレキテルを以る其仕懸ハ委敷求むるし枚舉るに暇あらる又此所にガスランプ有石炭の油あり是を燒て前に云ふ市中往還の夜燈或ハ人燈火に別つ仕懸あり又石炭を燒きは石炭を貯ル所等ありて甚さ廣大あり又此處より二十丁計にして高樓壹ヶ所有臺下ハまわり十丁計の庭にして多草花を植甚さ奇麗なり中に馬場を丸く取是車馬或ハ騎馬の稽古場にして常に男女來て馬術を稽古し車馬を仕込此國の婦人甚さ馬上に達る夕刻に至り歸宿る夜に入戌の刻頃より火消數多出て旅館下におゐて花火を上る凡其數六十組計壹組に一ツヽポンプ仕懸の蒸氣馬車あり此車に美なる草花を飾り又日本人の衣類を着しりつらをゐむりしもの乘車るも有其外種々の飾りをなる又花火ハ何れも手に持て上ケあるあら歩ミ行是我國の虎の尾の類なり右の火消人數凡三千計壹人毎に手に數本の花火を採り火を點る又樂を奏るもの數百人有て樂にゆれてもゝむ花火ハ空中に發して光も絶えも明なる事晝のとし火玉ハ飛行して左右高樓の硝子窓に映し見物人數萬閲の聲雷のことく頭上に火玉の落る事又雨のことし去れとも異人の頭にハ冠有衣類ハ羅紗の筒袖あれハあまりに火玉を恐れ此花火ハ凡三里計りも續く其美麗ハ愚りなる筆に述あさし

同廿八日　曇辰

一今日辰の下刻出立馬車に乘し廿丁計にしてデラワレと云大河にいさる此處にて河蒸氣船に乘河向に渡る此間十丁餘あり其より蒸氣車に乘直に馳せて午の刻アンボーエと云所に至ル是迄の里數三十五里之此處にて再ひ河蒸氣船に乘船の名をエイライダと云又河の名をテウヨルクブリンゼスベイと云此地に兵卒數百の警衛有亦十三四才より十七八才ま

ての婦人を男姿にかして旗を持せ其數三十人計海岸まて日本人を送る船中におゐて午飯を食し其後船を走至て速かり此邊入江かりと云共廣大にして波高し右にロンクアキラン（島ノ名）左りにスタツノアキラン（島ノ名）を見て此間をもゝゝ此所に至てハ河幅十丁に不過船路の眺望美景之左右に臺場有祝炮を發も米國の軍艦にても祝炮も其よりヲウヨルク海岸にいさる此所にハ大炮八挺を備に祝炮も未の刻、上陸馬車に乘左右に警固の兵卒數千人ゲベル炮を持て從又馬車の兩脇に市中取締壹人ッヽ手に丸き三尺計の棒を以從扨もゝむに見物の群集旗手拭冠等を以日本人の馬車を招或ハ木石垣等に登る事等ハフエルトルヒヤの類故略之其より壹里餘にして往還の廣き所にいさる此所に暫時車をとゝめて調練を見る騎馬二千人餘歩行三千人各ゲベル長刀劍の類を持是米利堅より出も警固人數なり亦英佛阿蘭等よりも警固を出ゞ合して其員數壹萬餘に及何れも一隊毎ニ冠裝束等をゝりつ數十人の樂人一隊毎に音樂を奏し先達し少れにハ太鼓をうちてもゝむも有其足並身體ともに更に亂れも音樂太鼓に從て徐々ともゝゝ行事甚さ熟練せり又此重隊の中に婦人三人壹尺計の箱を背負ひて行是戰場におゐて手疵を負ひ又病人等にてあさふる處の藥箱の由其よりもゝむ事二十丁餘にして旅館に著も此家ハ華盛頓以來、の大家にして作りハ七階かりといへとも四方に廣又數百の窓毎に日の丸さ旗米利堅のもさ貳本ッヽを出し又紙張の五色の燈籠を五ッヽ出し夜に入是に燈火を付る旅館の中まさ美かり此家の主ハ如此大家作五軒を持此前フエルトヒヤの旅館も此家の主の持なりと云今日ハ日本人當所に著もるに付市中皆商賣を休著を賀も

同廿九日　晴巳

一此地ハ亞國中の繁華にして高名の港かり晝夜人馬車ともに往來不絶又家毎に硝子の高燈籠有夜ハ是に火を點して晝のことく又家の入口の上に數多のガスランプをけくるも有其數の多ハ百餘におよふ又家内の燈

火ハ硝子障子うつゝ實に夜の景ハ目を驚もてありにして紙に述あさし
惣て男女ともに黄昏より夜に入往來猶繁し當所ハ他邦より多渡來し住
居も因て日本人他行には甚さ警固厳かり是本朝人の此國に渡來せしを
妬む國人の間違等を恐れての警固かるへし

五月朔日　晴午

一午の中刻當所の評定所に御出有途中の警衛甚さ厳重にして樂人四十人
音樂を奏して先達し次に騎馬にて白刃を持是三十人其外ゲベル炮を持
さる兵卒五百餘人前後左右に從へ音樂につれてもゝむ未の下刻御歸館
又晝夜とも旅館の近邊を數百の兵卒ゲベル炮を持調練にて度々往來も
是日本人警固の爲なるへし此旅亭をフロードウエー（町名）、メトロポーレテン（主名）
と云

同二日　晴未

一巳の刻過より雷雨未の刻より市中を遊歩も夜に入て芝居を見る是旅館
の内にあり又もおしの寄せ黒人の芝居等も有扨て芝居の場ハ舞臺其外
ともに我國より廣大にして廻り舞臺せり出し等にいさつてハ甚さ大仕
懸かり其所爲ハ舞臺に峨々さる山を出して強盗の住家有頭さるもの壹
人に數多の手下あり集會して酒を呑種々の躍り等かし其後手下のもの
三五人其場を立出暫時にして婦人壹人を連れ來る婦人ハ只落涙して其
席にあり其後盗の頭婦人の側に來て種々にいさゝり愛もといへとも婦
人ハ又更に其意に從もも此所種々の所爲ありて幕をおろも此間に見物
の男女ともに側の酒店に出て酒を呑或ハ菓子を喰へまさ元の曲録に來
て見物し芝居の場にてハ酒菓ともに不用亦た見物人は狂言を見もして
日本人計を見遠きものハ兩眼鏡を以見る扨て次の幕には舞臺おかしく
山景にして壹人の士官體のもの劔を帶して婦人の跡を追ふて來る是前
に連れ來りし婦人の亭主のよふ子ゝ婦人ハまた強盗の住家を欠出し山
の谷合まて來りしに此所にて亭主に逢ひ大ひによろこひ兩人にて山道

を馳るに婦人ハ足よりにて更にもあとらも又賊家にてハ婦人の見えさるに驚き數多の手下四方に散亂して跡を追ふて此所に來り男を大ひに打擲し又燒火を以て是を責其心苦を見て笑ひ樂のしむ婦人夫の苦しミを見るに不忍賊の意にゑたりひ夫の責苦をもくりんともる所の狂言にして其後も種々の所爲ありといへとも愚筆に述る時ハあまりに長くありて返て面白ららも因て除之

同三日　晴申

一晝後雷雨今日ハ他の芝居を見物に行是新狂言にして見物人群集も其所爲ハ日本人に出立てあもゑ衣類より袴手傘等にいたるまて日本品あり夜に入旅館内黑人の芝居を見物も諸方の芝居より日本人を請待も是日本人行かされハ見物の異人も芝居に不入して旅館近邊に來て日本人を見物もるもの計多して芝居見物少きに因てあり當旅館の主其任ハバタイロンのコロネルと云近く五六年前に魯西亞國英佛都兒格と地中海におゐて戰爭の節騎兵三百騎歩卒二千人を率ひて魯國の加勢に行大功を立し人と云

同四日　晴酉

一午の中刻より花屋敷に御出有此所ハ廣大にして凡十萬坪計築山ハ峨々として草木繁茂し泉ハ八方より流れ來て湖とあり是又廣して水面渺々たり其風景美にして述りたし又五葉の松櫻の大木甚た多し此花屋敷をつくりし入用金貳千萬ドルと云此所におゐて酒菓美を盡して出し又あまたの婦人庭上にて躍りをあも

同五日　晴戌

一酉の刻過より旅館の高樓に登りて眼鏡を以月星を見る月ハ油の玉に似たるもの甚た多し又宵の明星を見るに其りたちハ三日月のことし其外許多の星を見るに種々の形ち有

同六日　晴亥

一辰の刻より市中を遊歩し見世物小屋に立入見物も數十の熊有何れも牛より大あり人と角力をとり或ハ木に登其外虎黄鳩等を見る夜に入黑人の芝居を見る

同七日　晴子

一今日日曜日に付市中商賣を休先日當所に着之時種々手あつき警固人數さし出に付右警固人數惣中に金貳萬トルを被遣因て萬民ともに大ひニ悅ひ甚た評判よし

同八日　晴丑

一昨日より大工植木や其外の職人數多來りて旅館内を造作し又草花を飾り夜中といへ共休あし今夕刻にいたりて全く出來も是日本人興應の爲に大おとりを催も仕度にしてダンチングルー六千餘人來るダンチングルーハ藝者躍り子をいふ又見物の男女ともに入ましりて大ひに群集し所々におゐて酒宴を催し竪五十間餘横三十間計の新ニ造作せし舞臺にハ躍りをあし庭上ハ美なる草花をあさり數萬の燈火にりゝやき其美なる事實に目を驚も計あり異人ともハ曉にいたる迄酒宴を催し躍りをなも

同九日　晴寅

一今日暑氣甚た强し午し刻過より先年我國に渡來せしペロリの宅に御出有尤もペロリハ病死して今ハ養子の代あり家作美麗にして又日本の器物數多あり日本に先年渡來の節寫眞鏡を以所々の眞景をうつし取りし額等も許多有惣して家内の諸器物ともに美を盡せり酒菓子等を出して馳走も又二疋の狆來て衣類を嗅き日本人あるを去りて大ひに悅ひ躍る事きりまりあし膝に上り袂を筈ミ更に側をもあれも是先年ペロリもしめて渡來せし時我國におゐて狆を求め歸今猶其家に存生して日本人を見て欠來よろこひ慕ふ事如此亦た歸に臨てハ別れをおしミ跡を去たふ其さほ人のことし語らさる計之其情人間に異なる事なし又大ひに吠或

ハなき其樣實に不便にして我等にいたるまて落涙におよひ其家を出扨て其より馬車に乘し七八丁計にして大なる家にいたり馬車をとゝめ此家に案内も此所には男女數百人あつまり有て躍りをなし酒菓子等を出し馳走も未の中刻頃空中風船の行を見る風船のゐたち前に有因て略之尤も此風船ハヲウヨルクに來ヱし風船故に見ゆると云共只空を走時ハ高く走又疾して見る事不能此風船ハ當時國禁にして猥りに乘る事を免さも又乘るものを馬鹿ものと云ふ

同十日　晴卯

一午後より市中を遊歩もするに壹人の異人我等の手をとヱ先にもゝミ行言舌不通ハ何れに案内をなも事にや甚た迷惑に思ひしり無是非其意に任せ行に貳丁餘にして大ひなる手づまの看板を出したる家に連れ行此内に案内も因て立ち入て見るに正面に廣き高座有美なる箱或ハ器物等を飾り有又數百の燈火あり暫時にして異人兩人右の高座に登口上畢て手つまをかもに總て我國より仕懸大にして其術に達し種々の所爲あり甚た奇にして面白し

同十一日　晴辰

一朝より市中を遊歩も此米利堅國ハ當所に不限國中所々に學校其外總ての稽古所等有また痙聾盲目等に教ゆるも有痙聾等に文字を教ゆるには鳥獸草木道具類惣てのものの形ちを畫りき其上の處に其名の文字を書指テ以是を教ゆるゝまた盲目には紙に文字を高くすヱ出し是を以教ゆるなり學文所其外總ての稽古入用ハ自身の金錢を用えも皆政府より其入用を出もと云又捨子或ハ幼少にして親なきものを養育もる處有小兒乳母ありて是を育なり又病院有貧して病中と云共藥を用ゆる事不能もの或ハ獨身にして看病人なきもの等ハ皆此病院に入此所ハ數多の醫師看護人有て病人を看病もるゝ當所ハ竪十一里横六里にして人口凡三百萬と云

同十二日　晴巳

一巳の刻チウヨルク旅館出立門前より馬車に乗し二十五六丁にして海岸にいたり河蒸氣に乗船も此船の名をレエンと云壹里餘にしてフレカットト軍艦ナアヤガラにいたる此船長三百五十フート横五十フートにして蒸氣の煙出し貳本有此煙出しと云ハ銅にて作る管あり其さし渡し壹間半餘ゑ此船スクルブにして又數多の大炮を備にトモの方を日本人の住所とも此所ハ新造作にして甚た美を盡せり去れとも至て手狹にして我等の房室ハ下二疊敷計寢棚壹ッ右の所に十一人同居も扨て諸荷物積畢て後酒菓子等を出も船中におゐて兵卒の調練有船中ハ其作ハ前にいふボウバタンの類故ニ略之今日ハ此所に碇泊も當港内にハ數千の大船舶し其中に英國の大軍艦有グレートエーステルンと云長六百八十フート帆柱六本にして蒸氣の煙出し管五本あり是世界第一の大船といふ一說に英國の女王日本人此米利堅國に渡來せしを此船に乗して見物に來りしと云未の刻頃より雷雨暫時にして止扨て上陸中諸食料ともに異人の料理にして味噌醬油の類ハ更ニなく鹽計にて食事をなも此チウヨルクの旅館滯留中ハ毎夜芝居を見物も又日々諸方出火有

同十三日　晴午

一午の刻碇を解き當港を開帆も東方に走二里餘にして左右の陸地に臺場有此所を過て船中におゐて祝炮を發もおゐしく臺場にても祝炮も未の刻にいたりサンデホック（地名）を過此所より水先案内船歸る此時互に繩梯子に登大聲を發して別れ去ル

五月十四日　陰未

一船ハ辰巳の間に走今朝にいたり船上に登り見るに四方只渺々として白波計山島も不見巳の刻過にいさりて英國の軍艦壹艘に逢旗を合午後壹艘のスクーチルを見る

同十五日　晴申北風

一今日遙に貳艘の船を見る此ナアヤガラの船號ハ前にいふ大統領の姪レエンの名付し船號ありナアヤガラと云ハ米國中の大瀧の名にして其瀧大にして世界第一と云船中の法式其外ともホウハタン、ローノークの類故に略之

同十六日　晴南風酉

一今日より船中日本人の水壹人ニ付一カルロンツヽと治定も但し一カルロンハ我貳升に當る是異人より其水一倍多し

同十七日　曇南風戌

一今朝より南風烈しく船の動搖強去れとも順風にして帆計にて蒸氣を不用といへとも船行甚疾しスクルクを水中より上ル

同十八日　曇雨南風亥

一今日に至船の動搖彌つよく食料の器物類棚より落損もるも有此邊颶風おゝき所と云船ハ辰巳の間ゟ走

同十九日　曇雨午後晴南風子

一船巳のりさゟ向て走動搖ハ未さつよく夕刻海底に船の沈ミ有を見る海面ゟ帆柱貳本出船ハ見えされとも三本柱のよふ子ゝ亥の刻壹艘の船に行逢ふ

同廿日　陰午後晴南風丑

一今日にいさり風波靜りにして船の動搖少し穩りあり夕刻船の側に數多の鮫集り四方壹里餘に及亞名バウブス

同廿一日　朝陰後晴西風寅

一未の中刻頃より蒸氣を用去ル十七日より今日迄蒸氣を不用夕刻米利堅の商賣船に逢旗を合申の中刻過より船南方ゟ走

同廿二日　晴東風卯

一今朝より順風にして蒸氣を不用但し蒸氣を不用節ハスクルブを水中より上ケ置あり日本人の部屋を掃除も

同廿三日　晴東北風辰

一御賄りさ味噌醬油其外諸食料ともに盡て今日より異人賄となる是賄りさのもの行不屆チウヨルクにおゐて諸食料を調入さるによつて右の始末にいたる

同廿四日　晴東南方巳

一船南に向て走食事不自由に付船中日本人惣中に三公より御手當として金壹兩ツヽ被下申の刻遙りに壹艘の船を見る夕刻稻光り甚たしく夜に入降雨丑の刻過より蒸氣を用ゆ

同廿五日　晴東南風午

一今日船壹艘を見る米利堅國ハ惣て產物少なり只近年メキシコと戰爭におよひカルホルニヤを自領として金山を得たる已餘ハ其外國品多し又異境ハ惣て茶を好といへ共各國ともに不產して皆史那國より出る所の茶なり因て其價高直にして中より以下のもの或ハ貧人等自分に茶を呑事不能又燈シ油ハ魚燈計にして是鯨の油ゑ又蠟燭も鯨の油を以製ゑ因て各國ともに鯨獵船を多く出ゑといへとも鯨獵至て少なし鯨ハ日本近海に多し

同廿六日　曇東南風未

一晝後船壹艘を見る船中におゐて溫鈍粉を以碁石を作ル夜に入戌亥のりたに當て箒星を見る

同廿七日　晴申東風

一巳の刻頃佛の軍艦に逢旗を合船中大掃除有

同廿八日　陰晝後晴東風酉

一今日太陽直下を過ル今ハ太陽二十七度十七分の所に有船中我等の食事ハ飯ハ十分に有といへ共外に食ゑるもの鹽煮の溫鈍貳本或ハ鷄骨壹寸計になしたるを壹つ又或時ハ鹽煮魚有是もおゐしく壹寸計になし出ゑゑ

同廿九日　晴東風戌

一午の刻過シントアントニ島のサナントンギョと云高山見ゆる其より酉の刻過シントウインセント島に着船も海岸より二十丁餘を隔碇を下し滯船午の時より是まて五十里あり此地亞弗利加州の中の小島にしてポルトガルの領所之近邊に五ツの小島有といへとも此シントウインセント島ハ其一にして人口も多又外五ツの島より繁華の地ありと云夜中海岸ニ而大ひに花火を上ル

此シントウインセント島ハ北十七度三分西二十五度の地之

六月朔日　晴東風亥

一今朝ニいたり海岸を見るに人家少れにして遠見の處にてハ凡三十軒計に見ゆ土人ハ黑人なり港内にハ英亞の船貳艘碇舶も其外少しの小舟あり山ハ大木更に不見又終日雲霧不晴此地人口五百人なり此海に惣合して小島十二有何れもポルトガル領之由尤も英國よりもコンシュル來住も辰の中刻頃英船貳艘入港も内壹艘ハ蒸氣艦之巳の刻過より本朝人五六輩食料調達の爲に上陸もといへとも更に求る品もなく又草木ともに少れにして海岸より山上にいたるまて只燒沙計あり扨て山之麓にいたるに此所に少しの泉あり側に壹本の木を見る計なりと云又泉ハ島中の呑水にして外に清水なし餘ハ天水を貯ひ置て呑水となし又右の清水を汲取にハ各壹升入程之壺のよふなるものを持來順番に是を汲取之去るに此清水ハ湧出る事少しにて右の壺ハ一ついにあもにハ凡半時計もたゝされハ壺一ついに不溜と云此節ハ旱魃にして島中大ひに難義之由是を見て水の尊きを知るべし人物男ハ筒袖を着しけれとも女ハ袖なき衣類にて腰より下ハ我り馬乘袴に類したるものを着用も何れも素足沓の類を用えも小供ハ躾り多し日本人を見て大ひに恐れ各家ハ逃入て内より戸を玄め其間より日本人を見ると云此土人ハ日本と云ハ何れに有國あるか未た知らさるもの多し食料ハ麥の粉を魚の腹ヒたのよふある

ものゝ中に少し入て食し居たるを見たる由尤も麥の粉ハホルトガルより送る所にして至て高直當地最上の食料の由又少し牛馬有といへとも其食料おく因て海草をとゝ是を雨にさらし置牛馬の食料とおもよつて牛馬ともニ痩おとろへ至て力少しと云實に見るも哀れおる所の由當港をホルトガランデと云海岸の山上に臺場壹ヶ所有申の刻過英國のコンシュル船中に來ルよつて祝炮十一を發も歸陸の節又祝炮ス船の側に魚多く集るを見て各爭ひ針を下もと云共更に釣事不能

同二日　晴東風子

一船中乘込の亞人も當所ハむしめてにして此地におゐて薪水食物積込の爲船を寄せしに右のことゐ處ニゐ甚た當惑いたせしよふ子ゝ卯の刻過碇を卷出帆も船西南の間に走海面に飛魚の走ルを見る數多にして海上白くりもミ小鳥の飛に異ならす辰の下刻にいたりシントウインセント島見えも午の刻過より南に向て走夕刻また數千の飛魚波上を走るを見る

同三日　晴東南風丑

一船ハ東南之間に走船中大掃除をおも

同四日　晴午後雨東北風寅

一今日順風ニ付蒸氣を不用晝後より降雨各ゐらそい雨水をとゝて手足をあらふ此邊飛魚甚た多し

同五日　半晴南風卯

一今朝車を下し蒸氣を用ゆ辰の刻過米利堅の商船に行逢旗を合せ巳の刻過カピテーン來りて奇談をおもカルホルニヤに大木ありさし渡し三十六フートに及ぶりるに右の大木昨年枯木となりて倒れけるに中ハ朽て大なる穴有其穴を人馬上にて通行もと云又米利堅の大統領ハ其任に有事四年にして次官に讓る例おり右官を讓りの時ハ新大統領表門より入古大統領裏門より出ると云

同六日　陰南風辰

一今日日曜日に付僧官船上におゐて經文説法をおも船將より水夫にいたる迄清衣着替し是を聽聞し各落涙もホウハタン以來何れにても日曜日にハ右同斷なり

同十三日　半晴南風亥

一今夜赤道直下を過兩三日以來船中呑水濁る飯ハ赤飯のことし日曜日ニ付船上におゐて説法有

同十四日　晴南風子

一今日船將來て物語もを古へ航海もるもの此赤道直下を過る時ハ海中の王を祝もる由にて數多の酒を海中ニ投し又船中におゐてハ各清衣を着して大ひに酒宴を催し又壹人を海中ニ入潮に濡れし儘船上ニあゝ是を海王と稱し酒をもゝめ祭ゞし事あれとも百年以來航海大ひに開らゝ右よふの事を止といふ

同十五日　半陰南風丑

一船ハ東南に走今曉右のりたに當りて小島を見る名をアンノボントと云辰の刻頃より未の下刻にいたる迄の間海面に黄なる泡多し是ハ亞米利加の中にガンベルと云大河有其所より流れ出る水を云此海上より右河まて凡三百里餘と云

同十六日　晴南風寅

一船中におゐて異人とも劒術の稽古をゝす其仕よふハ前同斷あり今宵月そくを見る凡五分程りけゝあゝら月海面ニ出酉の下刻にいたり常の滿月となる我國にて昨十五日の夜半に月そく有なり

同十七日　半陰南風卯

一今日ハ海上大ひに濁水あり是亞弗利加國にて第一の大河洪水にて其下流なる由其河をカンガウと云夜亥の刻頃よりロウアンダまての石炭不足の由にて蒸氣を止是よりロウアンダまて帆計にて行由右の處まて此

處より百餘里と云ふなりるに兎角逆風にて着船の日不定に付是迄水壹人ニ付一カルロンの處半カルロンに減も是船中呑水の貯乏しくなりし故ゑ是迄ハ船卯辰の間に走ル所に右逆風に付夜半ゟ申酉に向て走

同十八日　半陰南風辰

一今日スクルフを海中より上ル船ハ申酉の間に走或ハ辰巳に向て走午時頃より右のりたに陸地を見る是亞弗里加の地方なり此邊海面に其形ち鮪子に似たるもの甚た多く海上敷りことし亞名セイウエイと云其大さ壹尺位より大なるハ五尺餘に及我國の海月の類ゑ

同十九日　曇少雨東南風巳

一昨夜半少しの風もなく因て大洋中に小碇を下ス今日にいたり呑水彌乏しく去れとも日本人ハ食事後にハ一と口の湯を呑て口中を濡らもといへとも異人水夫にいたつてハ是まて呑水を貯ひ置し水桶に水垢の溜り有を指にて是をとゞ嘗るなり誠にあゞれなる有さまゑ

同廿日　陰東南風午

一此邊夜中潮の光り甚たし夜半頃スクルフを下し蒸氣を相用此石炭を少し殘し置ハ入港の時にいたつて順風にあらされハ港口にて風を待ち入港もるゑ風なれ時ハ幾日も追手の吹をまち港口に滯船もといへとも軍艦におゐて石炭盡きて港口に追風を待事ハ各國ともに大ひに恥もる所なり因て外聞を恐れ港入の石炭を少し殘置しに最早間近に相成因て再ひ蒸氣を用ゆ是等ハ何れも船將私欲甚た敷皆儉約よりおこゞし事ゑ

同廿一日　曇東南風未

一未の刻過より右のりたに陸地を見て走其より申の下刻にいたりてロウアンタ港に着船も港右の方に臺場有夜戌の刻ロウアンタに出火有船上より遠見も

今正午の測量より當港まて四十里南八度四十六分東十三度二十分

同廿二日　曇午後晴申

一今朝にいたり船上より四方を見るに海岸にハ人家凡百軒計又椰子の大木多し山ハ大樹更になく何れも赤土山計之此港ハ少しの入江にて海門ハ西北に向ふ又港内に異船十八艘碇泊も内米利堅の軍艦四艘佛蘭西の軍艦壹ポルトガル軍艦二英吉利軍艦壹餘ハ不詳又小舟多し出て魚漁をなも辰の刻ナアヤガラにて祝炮を發す外米利堅四艘の軍艦ニてもおなしく祝炮も此ロウアンダはポルトガル領にして人口白五千人黑壹萬四千人餘と云土人小舟に乗し魚類水菓子其外種々の品を持來因て少しの品を調ひ見るに至て下直なり其品オレンジと云我國の大なる橙に似て美味なり是廿五セントに其數三十二又赤鯛多し長七八寸位の鯛十セントに十二三枚之土人ハ其色甚た黑し常の黑人に十倍もり皆肉肥太にして眼大なり眼中ハ金色に光り唇ハ上下ニまくれ甚た厚く眉毛の間の鼻の上の所に八の字のことき高き皺有鼻ハ左右ニ開らきて俗にいふ獅子鼻の甚た敷にして惣身ハ黑塗の如く掌足の裏ハ黄白なり髮の毛ハちゝれ長さ壹分計毛色ハ白赤く又ねずミ色なり其形ち實に畫書ける惡鬼のことし衣類過半ハ腰より下ニ少し計の木綿切れ等を以卷き腰より上ハ素肌なり尤も衣服を着もる時ハ西洋布等の筒袖なり婦人も其形ち同斷衣類ハ右の木綿の類を腰の所ニ卷き上ハ風呂敷のことき四角の切れを肩の所より膝の邊まて下ルなり又土人の乘り來小舟ハ長三間半餘横貳尺計にして丸木をくりて作りし之午の刻過米利堅軍艦よりコモトール來ルよつて兩度祝炮を發も右米利堅四艘の軍艦ハ亞弗利加詰の軍艦にして二年交代と云内コンストリーシュンと云船にコモトール乘船有此船ハ先年我國に來りしと云此船申の刻過當港出帆も是近海順見の爲なるよし當港ハ北方に向ひけれとも赤道の南なれハ太陽北方に有因て我國の南向ニ異ならす夕刻英船貳艘佛船壹入港も英船壹艘は蒸氣艦なりポルトガルより此地定詰のコンシュル交代に付蒸氣船に乘し着船もよつてポルトガル軍艦三艘又港内に臺場三ヶ所に有何れも祝炮を發も

同廿三日　曇雨酉

一此亞弗里加ハ象の多き地にして土人是を遣ふゝ象を取にハ原野に落し穴を掘りて其上に獸肉を置是を啖ひんと來りて右の穴に落其時ハ大ひに奮怒し勢ひ盛んにして近寄事不能其後四五日を過ければハ空腹に絶えりぬ大ひに勢氣おとろい其時にいたつて獸肉其外の食料をあたふるに其恩義に感し人間の意に隨ふと云此象と云ハ至て義心の獸と云又象を遣ふにハ棒にてうち叩きし位の事にてハ自由にならさるによつて鳶口を持て背上に乘り右の鳶口にて象の頭上にさし込て行方に首をまけるゝ去れとも血ハ更に不出深くさしたる時ハ少し血のにじむ計ゝと云又如何なる疵にても翌日にいたれハ疵口癒て常のことしといへり是多ハ虎を取に用ゆ象の背上に有て鐵炮或ハ鑓の類にて打殺ゝうち損したる時虎怒りて飛かゝるといへとも象ハ鼻にて是を卷き上る故に其うれいおしと云又駄鳥といふもの有大きさ馬より大にして翼を切て荷物等を

積馬のごとくに遣ふと云又當國の猿ハ其尾いたつて長くして壹尺四五寸に及午の刻御三公御上陸有申の刻御歸船午の中刻昨夕着船ポルトガルコンシュル上陸ニ付ポルトガル軍艦三艘陸臺場におゐて炮祝も此ポルトガルの人種ハ史那國と同種おり因て其顏能我國に似たり

同廿四日　曇亥

一日々船中におゐて我等釣ゑをおすに赤鯛其外數多の小魚類を得る當所ハ至て魚類多き地ゝ土人魚類を食も又食料にハ唐もろこしの粉を最上とも去れとも此國に不產皆ポルトガルより送るゝ其價高直にして常に食もる事不能病氣其外ハ大馳走の時求之食もと云ポルトガルハ慈悲薄き國にして是を多く不與して土人を遣ゝ土人又愚にして少しの食料に其身を任せ終日立備をおし若し用事を怠る時ハ棒にて打叩れ遣ゑるゝゝ又給金を取奉公人となる時ハ十人或ハ貳十人位鐵の鎖を以首の所珠もつかれになし才領壹人附添荷物等を運送さもるゝ是も右同よふ怠る

時ハ棒にて叩く實に牛馬の取扱りたに異からす是を又壹人にもかし置ハ何國ともかく逃失せ行大國にて終に其もの尋る事不能因て右のことくにつかき置と云又額に入墨有尤も面色甚た黑して分明からされとも能く見るに何れも入墨有是國々出生の所の印しを入墨もる由また此度渡來の日本人ハ新開の國にて人を喫ふと云て大ひに恐れ逃る我等口をあきて是を追ふに皆大聲を發して泣叫ふ其愚かる事是にて知るべし此港ハ亞弗利加國中にて第三の港と云

同廿五日　晴亥

一辰の刻過より上陸市中を遊歩も碇泊の所より海岸まて貳里餘之扱海岸より見物人群集して何れも前にいふ黑人にして素肌素足等多く日本人の前後に爭ひ來りて見物もしるるに其臭香甚たしく實に鼻をつらぬき又譬る物なし去れとも黑人ハ少しの遠慮もかく近き來各大ひに迷惑をり尤も市中所々辻々にポルトガルより日本人上陸に付警衛の歩卒を出し置見物人を制もと云共見物大勢にして互にあらそひもゝむ因て警卒の歩卒四尺計の丸く削りたる棒を以見物人を打叩くといへとも見物の黑人ハ牛馬にひとしたもの故に是も不恐尤も棒にて打時ハ少し散亂して又集り來禮義を知らさるもの故ニ刀の柄を握り或ハ衣類を引其うるさき事言語に絶したり因て亞人の敷に隨ひ各口をあきて是を追ふに黑人とも大ひに恐れ八方ゟ散亂し其後ハあまり近つく事をせす又往還に黑人の家作有種々の商賣をかもも家作ハ只地上ゟ四本の木を立上ハ椰子の葉をならべて家根とし下ハ敷物なくして土間ゟ直に反物或ハ小間物魚類其外諸品ともにならへ置右の土間にて食事をなし寢伏しもいたすゝ又我國の辻駕籠の類有長壹間横三尺計にして中に腰を懸るよふになし四方ゟ壹尺餘の椽を付ケ其四すミより糸にて長さ貳間半計りの丸き木ニ結ひ又上より唐さらさの類にて四方ゟ我蚊帳のことくに下ル是中の見えさる爲になす右の丸き木ハ貳本にて左右の肩ゟ懸るゝ扱て其よ

り山上に至り見るに此所ハポルトガルの陣屋の類にて土塀山の半腹を卷所々に門を作ル廓内至て廣大なり又數多の大炮を備ふ此廓内にハポルトガルより定詰の役宅多し中に壹軒コンシユルの宅有大にして美を盡せり門前に七八人の兵卒ゲベル炮を持て警固す扨て此地ハ先年大地震有其節この廓内も大ひに破損し其後修復もいたさす未た以大破におよひし儘なり是を以見るに古へポルトガルハ盛んなる國なりしが今ハ國力おとろひ大ひに沒落せしと見ゆ又海岸にハ黑婦數多出て衣類等を洗ふに海中に衣類を入れ置き潮のまゝにて大なる石をたゝくなり右よふに度々いたし洗ひさらすなり總ての品を持運ふにハ何品にても頭上に乘せて持運ふ之又大なる生魚等を頭上に乘せ行あり直に頭に乘せ血ましりの水の頭上より顏に落るを手にて是を拭ひなから行有さま實に獸類にもおとりし有さまと

同廿六日　半晴子

一同港滯船日々土人小舟に乘して諸品を持來ル我れ其形ち椎の實に似たるものを求む其味も又椎に類す是松の實なりと云此地ハ熱國故に我朝人ハ何れも單物等を用ゆるといへとも當時ハ寒中の由にて土人ハ燒火をなし寒氣を凌くよふ子之此港の市中にハ呑水更になく皆三十里外より運送す誠に不自由の事之今日御三公御入湯ありと云共其湯五升計にして我等にいたりてハ入湯をなす事不能又日々船中に石炭を積ミ入る小舟にてハもの〳〵しからさるに因て今日より大船に積ミ來る夕刻ポルトガル軍艦三艘共に大ひに大炮を發す

同廿七日　半晴丑

一同所滯留今日ハ日曜日に付説法有當港に日々に入船あり今日にいたり各國の船合して三十餘艘に及此地の黑人を買ひ求むるに壹人の價ひ二十ドルといふ當所ハ何れもポルトガル言葉にして英言にてハ更に不通ポルトガル語ハイスパニヤと同語なり此ロウアントはポルトガル語と

ハ少し異なり

同廿八日　半晴寅

一同港滯留今朝英の蒸氣軍艦壹艘入港す申の刻當港詰米利堅軍艦出帆に付米利堅六艘の軍艦におゐて何れも數百人の水夫繩階子に登りクルバイ〳〵と大聲を三度はつし其後祝炮す扨て我國出帆の後ちハサントキス島の外何れの熱國にても更に蚊をしらす

同廿九日　曇卯

一同港滯留今朝米利堅の蒸氣艦壹艘出帆祝炮ヲ發夕刻ポルトガル當港詰の軍艦先日渡來に付是迄の軍艦交代として開帆す外ポルトガル軍艦陸臺場等にて祝炮す當港詰のものハ何れも家内不殘引うつりの由

同晦日　晴辰

一申の刻當港開帆船中におゐて音樂を奏し祝炮を發す外米利堅の軍艦にても祝炮す船北西の間ゟ走凡壹里計にして港のかたにおゐて船留の大炮を發す因て蒸氣を止港の方より橋舟に米利堅のもたを建て來る有因てナアヤガラにても橋舟壹艘を下し右の舟を出むかひ海上におゐて行逢ひ其用事を聞ゑしかるに此船中乘込のもの調物に上陸し取殘されしもの有因て是を送り來るゑ尤も出帆半時前に人寄せの大炮を發す此大炮にて上陸せしものハ何れも歸船する事ゑ右の大炮を聞て出帆前に歸船なきものハ其儘にさし置出帆し再ひ歸船からさるよし去れとも此度のものハ全く私用に上陸せしものにあらさる故歸船相叶ひしと云同刻英國の商船壹艘出帆も互に旗を合も

七月朔日　曇雨南風巳

一今朝船ハ未申の間ゟ走船中大掃除をなも又日本人ハ神祇を敬拜もと聞然るに今度乘組の人々に壹人も是を見もと異人いへりと異人ハよく神を拜ス

同二日　半陰南風午

一今日浪靜りにして海面油を流せりことし壹後數十人の水夫とも鐵炮に玉を込め帆ケタに的を懸ケ是をうつといへ共更にあたらぬ二三十放にして中り一放位なり的の大さハ尺貳寸位にして其間數ハ十五六間計なり

同三日　陰南風未

一今日も昨日同よふ炮術玉うち有夕刻船の側に其色薄黑き海獸浮ひ出る大サ五六間計に見ゆ其名審ならず

同四日　曇南風申

一船未のりたに走海面に大魚の集るを見る其間貳里餘に及

同五日　半陰南風酉

一今日兵卒の炮術稽古有的ハ紙にて人物を作り大さ壹間餘之

同六日　晴南風夜半雨戌

一夜子の刻過より俄りに黑雲起り南風猛烈にして船の動搖甚た敷去れとも暫時にして止ミ衆人大ひに安堵せり此時空中數多の光り物飛行し海上に落或ハ船上に飛來つて帆柱等に當りて碎けるも有碎れハ直に消失甚た奇之此光り物風の靜るにしたがへて不見其名を詳にせず又此邊ハ北風ハ暖にして南風寒なり

同七日　晴南風亥

一船ハ南方に走今朝船の側にイルカと云もの數多集り其集る所凡七八里の間に及

同八日　晴東南風子

一今日より浪高く船の動搖つよく今宵はしめて南極星を見る圖下のことし◇此中を極とせる由

同十日　曇西南風寅

一今日少し帆を用ゆ船中におゐて戰爭の調練あり日を追て南方に走り隨て寒さ強く何れも兩三日前より小袖を著用せ

同十一日　陰朝西風午後東風卯

一今朝遙に壹艘の船を見る巳の刻頃右のりたに英蘭貳艘の船に行逢ふ旗を合此邊ハ南海より潮うち來其流れ甚た早しと云今日異人船上より鳥を釣るその形ちハ鳩に似て口ハ鴈のことく毛色黑白あり此鳥亞の大獵海より此邊に多く住も船の航せし後に群り來て食を尋るゝ午後喜望峰の沖を過空中に雲なき時ハ海上より喜望峰の頂きを見るといふ是もなほち世界の最も高山にして白雲常に其頂きを包ミ又其雲散もるといへ共四季ともに雪絶えもして雲のことしといふ其高き事直立貳萬三千フートと云此日空中黑雲殊に霧深くして此大山更に不見申の刻過壹艘の船を見る此喜望峰を亞國にてはケイブグーデホップと云夕刻より蒸氣を不用スクルフを水中より上ル

同十二日　半晴東風辰

一船ハ東南の間ゟ走帆計にて蒸氣を不用故船不疾夕刻より東風烈船甚た疾し右のりたに壹艘の船を見る此邊今ハ初春なりといふ

同十三日　陰東風猛烈午後雨巳

一今朝船ハ寅之間ゟ走甚た疾し動搖又つよし此喜望峰沖ハ高波の名所にして其浪の高さ直立五十フートに及逆浪うち來る時ハ大山のことく其後ハ又深谷に異ならゞ白浪の漲る有さま實におそろしく又絶景にして筆紙に述りたし今朝壹艘の船を見る今日も壹ゟの大鳥を取る毛色背の所ハ黑白にして腹ハ白く亞名をゴゲと云翼の丈ケ壹間餘左右の翼を開くとたゝハ凡三間計に及翼又三ツに折れて自由をなも

同十四日　晴北風烈午

一午後より順風にて船行速なり船ハ東方ゟ走

同十五日　晴北風未

一船東ゟ走今朝にいたり風靜にして船行不疾又船の動搖甚し辰の刻頃遙の右のりたに貳艘の船を見る同刻過此ナアヤカラと同方ゟ走ル船有夕

刻にいたりて右の船を越せ是和蘭の船なり

同十八日　晴東北風戌

一船ハ東南の間に走此邊海中に暗礁甚た多し因て船を東南の間に走るよし

同十九日　晴東風亥

一日々波高く船の動搖強くして夜中といへとも纜付て寢る事不能

同廿日　曇雨東風夕刻より西風子

一船東南の間に走今朝雲霧深くして海上更に不見正午より船丑の方に走夕刻にいたり風西に替りしより烈風にして船行甚た疾し酉の下刻頃帆網切れけれハ大ひに周章して水夫とも大勢帆柱に登直に帆網を取替る其業の早き事實に感心せり戌の刻過より動搖彌甚しく船中器財道具の覆る音夥しく且身を置に所なく横に臥せ時ハ左右にころ〻夜中といへ共少しも眠る事不能其艱勞筆に載せあたし

同廿一日　晴西北風丑

一船ハ東のりたに走順風に付横帆を出せに夕刻其帆ゲタ折れる水夫とも即時に是を取替る

同廿三日　曇小雨西南風卯

一船東方に走昨日より浪靜りにして船の動搖少し止然るに巳の刻過より風四方より吹廻し帆ハ更に風を不含是颶風の催しといふ夜に入右の風靜まり北風となる

同廿四日　晴北西風辰

一今日順風にて船行甚た疾し午後海上白浪を卷上ル亞名をボイルと云我颶風なり此颶風ハ異人も大ひに恐るゝ所にて右颶風の大なるに至てハ海上凡三里餘も卷き如何なる大船といへとも是を防くに術なし只バルモを以是を除け走るといふ我等乘船のホウハタン昨年我朝に迎船に渡海之節大洋中にて右の颶風に逢ひ船を大ひに破損し蒸氣の車をうせい

とられしといふ

同廿五日　雨北西風巳

一船卯辰の間に走此近海に又恐るゝ風有亞名をサイベルと云是昨日のボイルの類と云ともボイルハ我颶風にて卷なゐら吹行風故防きよしといへ共サイベルハ四方より風を吹廻し其所を不去因て此中に船を乘り入る時ハ蒸氣船にゐらされハ出る事不能と云此風ハ印度海に限るよし今日此所に有れハ翌日ハ又所をうつし所々に動て卷く風なり甚た恐るへし

同廿六日　雨西南風午

一昨日よりの降雨衆人雨水を取手足等をゐらふ又船中に貯し呑水大ひに濁ル

同廿七日　半晴西南風未

一今朝米利堅の商船を見る是吏那國に行船といふ同刻西の方に虹を見る

辰の刻過天俄に曇大雹れ降る

同廿八日　半陰西南風申

一船東方に走昨夕より今日にいたり晴雨不定にして終日に度々變も快晴又暫時にして雲を起して大風雨となる

同廿九日　晴西南風酉

一今日も前にいふ大鳥五羽を取大なるハ翼の渡三間餘におよふ此大なる水鳥ハ亞名をゴゲと云小なるはブベと云竪五寸巾三寸計の銅板に横文字書たるを針鐵にて右の大鳥の首に結ひ付夕刻にいたりて放之

八月朔日　曇西北風戌

一午の刻過シントボール（島名）スアキランを遙りに見る遠見我國伊豆の大島に似たり是無人島の由又島の長四里餘と云此地に諸病に能き溫泉有因て日本人の爲に此島に船を寄せ入湯をいたさせんと言けれとも何れも歸國を急きし故に是を止又少し隔て一ッの島ゐり名をアムステルダムと

云シントポールスアキランハ南緯三十八度五十三分東經七十七度三十七分ニ所に有

同二日　曇西北風亥

一昨夜中右にいふシントポールスを過今朝にいたり更に不見

同五日　陰西北風夜雨寅

一船東北に向て走ホウハタン以來毎朝船中掃除をなもに船の上段甲板所ハ桶にて水を流し又壹尺三四寸計の我國にていふ礪のことき石に四方より繩を結ひ付是を兩人にて持ち双方に動ゐし洗ふ又木を以我鍬のよふに作り水を押し流し其跡を麻繩を多く集め廻り壹尺計になし丈ケ三尺計に作るを持て水を拭ひ取なり

同六日　曇北西風卯

一船將の物語に米國にハ數多のヲビヤールト有といへとも蒸氣機關等の製造はヲウヨルク、フエルドヒヤを專一とも又蒸氣艦を造るにハ船を作りて後ちに蒸氣の機關を造る方よしと云或ハ帆船を蒸氣船に造り替るも有といふ

同七日　晴北西風辰

一船東北の間に走今日より豪斯多辣利（ヲウスタラリ）海に入ルと云

同八日　晴東風巳

一今日快晴にして我國の春過のことし且海面穩かにして油を流すに異ならす昨夜半より風靜にして船更に不進因て今朝にいたり蒸氣を仕度し又水中にスクルフを下し晝後より蒸氣にて走七月十一日に蒸氣を止めてより今日まて貳拾七日に及

同九日　晴東風午

一船丑の方に走今日快晴にして甚た暖かなり

同十日　晴東南風未

一今日に至り海上に群れ居る水鳥更に不見此水鳥ハ熱帶中にハ甚た少な

り寒海に多あり

同十一日　晴東南風申

一昨夜半より順風にして今朝辰の刻過蒸氣を止めスクルフを上ル船ハ東北の間に走甚た疾なり

同十四日　半晴東南風亥

一午後右のかたにキリスタムスアキラン島ノ名を見る是瓜哇と隔事亞の貳百里計にして南緯十度五十六分東經百五度二十五分の所に有此島竪九里横六里之と云午の下刻にいたり右の島に隔る事凡四里計の所を走去れ共山上より海岸に至るまて雲霧を覆ふて委敷見事を不能是無人島の由海岸にハ至て椰子の多所と云ふ古へ英人此島に渡來し開發に及しか土地惡し故に止むと云船上に貳三羽の鳥飛行するあり其形ち我朝の山鳥に似て尾ハ白く長さ貳尺餘之

同十五日　晴東南風子

一巳の下刻に至り遙かに北の方に呱哇の山を見る申の刻頃にハ瓜哇と海上貳里計を隔て陸地に隨ひ北のかたに走陸に近き時は十五六丁に不過河岸ハ何れも山有て其高にいたつてハ直立凡三千フート餘に及も有又山の麓海岸にハ數百巖石有て其高ハ十丈餘にも及白波のうち來て巖に碎ケ又山ハ峨々として草木青々と繁茂し其眺望美景にして筆に述かたし未の下刻に至り左のかたに小島を見る是をコーストシエンマツレアキランと云此島人家貳拾軒餘と云中に高山有名をコヽトウと云此島ハ瓜哇の西に有て海上凡六里計を隔夕刻に至りて此島と瓜哇の間にすゝミ此時にいたり揖を丑のかたに取て走夜に入てハ四方更に見へす亥の中刻過遙かにエンジヤボンユノ常燈を見る此所より凡十三四里を隔子地名の刻過右のエンシヤボンユに至り陸より壹里餘を隔て碇を下し滯船す戌亥のかたに稲光り甚たし

一今正午の側量よりエンシヤボンユまて百里南緯六度三分東經百五度五

十六分又蘭語にて此所をアンエルと云

同十六日　晴東風丑

一此エンジヤポンユハ湊にあらす只少しの入江ゝ此所に和蘭の商船貳艘碇泊ありしか貳艘とも今朝出帆す又米利堅の商船壹艘來ル是日本より米國ゟ歸船のよし又未明より土人小舟に乘して種々の品を持來る其品ハ猿小鳥類バナヽア椰子さつま芋玉子御所芋唐なす眞桑瓜野ひるきうり或ハ其形ち柿に似て色黑く花落の所に櫻の花のことき（此實の名をマグステームと云）かた有其味至て美なり又木鼠に似て至て尾長く其色黃ゝアンペラの敷物冠り笠等ゝ何れも其價高直ゝ扨人物ハ顏色薄黑く髮毛黑く丈ケ長し頭ハ唐更紗の類にて包ミ又男女とも齒を黑く染め衣類ハ西洋布等の筒袖股引にて何れもはきものを不用尤此海邊の下賤のもの共ゝ海岸ハ草木大ひに繁茂して人家壹軒も不見遙か右の方に一ッの高き常燈臺有此下に大なる人家壹軒有餘ゟ草木に隱れ更に見へす此草木の中に過半ハ椰子の大木ゝ

此エンジヤポンユより戌亥のかたにあたり三里計を隔てブレンシスと云ふ島有是無人島のよし辰の下刻エンジヤポンユ開帆針路を東北の間ゟ取て走開帆前に和蘭のコンシユル外兩三輩船中ゟ來ル風俗米利堅人の類にて金のエポレットを付り劒を帶すエポレットハ左の肩計にして右になし扨船ハ陸地に隨て走午後より東のかたゟ向て走此近海にハ數十餘の小島有又海上數多の小舟帆にて走或ハ高山にハ霞のかゝりし其風景至て美ゝ昨夜半に碇を下したるも此近邊ハ小島暗礁等多して夜中ハすゝミかたく因て碇を下し且食料等を積入れし由未の刻頃和蘭船貳艘に逢ふ壹艘ハ蒸氣なり扨て船ハ進むに隨ひ小島多して其數百餘に及去る人の物語りに此近海の風景ハ我か奥の松島の大なる景色なりといふ夜に入船進ミかたく（地名）バタヒヤまて十餘里を殘して小島の間ゟ碇を下して滯泊ス海上至て浪穩かなりエンジヤポンエの人口ハ不詳とも凡壹萬計といふ戌の刻過より音樂を奏し船の上段甲板所におゐて士官集り

て躍りをなす此滯泊せし所を咬嚼吧（カラバー）と云エンジヤポンエより此所まて七十里寒暖計八十二度

同十七日　晴寅

一辰の上刻碇を解て直に掛を東南に取て走巳の刻過拔答費亞（バタビヤ）湊に入陸より貳里餘を隔て碇を下し船を止湊内にハ數百の和蘭船碇を止て滯泊す此湊の一條ハ委敷末帳にしるす扨て當國ハ炎熱故に四季ともに雷多く今曉より度々雷を催す又稲光り甚たし午後より快晴暑氣甚た敷寒暖計八十八度にいたる此湊の海岸大木繁茂し人家ハ凡十軒計なり左のかたに三里計を隔てヲビヤールト有側に臺場有て大炮を數多備ふ又此所の商人小舟數艘に乘して來

同十八日　晴卯

一辰の刻和蘭の蒸氣軍艦出帆ニ付和蘭數百艘の船におゐて水夫縄梯子に登り大聲を發すナアヤガラ昨着船の節大炮を發し祝すへきの所日曜日に付今未の刻祝炮二十一發す畢て和蘭の陸臺場幷軍艦ニゐも米利堅の旗を上ケ祝炮す又ナアヤガラにても和蘭の旗を上ケ大炮十三發も今日も數多の商人小舟に乘し諸品を持來ル野菜水菓子の類ハエンジヤポン（地名）ユの類故是をしるさす其外我國の產物を少々持來ル西瓜ハ大にして其味至て美なり申の刻此湊定詰の米利堅コンシユル來ル因て祝炮を發す海上に我國の鳶ニ類したる鳥多し亞名をフヲルといふ其毛色首の所計白くして餘ハかき色之酉の刻頃俄に雷雨甚しく暫時にして止其後大ひに暑氣凌よし此地人口十壹萬八千三百人内歐羅巴貳千八百人史那人貳萬五千人土人八萬人黑奴幷亞剌比亞人千人と云

同十九日　晴辰

一當春より史那國と英佛の兩國と戰爭有此はしめハ史那國におゐて罪なき英の使者を殺害す因て英國の女王大ひに怒り數艘の軍艦を催し佛國また是に加勢し兩國の軍艦直に北京に責入よつて史那國におゐても大

軍を催し防之といふ其中に韃靼の勢有猛勇にして能く敵を防くといへとも英佛の軍に敵しかたく遂に敗軍におよひ其所を退陣す因て英人大ひに亂法せりと云佛國ハ軍令嚴にして諸卒にいたるまて法を犯さすと云此節兩國の軍勢上陸し北京の邊に屯すといふ英國ハ當時强國第一にして其人氣甚た惡しく何國におゐても不法をなす因て各國とも英人を惡むもの多しといふ又英人常にいふ英領ハ年中晝なりと是諸方ニ領分有故なり其大言甚た惡むへし扨て當港にハ小舟に賣婦を乘せ碇泊の船にいたり是をすゝめ賣る其價ひ一ドルと云又我朝人華盛頓(ワシントン)ニ上陸以來味噌醬油更になく只鹽を以て食事をなし來りし所に此地に我國の醬油渡り有て異人是を調ひ來我朝人に右の醬油にて煮たる魚を出す各大ひに悅ひて食之醬油ハ三合入程の德利に入れ上の所に横文字にて日本醬油と書し其下長崎改濟の札有其價四半ドルと云夜に入て氷を食す是米州のヲウヨルクより運送する氷といふ日中ハ炎熱難凌と云其夜ハ凉風吹來て大ひに凌よし又此地に我國の事をしるせし新聞紙有長崎詰の英のコンシュル江戸詰のミンストルに用事有て横濱港ニ來り其より江戸ニ行んとして川崎六郷川にいたり河を渡んとす時に日本人右河場の役人より今日ハ大水故に旅人ハ皆川留なりと云て斷われりコンシュル大ひに怒を發し忽ち腰銃を取役人及揖夫を射殺さんとなす其後コンシュル怒て詮なしと思ひ更に川崎驛に歸り官舍を尋んと欲して所々徘徊せし所に役人是を見付退き歸る事をすゝむ時に傍の酒店に醉客有て是を惡口せしによつて又新に怒を發し甚た粗暴の體にて大ひに日本の役人を罵る川崎の本陣にいたり宿に就き婦を買へりしかるに此婦異人を嫌ひ其房室に入らさりしかハ又怒をなし杖を以て婦を打擲す右再三の粗暴不行屆のいたし方によつて江戸に有英國の事務宰相アルコク(人名)大ひに是を異見せり世上の噂さに此コンシュル粗忽の振舞をなすのミならす火器を日本役人に向けし等の惡事かならすコンシュルの職を除かれ英

國に送り歸さるへしといへり此事ハ西洋千八百六十年六月十六日にありし事といふ

同廿日　晴巳

一今辰の刻御三公御上陸ニ付御迎として河蒸氣船來ル我れ等にいたるまて直に右の河蒸氣に乘し行事凡二里計にして波戸場有是瓦石にて陸地より貳里餘をつき出したるゝ二ヶ所に出したる間に船をすゝませ行此時にいたりて和蘭の軍艦陸臺場幷ナアヤガラ船ニも祝炮す扨て海岸にハ數千の見物群集し又我朝人の迎として許多の馬車來且兵卒數百の警衛あり御三公の御車ハ御壹人乘にして馬四疋なり口取貳人左右に隨ふ其外ハ何れも貳人乘にして馬貳疋なり馬ハ至て小なり兵卒半隊を分て日本人の前後に隨ふ扨て進む事五六丁計にして大門有左右に黑き我か仁王のことき大なる人物を作り置其門より左右に高塀を搆ひ門内にハ數十人長き鎗を持て警固す是我國の見附の類なり其より凡十丁計にして史那町にいたる左の方に一ッの社有正面に額を懸ヶ文王の社と書し有又左右にハ數多の提灯有市中家の軒にハ何れも額を懸ヶ置なり其より又十餘丁にして伯公のやしろあり又すゝむに河の側に出其より川に隨ひ北のかたに走此河甚た濁水ゝ其より廿丁餘にして旅館にいたり其家作ハ我國に似て屋根にハ瓦を置大なる長屋五棟有中に又大なる家を造る惣數八棟にして二階作或ハ平家も有右の長屋を旅人の部屋とす當所の家作ハ總て右に順し我國に類す扨て各の部屋も定りけれハ氷水サンバン等を出す其後ち何れも入湯をなす其湯場ハ白石にて凡六疊敷計に造り其上より瀧を落すゝ扨て午飯を出すに其馳走料理數品にして華盛頓以來隨一の馳走なり殊に我か醬油を以煮焚せし故我朝人何れも其料理を食す又サンバン其外の酒を壹人ニ付三四本ッゝを出す食事中に度々料理を引替ていだす其時ハ一度毎に音樂を奏す又飯臺の上壹人に一ッゝの手洗ひ水を出す是硝子の丸き器なり其色五色にして甚た美

之我か朝人の中に手洗水の事を心得す兩三人是を呑し輩有異人側に有是を見て大ひに笑ふ又上陸中に雀鳥を見る史那人多ク來り各筆談をなす中に日本人の風俗を見て落涙をなすもの有因て筆を取是を開に日本の衣類を見て明の代を思ひて遂に落涙に及しと云史那人ハ何れも我國をしたふよふ子之又史那人の書に日本の武勇其名世界に高しと云此地土人ハ前にいふことく顔色薄赤黑くして髪毛黑く長し過半ハ齒を染め男ハ我國の坊主笠に似たるものを冠婦人ハ兩天の傘を用ゆるもの多し尤も我國の兩天とハ少し異なり女の衣類ハ四角の唐さらさにて卷き其上より又唐更紗の切れを覆ふ多くハ左まへに合すなり扨て御三公ハ王城ゟ御出有大門の前に騎馬隊數十騎劔を帶して列す家作ハ前にいふ類にして家根ハ瓦にて其建方甚た高しと云共平家ニして家の廻りに壹間餘の溝を掘り其外ハ要害等更になく常の家作の大なる計之是和蘭の次王官と云又土人ハ天秤棒にて荷ひ木陰等にハ荷をおろし水菓子酒菓子の類を賣り或ハ御膳駕籠を荷負ふも有或ハ鷄を三四十羽位兩足を結ひて肩に懸ケ賣るも有旅亭ゟも商人數多來ル米人ハ右商人等の取扱方甚た非道にして假令ハ其價五トルと云品を一トル半に直をつけ是を引かされハ其品を商人の面上ゟ投付ケ或ハ打擲をなし尤も此地かきらすロウアンダ等にても右同斷なり酉の刻にいたりてナアヤガラゟ歸船す

同廿一日　晴午

一今朝此所碇を解て東北の間ゟ走五里計にしてチビヤールトゟいたる此處ハ海門の内の小島にして又如何なる大船といへとも岸まて至ル扨て碇を下し石炭を積入此石炭ハ和蘭にて國用に貯置し石炭之といへ共此節史那國と英佛の戰爭にてシンガポール（島ノ名）等にハ石炭更になく故に和蘭國用の石炭といへとも無餘義賴によつて其中をわかち香港までの石炭を積之右のシンガポールといふハ英領の島にして爪蛙の北西に有虎多く有て人を害する事數度におよふ是によつて英人大ひに怒り大勢を催

し虎狩をなす其入用金七百萬ドルといふ虎壹疋を得るものゝハ其恩賞として三十ドルッヽを與へしと云去れとも未たに虎多く住して人を害すよつて國人大ひに是を恐るゝといふ尤も右虎狩をせし事ハ古き事なるへし扨て此瓜哇ハ地の卑き所ハ氣候あしき由にて何れも地所の高き處ゝ家作す故にバタアビヤ港にても海岸にハ人家少にして市街まてハ海岸より三里餘におよひ其高き處に家作す炎熱の國にして四季とも寒暖計ハ八十度より九十餘度までの間に有といふ夕刻チビヤールトの小島ゝ上陸す又米人大勢海中ゝ入て水泳す此處に臺場二ッ有丸く造る瓦石にて築建其外を土にて塗り此爪哇國ハ年に兩度ッヽ五穀ともに實のる所之と云

同廿二日　晴未

一土人大勢未明より來て船中ゝ石炭を運ふ石炭ハ笊籬に入れ兩人にて是を肩に懸ケてはこふ之此笊籬ハ我國にていふ藤にて作る之此石炭運ひの人足ハ罪人のよし國人魚漁をなすにハ網をうち又釣をなす其姿我か魚翁に異ならす又石炭を入れ置所ハ只四方に柱計にして家根を作り下ハ石を敷之是空氣の籠らさるよふになすもし空氣中ニ籠れハ火を發するの災ひ有と云辰刻過史那人十人計河蒸氣船乘して見物に來ナアヤガラ船ゝ乘うつり日本人の住所ゝ案内もなく入來ル因て船將是を見て大ひに怒り兵卒に命して是を船外ゝ追ひ出も惣て各國ともに史那人を輕蔑する事甚た敷して黑人を賤しむに勝れり史那人も又異人を大ひに輕蔑す夕刻我朝人大勢海中ゝ入て水泳をなす我れ等も同しく海中ゝ入に海底に其かたち丸く色黑紫にして長さ貳寸計の針のことき數本を生したる我國の靈螺に似たるもの有て我か足を三ヶ所計さゝれて大ひになやミけれハ速かに海中より上り其さしたる所を見るに黑きもの中に殘る因て早速小刀を以て是をやり出し其所へ藥をつゝしか三日計其疼ミ去らもして甚た難澁せり尤も我等計にあらす米人も數十人右のものに

さゝれたり其名不詳夜に入稻光り甚たしく暴雨よつて衆人爭ひて衣類手足等を洗ふ今日醬油を御調有て各に壹壺ッゝ被下置是三合入程の壺之其一壺の價我三朱ッゝなり

同廿三日　晴申

一朝和蘭人數多河蒸氣船に乘し來ル中に史那の婦壹人和蘭の婦七人又アラビヤ人貳人有此アラビヤ人ハ面色黑黃にして頭ハ髮の毛を剃て坊主之笠をかむり其上に唐さらさ幾重にも卷き衣服ハ下に西洋布を着用し上ハ唐更紗の筒袖にして前をあらはせす丈ケ長して膝の下にいたる帶の類もなく只上に懸ケし計之腰下ハ白き股引の上に又白き我國婦人の湯卷のことくに腰卷をなし又はきものハ板に革のもなを有是もきて足の甲の中程に其巾壹寸餘の赤き革を卷くなり未の下刻およひヲビヤールトの本島ハ御出有島の名をヲリンストアキランと云此所にカピテーン壹人リウテナント三十人兵卒百餘人在住す大工其外の諸職人三百人計有て各其業をなす何れも史那人なり又罪人貳千人餘當島に有て種々の業をなす蒸氣機關其外の奇工惣て米利堅國の類なれハ下畧も和蘭爪哇を一統するのもしめ此島を押領せし由此ヲビヤールトにおゐて魯西亞船を修覆する有是魯西亞國の西北より東の北にいたるに喜望峰沖にて逆浪の爲に船を損しけるよつて此地におゐて修覆をなし東地に趣く由自國を廻船するに喜望峰を廻るといふ是を以て其大國なるを察もゝし

夕刻大雷雨酉の中刻御歸船今日ハ港内ハ入船多其數十八艘に及

同廿四日　晴酉

一日々水菓子を食す椰子靈芝拓榴唐密柑ジャガタラ密柑西瓜等なり茄子大根きうり等を求めて鹽漬になす今日石炭を積ミ畢る夕刻より大雨此地ハ今暑中の由

同廿五日　晴戌

一辰の刻過ヲビヤールトを出船してバターヒヤにいたる我朝人十餘人上

陸す其もの歸船していふ去廿日日本人上陸の時料理其外ともの入用貳千八百ドルの由米國にて其料金を出せしと云終日蘭の婦人あまた見物に來ル夜に入音樂を奏し數十人の婦人來り船甲板におゐて躍りをなす又其の左右にハ數百の燈火を照らし何れも硝子にて作りし燈籠なり海上に映して實に美なり又同所ハサンパン等を出して大ひに酒宴を催し男女混しておとりをなす其所作ハ男の右の手にて前より婦の腰を抱き左の手にて婦の右の手を握り婦の左の手ハ男の肩の所ハ懸るゑ双方ともに腰の所を合て其儘にて四方ハ飛足柏子にて躍るなり是總て西洋の風なりといふ酉の刻過より大雷雨暫時にして晴夜中船上ハ螢飛來る暑氣甚たしといへとも蚤蚊の愁なし

同廿六日　晴亥

一巳の刻和蘭のアトミラル來よつて祝炮を朝より婦人數多來り船上におゐて躍りをなす今日太陽直上ハ來るといふ此地におゐて種々食料を積入又米を求其價一ドルに貳升ゑ

同廿七日　晴子

一未の刻過バタアビヤ港を開帆し北方ハ走當港入船より出帆までの入用金十日の間五萬ドルといふ此バタアビヤのヲビヤールトにおゐて積ミ入れし石炭ハ英國の石炭を和蘭にて運ひ來貯置し石炭ゑ是を燒甚た煙多し此煙の多きハ石炭の下にして燒ゑも煙なきを最上とす米利堅にてハ煙なきを船に用ひ煙有を陸にて雜焚に用ゆるといふ煙なき石炭ハかたくして燒時ハ其火氣甚た強しと云此地の石炭ハ一トンに付價十七ドルといふ但し一トンハ我か六石餘に當ル此ナアヤガラ船にて焚所の石炭晝夜にて五十トン餘におよふよつて蒸氣船にて航海するに日々の入用金過半ハ石炭なりと云亞弗利加の喜望峰邊にてハ石炭一トンの價二十五ドル位なりといふ午後大雨暫時にして止む

同廿八日　半陰雨東風丑

一船北の方ゟ走朝貳艘の船を見る四方陸地更に不見晝後に至り數十餘の小島を見る何れも草木繁茂せり無人島多し中にハ少しの土人住するもあり此海中ハ甚た暗礁多可恐所と云夕刻右之方壹里計を隔てボ子オアキランを過此時海岸に七八艘の小舟を見る是和蘭の領にして爪哇の中なりと云また左のかたにガスバアキラン有右の二島ハ大なりといへとも餘ハ數多小島有といへ共其名不詳

同廿九日　陰東北風寅

一昨夜半亥の中刻過より碇を下して滯泊す此海暗礁多して夜ハすゝミかたしといふ朝遙かに左ゟ壹艘の船を見る是暗礁に乗懸ケし船なりよつて針路を取直し右の船にちかつき其間廿丁計を隔て是を見るに乗込人もなく帆柱等に至るまて取拂ひ有是に因て船を返して北方ゟ走是米利堅船のよしミョシハ南方爪哇のかたに向てあり今日數多の海蛇を見る長三尺計其色黄にして黑き符有

九月朔日　晴西北風卯

一北方ゟ走右のかたに小島六を見る又貳艘の帆船を見る昨夜半子の刻過赤道の直下を過と云巳の刻英船壹艘に行逢其間五六丁を隔てはたを合す今日も數多虎膚の海蛇を見る此邊の海面に浮ひ居るなり其大なるにいたつて貳尺廻りも有尤も大なるは常に海底に有て大風雨等の時にあらされハ海上に浮ふ事なし此蛇亞名スヲツキと云夕刻より西のかたに稲光甚し

同二日　晴東北風辰

一船ハ北ゟ走海上に燕あまた群り有て船の側に來て羽をやすむ又壹羽の白鷺を見る酉の刻過壹艘の船を行越す

同三日　晴北風巳

一朝米利堅の商船香港より來るに逢旗を合高聲にて口談す右の橋に婦兩人を見る海上にあまたの蜻蛉を見る又我鶯に似たる小鳥壹羽船中ゟ飛

來る

同四日　晴東北風午

一船寅卯の間に走午後過左に七八里を隔て一ッの小島を見る昨今の兩日とも晝後大風を起し暴風暫時にして晴夕刻より船丑寅の間に走

同五日　晴東北風未

一船丑寅の間に走終日海上に飛魚數多飛其さま白き小鳥に異ならす遙かに多く飛ハ霞のことし夜戌の刻頃大ひに黑雲を起し電光甚し

同六日　晴東北風申

一船ハ丑寅の間に走午後英船に逢旗を合此はたを合する事ハ各國ともに海上におゐて行逢し時其國をしらせんか爲に合せる事にしてもし旗を上ヶ合せさる船に逢し時ハ海賊船と云てうち拂ふ由夜中日本人の房室に小鳥壹羽飛來其かたちハ鶯に似て至て少なり

同七日　陰雨東風酉

一船子丑のかたに走辰の刻過黑雲を起し烈風暴雨暫時にして止又降雨

同八日　晴東北風戌

一船北方に走兩三日動搖つよくして呑水甚た濁ル

同九日　半晴東北風亥

一船ハ昨同方に走午後三艘の船に逢又史那船六艘を見る是貳本柱にして帆ハ竹にてアンベラのよふにあミしものゝ何れも魚漁船にて貳艘ッゝ左右にわかれ帆を上ヶて綱を引行ゝ未頃より遙か北方に山を見る是史那船の小島にして船のすゝむに隨其數六ッ七ッにおよふ夜に入此島々を左のかたに見て走

同十日　晴北風子

一未明に史那人來て壹人乘船す是水先案内ゝまた數多の小舟に帆を上ヶ前にいふことく魚漁をなす今朝も左に島を見て走又すゝむに左右に小島を見て走辰の刻過より揖を西にとりて島の間に入此時イスパニヤの

蒸氣艦に逢ふ左右ハ皆山にして草木青々とし麓にハ人家まれに有て閑
靜にして其風景甚た美なり兩岸の間ハ七八丁より廣き所に至てハ十五
六丁におよふ辰の下刻にいたつて香港に着船し碇を下す此港の市中を
イクトリヤといふ是英國の女王の名と同斷之し由總て歐羅巴亞米利加
州等にてハ貴人の名を地名とし或ハ船號とす又名所の地名或ハ大河の
名を船號に用ゆるもあり扨て港の四方ハ皆山にして内にハ異船五十餘
艘碇泊し多くハ英船之山にハ大木なく港ハ東北に向家作ハ西洋の類に
なしたるもの多し北岸ハ家作我國に似て是史那人の住所なり其數六七
十軒有此所より河向まて壹里半計に見ゆ扨て着船後祝炮を發す英國の
臺場におゐても祝炮す土人ハ何れも史那人故に其顏面我朝人に似たり
衣類ハ筒袖股引なりといへとも仕立かたハ西洋におなしからす婦人も
衣服同よふなれとも男の筒袖とハ少し相違す下賤のものハ數多小舟に
乘し諸品を持來て商賣す然るに家内皆同船にて來妻ハ贍を押し子供ハ
揖を取子供六七人連れきたるも有小舟ハ其造りかた種々有といへとも
皆我國の虫籠に作りし船に似たり湊内にハ五ツの舟臺場有此イクトリ
ヤの市街ハ山の麓にあつて人家遠見凡千五六百軒に見ゆ海岸ハ平地少
にして何れも山に隨ひ家作す又史那の貧人多く有て小舟に乘し滯泊船
の側にいたり船より落或ハ捨なとする品を拾ふ乞食有其中に甚た哀れ
なるハ大サ壹間計の小舟に兄弟三人にて乘し來有兄ハ十七才弟七才妹
四才計にして兩親ともになく夜ハ此小舟を海岸につなきて休息し朝ハ
未明ゟ來て食を乞ふ我朝人各是を不便におもひて種々の品をあたへ遣
す船中に菓子を與へし人あり然に此菓子を頂き取て能き菓子を妹に與
へ其次を弟に遣し兄ハ菓子の粉になりたるを食す各是を感心す何にて
も頂き取時にはチン〳〵といふ是難有といふ事なるへし

同十一日　晴丑

一同港滯泊朝より小舟に乘して商人來米利堅一ドルの通用金此港にてハ

一割の引ケを取る十ドルの金ニゼ九ドルの通用なり又和蘭の四十セントを半ドルに通用す辰の刻頃より我朝人上陸す此港ハ諸色の高直なる事ハ世界第一といふ晝後英のコンシユル來るすなわち祝炮を發す船中におゐて御逢あり此コンシユルハ昨年軍艦ミスシツピーに乘し我國ゑ渡來せしものゑと云此コンシユルハ近頃まて史那の北京に在住せし所此度英の戰爭に付其處を退去して香港に來りしといふ因て戰爭の起りを御尋有然るに初發ハ種々混して一時に咄しかたき由當時英佛の軍卒ハ北京の側に屯し一旦ハ王城四里まてにちかつき陣を張つて戰爭におよひ四方五百餘里を燒拂ひしに史那より和を乞ひ退陣を申入是によつて英佛の軍勢ハ十餘里を退きて又陣を張數ヶ條の難問なすと云又當時の史那帝ハ年齡二十九才にして足ハ跛躄なり殊に婦人を愛し政事をおこたり甚た柔じやくなりといふ

同十二日　陰寅

一同港滯泊辰の刻橋舟に乘し上陸す波戸場石垣にして貳拾間計海中ゑ出し揚場の所ハ石にて段を作り有此所よりすゝミ行に右の角ハ米利堅商人の家作なり大にして美を盡せり此家に暫時休足し其より市中を遊歩す過半ハ史那人の住所にして家作ハ二階等多し往來にハ史那人菓子其外の手遊等を出して巾貳寸計の板に四文或ハ五六文と直段書をなし其品の側に札を立また兩替見世にハ數多の錢を高く積ミ上ケ或ハ五穀類を桶に入れて賣る有往來の商人賣聲等總て我國に類する事多し家内にハ書畫の額掛ヶ物等を懸ヶ又食事するにハ茶碗に箸を用ひ往來の辻々等ゑハ駕籠を下し乘客を待つあり是我國の辻駕籠の類にて駕籠の中に段を作腰を懸ケて乘るゑ棒ハ竹にて貳本になし左右の肩に乘す其棒ハ甚た長し市中所々に警固のもの有長壹尺五六寸計の棒を持是黑人なり又日本人を見物せんと群集する時ハ此棒にて擊なり又種々日本品を賣家あり此香港より廣東まてハ河續にて二十里ゑと云

同十三日　晴卯

一此港日々出入船數多なり午の刻和蘭の軍艦入港ナアヤガラにて和蘭の旗を上ヶ祝炮す其後和蘭の軍艦にても米利堅の旗を上ヶて再ひ祝炮す未の刻過より米の婦人七八人來船上甲板にて士官數十人右の婦人を相手におとりをなす當所にてハ菊朝顔鷄頭の草花を見たる計之水菓子類ハバタアビヤ同種の品多し外に柿有其味至て美なり午飯ニ海老を食す我か伊勢海老におなし

同十四日　晴辰

一米利堅蒸氣船午の刻過當所出帆す是日本ゟ行船にて御用狀出る昨十三日入港の和蘭軍艦ハ横濱港より來る船にて我國の風說を聞左にしるす御大老の御死去新小判鑄立ポルトガル條約の願濟フロイスハ未た御ゆるしなし御軍艦壹艘下田の沖にて沈沒し英幷フロイスの兩船長崎より琉球の間にて破船英人史那の戰爭ニ付日本におゐて馬四千疋幷食料をあまた調ひし由和蘭の上事官ドンクル外士官三人富士ゟ登山すと云横濱港嵐有て破損多し箱館港ハ竹内公御在勤の由又北京の風說にハ英佛北京を破り貳千五百萬ドルにて北京を返す對談中ニ由英の軍卒ハ甚た亂暴にして行所皆人家に入て金銀貴寶を奪ひ取婦人を見てハ强淫すといふ又史那ハ其國に叛するもの多有て軍を二ヶ所に起し其一ハ自ら中華皇帝と號して軍勢甚た强しといふ因て當天子咸豐帝ハ婦十三人を連れて立退んとせし所を英佛の軍卒に生捕られ右の婦人とともに一と間に押込有此上ハ英都ロンドンに送くるへしといふ又史那の婦人ハ足の小なるを最上とすよつて其甚た敷に至てハ歩行自由ならさる由又陰門の毛を拔もの多しと云男女とも手の爪を長くのゝし三寸餘に及も有上より袋を懸るなり

同十五日　半陰巳

一辰の刻過港内ニゆスクーチル船沈倫すよつて諸方より數多のたすけ船